

大和が師範～キラーマ
ウンテンと呼ばれた陰
陽師～

疾風迅雷の如く

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

キラーマウンテンと呼ばれた陰陽師だった大和雄山。ある日を境に引退し、学園都市の高等部国語教師とオカルト部の顧問を勤めていた。

しかし学園長に呼び出され、暴れる妖怪達を止める為再び陰陽師となるが…そこに待っていたのは深い陰謀と過酷な戦いだった。雄山はその陰謀や戦いに立ち向かい、事件を解決していく…

★この小説は小説家になろう様の方でも掲載しています。

☆なおこの小説と東方Projectをクロスオーバーさせた二次創作物は下のU

RLより

h
t
t
p
s
:
/
/
n
o
v
e
l
.
s
y
o
s
e
t
u
.
o
r
g
/
3
6
7
6
1
/

目次

序章 陰陽師復活

第1指導	始まりの始まり	1
第2指導	調査の始まり	9
第3指導	動き出す	20
第4指導	気と魔力	29
第5指導	吸血鬼少女の意地	37
第6指導	手回しとハンドル	48
第7指導	元マフィアの扱き方	56
第8指導	黒幕登場!?	64
第9指導	キラーマウンテン復活	72

第10指導 妖魔連合会への入り口

80

第11指導	妖魔連合会の門	87
第12指導	束の間の休憩	95
第13指導	黒幕登場	104
第14指導	未知の化け物	112
第15指導	キラーマウンテン覚醒	120
第16指導	始まりの終わり	133
1章 勇姿の影		
第17指導	協会の概要	144
第18指導	対立と協力	154
第19指導	もう一人の兄	162

第20指導	誘拐	171	第32指導	勇姿の出生	275
第21指導	犯人の要求	182	第33指導	尋問後	289
第22指導	雄山のやり方	189	第34指導	還らずの森で	297
第23指導	悔しさと思い	198	第35指導	正体	306
第24指導	再会	206	第36指導	経験の差	316
第25指導	イレギュラー	214	第37指導	第五世代との対面	
第26指導	勇姿という男	224	325		
第27指導	回復	232	第38指導	第五世代の能力	332
第28指導	長門と東堂	242	第39指導	逆転	341
第29指導	長門に説明	250	第40指導	章末	348
第30指導	キラーマウンテンの師				
258					
第31指導	扱きとその効果	267			

序章 陰陽師復活

第1指導 始まりの始まり

〔西暦2020年4月〕

世界最大級の学園都市、西智学園都市の高等部にて教師がいた。

「よし、今日の授業はここまでだ！わからないことがあれば聞きに來い……と言つても來ないだろうから明日解説するから今のうちに予習しておけ」

その教師は大和（やまと）雄山（ゆうざん）、26歳の独身。來月の始めに27歳になる高等部の国語教師だ。

「ユーザン先生、さようならー！」

「安藤、気をつけて帰れよ！ 夜道は危ないからな！」

「さいならつす、ユーザン先生！」

「おう、豊島も気をつけろよ！」

雄山は帰宅部が帰るのを見届けた後、とある部屋をノックして自分が顧問を務めている部活動に顔を出した。

その部屋の中には誰一人いなかった。

「やっぱいねえか……まあそうだよな」

雄山はため息を吐いてソファに座った。その部活は去年3年生がいなくなってから1、2年生が帰宅部になりたくないが早く帰りたいという理由からその部活に入ったまま幽霊部員となったのだ。それに部活動の内容も大したことはやってはおらず、実質的には年に4、5回くらいしか大きな行動をしていない。その活動も文化祭などの学校の行事に合わせたものとなっている。

「全くシャレなんねえな。オカルト部なのに幽霊部員がいるなんて」

そう、その部活動とはオカルト部だ。いくら西智学園都市が世界でも有名な学園都市とはいえオカルト部は不人気だった。その理由は科学的根拠があっても状況証拠があっても認められず、せいぜいネタくらいにしかならなかった。生徒達はネタにされるようなオカルトを集めても仕方ないと無駄だと悟り、幽霊部員となってしまったのだ。

「これじゃ仕事にならねえし、職員室に戻って書類纏めた方がいいかもな」

雄山はため息を吐きながらソファに寝た。

「その前に一休み一休み……仕事は寝ないと出来ないし、生徒が来るまで辛抱強く待っていたことにしよう」

生徒を待つという口実で寝るこの男、本当に教師なのだろうか？兎にも角にも雄山は眠りにつき始めた。

「ユーザン先生。ちーっす」

「こんにちわー。ユーザン先生」

突如、ドアが開き少しチャラ目の男子生徒と気弱な女子生徒が入ってきた。

「うおっ!! お前からまだ帰ってなかったのか?」

雄山は突然の来訪者に驚きの声を隠せず、2人に尋ねた。

「やだなあ……これっすよ。これ」

男子生徒はそう言つてとある事が書かれた紙を雄山に出した。

「おいおい、矢田そんな趣味があつたのか? 俺はノーマルの上付き合うとしたら同僚の佐竹先生と付き合うぞ」

雄山はラブレターだと勘違いして発言すると矢田は引いた。ちなみに佐竹先生は30代を超えているのに中学生と間違われる程の合法ロリの美少女先生であり、生徒達からも先生からも結婚したい教師No. 1の座に就任以来降臨している。いつか雄山は彼女をオカルト部に引き抜いて部員を集めようと考えている。

「ちげーよ! 先生よく見ろ!」

「ん? 俺の顔つてそんな怖いか? 長門、お前はどんなんだ?」

「ひうつ!!? そんなことは……!」

雄山は眉をひそめるだけでもチンピラが逃げてしまうほどの強面で気弱な女子生徒

である長門は悲鳴をあげて否定してしまう。しかしこれでも昔よりか遥かにマシな方なのだ。昔は夜道を歩いていると幽霊に間違われ、昔のオカルト部に雄山の写真が貼られるのはしよつちゆうあつた。

「だよなあ？」

雄山は首を傾げ、何が悪いのか理解出来なかつた。昔はともかく今はまともな顔つきなのだ。これで怖いとかいつたら自分に愛想よく振る舞える佐竹先生はなんだというのだ。

「そつちじやねえつすよ！ こつちつす！」

矢田は紙を取り上げ、雄山の前に見せると雄山は手でポンと叩き納得した。

「ああ、こつちか。えーと……「生徒、矢田（やだ）聖（こうき）をオカルト部に所属することを認めます、顧問……印」……本当にいいのか？ こんな部活で」

雄山はその紙を読み上げた。一々印の部分までいうあたり几帳面なのかもしれない。「つってもよーどうせ他の部活はつまんねーし、担任のユーザン先生が顧問なら楽そうだしな。それにユーザン先生出張少しだけ多いの知っているし」

「全くお前つて奴は。長門もそうなのか？」

雄山は矢田が自分の出張の数が多いことを知っていることに呆れ、もつと他のことに勉強しろと言いたくなるが我慢して長門に尋ねた。

「動機は違いますけどよろしくお願いしますー！」

ようやく雄山の顔に慣れた長門もお辞儀をして、それを出した。

「生徒、長門奈恵は（以下略）……確かに預かった。それじゃ後悔しないかだけ確認するけどいいか？」

「もう大丈夫だよ！ な？ 長門」

「うん！」

「そこまでいうなら入部の手続きしてくるから」

少し待っている。そう言おうとした雄山の言葉を遮り、校内放送の音が鳴り響く。

【大和雄山先生、至急学園長室に来てください。】

そして再び校内放送の音が鳴り終え、放送が終わったことを告げた。

「仕方ない。それじゃ明日までには終わらせておくからお前達は今日からオカルト部員だ。6時まででにこの部屋を出るよ。鍵閉めるからな」

「あざーっす」

「ありがとうございます！」

「学園長の所にちよつと行ってくるわ」

雄山はドアを閉め、学園長の方へと向かった。

「一体何なんだろうな？」

「うゝん。雄山先生が怒られるとは思えないし」

「むしろ逆ギレして修羅場になったら面白そうだけだな」

雄山がキレたらそれこそとんでもない修羅場となるだろう。何しろ眉をひそめるだけでもチンピラが逃げてしまうほどの男だ。学園長が怯えて黄金色のスイートポテトを出して怒りを鎮めようとする姿が容易にできる。

「思い浮かぶけどユーザン先生がそう簡単に怒るかな」

2人は雑談をして時間を過ごした。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「失礼します。学園長」

「入ってくれ。雄山先生」

雄山が学園長室に入るとボロボロになった学園長に十数人の教師達と生徒達がそこにいた。

「さて雄山先生。この先生達と生徒達を見て予想はついたとは思うが」

「お断りします」

学園長が喋っているにもかかわらず雄山はそれを断った。

「早すぎる！ もっと話させてもいいだろう！」

「お断りします。これから部活動の手続きをしなくてはなりませんので」

口調こそ丁寧だがやっていることは無礼極まりない。

「学園長に向かつてなんて口を！」

「黙れ」

それを注意しようとした教師は雄山の一言で青ざめてしまい、沈黙してしまった。

「ここにいらっしゃる方々が怪我をしているとなれば暴力沙汰でしょう。そんなことに巻き込まれるのは真つ平ごめんです。では失礼します」

「ま、待ってくれ！ ほんの少し！ 少しだけでも良いんだ雄山先生！ 頼む！ 給料1桁、いや2桁増やすから！」

ちなみに雄山の年で教師となれば最悪月給20万円支払われる。その2桁増えるとなれば2000万円となり国会議員の給料を軽く超えることになる。オカルト部の想像通り、学園長が雄山に黄金色のスイートポテトを出した瞬間だった。

「金の問題じゃあねえんですよ。実家（ウチ）へ行けばあります」

しかし雄山がそれを蹴ってドアに手をかけたの見て学園長は次の手を打った。

「これはオカルト部の生徒達にも多いに関係することだぞ！」

「……」

雄山が少し反応を示し、学園長は止めを刺す。

「下手したら普通の生徒達に被害が出る！ だからお願いです雄山先生。どうか私めの話を聞いてください」

「……まあいいでしょう。ただロクでもないのはわかっていますが」

学園長は完全に下手にでて話を聞かせようとすると、間を置いて雄山は上から視線、いやまるで学園長達をゴミを見るような目で言い放ち、用件があるなら早く言え！

と言わんばかりに手を組んだ。それだけ学園長が言おうとしていることが嫌なのだ。

「雄山先生。陰陽師に再びなつてくれないか？」

陰陽師とは和製魔法使いと言えばわかりやすいだろう。つまり雄山は元和製魔法使いこと元陰陽師だった。そして学園長は再び雄山を陰陽師に戻そうとしていた。

第2指導 調査の始まり

陰陽師。それは日本における魔法使いであり、妖怪退治を専門とする職業のことだ。現代において妖怪が表の世界には出ず、裏世界の物となつてしまい陰陽師は副業（裏稼業なので教師等の公務員も含む）として活動する者が多い。西智学園都市でも例外ではなく普段は教師として活躍している者の中に陰陽師がいる。それ故に暗黙の了解が出来た。

「では雄山先生、貴方も元陰陽師なら人型の妖怪がここの生徒としていることはご存知ですね？」

そう、人型の妖怪あるいは人に化けられる妖怪は無闇に殺さないというルールだ。その理由は簡単で殺してしまつたら陰陽師としての収入がなくなるからだ。なので妖怪を無闇に殺せば他の陰陽師達から村八分にあうのは目に見えている。

その中で妖怪と共に生活している場所が西智学園都市だ。西智学園都市は妖怪と共に生活することで助け合いをして収入を得ている。もちろん妖怪を憎悪している陰陽師もいるが自らの生活の為に一緒に暮らしていくうちにその感情が消えてしまい性格で判断するようになるのが大半だ。

「ええ。まさか生徒達が陰陽師を？」

しかしそれでも妖怪は人間を襲う。それこそが妖怪の本能だからだ。妖怪の中には人間に恐れられ、生まれる者やその恐怖によつて生きられる者がいる。彼らはそのために実行しているにしか過ぎない。

「半分当たつて半分は違う。それまで普通に暮らしていたのに妖怪の生徒達がいきなり暴れ出す。そういうった事態が頻繁に起きるようになってしまい、我々としても手の打ちようがありません」

「何故です？ 生徒達を取り押さえて尋問すれば良いだけの話でしょう？」

「それが厄介なことに暴れている時は妖力が増して力が強くなり、取り押さえようとしても抑えられません」

「一回もですか？」

「ええ。まさか生徒達を傷つける訳にもいきませんし、周りの被害を抑えるのが精一杯です」

雄山はこの状況に頭を抱えなくなった。何しろ生徒達は暴れてもそれを取り押さえすることは出来ない。しかもそれが頻繁に起きるのだ。身体が3つあつても持たないだろう。

「それでその生徒達はどうなつたんですか？」

「ここにいる生徒達が皆暴れた者です。全て事情聴取しましたが皆暴れている間は覚えていると言いますよ」

「覚えていないと。タチが悪いですね」

「おそらくですが私達は何者かが彼らに干渉して暴れるように操ったと考えていますが手がかりはなし」

「つまり、そこから解決しなきゃいけないってことですか？」

「本来であれば雄山先生の力を借りずに解決すべきものですが我々ではこれが限界です」

「……なるほど確かに厄介な事ですね。それで私にその事件を解決しろと？」

「我々も全力でサポートします！」

「わかりました。では事情を聴きましょう。隣の部屋で構いませんか？」

「ええ。では諸君、隣の部屋へ」

妖怪の生徒達と雄山は隣の部屋に入って行った。



「暴れていた時の記憶は全員ないんだな？」

「はい、これっぽっちも」

「最近高校生以外で学部外の誰かと接触したか？或いは首を噛まれたり、性行為はやつ

たか？」

全員が首を横に振った。

「確かに難航するな。手がかりが見つかりやしねえ……」

雄山はメモを取り、とにかく一つでも手がかりを探す。

「それじゃ暴れる5分以上前に何か強力な力に引きずられたとか変な衝動に駆られたとかそんな感じの症状はなかったか？」

これも全員が首を横に振った。

「(こうなつてはアンサーに聞くしかないがもう繋がらないしな)」

アンサーとは10個の携帯電話を使い、それぞれが使われていない電話番号にかけると一つだけ繋がり、9つ質問をすることが出来、最適な答えを教えてくれる。ただし最後に質問され答えられなかったら命を落とすというオカルトだ。だが雄山はある事情から既にこれを使っており、裏技ともいえる方法でアンサーの最後の答えも答えてしま

いそれ以降アンサーに繋がらないのだ。

「とりあえず解散だ。何かわかったら事情を聞こう」

「ありがとうございます！」

た。

その場で解散となり、雄山はオカルト部の手続きを済ませてから書類をまとめて帰つ

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「今日は手がかりなしか。大人しく帰るか」

肩と肩とぶつかる音が雄山の頭の中に響く。

雄山が思いつめた顔をして考えていると誰かとぶつかってしまったのだ。

「すみません大丈夫ですか?」

強面な顔つきをしている癖に常識がある雄山は咄嗟に謝り頭を下げる。が、ぶつかったのは金髪にピアス、DQNの格好を突っ走っているチンピラだった。

「どこ見て歩いてんだゴラア!」

謝ったのに雄山に絡んでくるチンピラは殴ろうとするが雄山は当然避けた。

「避けんじゃねえよ!」

チンピラは唾を飛ばし、雄山の顔に向けた。

「(仕方なし……か。)」

雄山は流石にキレ、顔を凶悪な面にした。

「ひっ!」

チンピラは雄山の異変に気付いたのか悲鳴をあげる。チンピラといえども雄山の凶悪な顔には敵わない。

「おい!」

ドスの効いた声がチンピラの耳に届く。それだけでもチンピラを萎縮させるには充分だ。

「はいっ!!」

「さつきは悪かったな兄ちゃん。だけど俺は謝ったよな?」

雄山はチンピラの肩に手を置き、教師としての自覚はないのか脅し始めた。

「全くその通りです!」

「そう言えばさつき俺に唾がかかったんだが。まあそれはいい。わざとじゃねえからな。だけどよ今やったように堅気に言いがかりをつけていたのを見かけたら……潰すぞ」

チンピラは何を潰すかは理解出来なかった。だがこれだけは言える。この男に絡んでしまったことを後悔したということだ。

「ひいひいっ!! た、助けてくれっ!!」

雄山に絡んだチンピラはすぐさま逃げて一瞬で消えてしまった。

「あの程度の脅しに屈するくらいなら絡んでくるんじゃないやねえよ」

雄山は若い頃、つまり陰陽師時代の時は力をつける為にマフィア狩りという悪趣味極まりないことをやっていたのだ。マフィア狩りをしていた男がチンピラにビビる理由は全くない。

「しかしどうすつか。妖怪の奴らは妖力を潜めて見分けがつかないようになっていし、そもそも門限云々の問題で外に出回っているのは夜行性以外はいねえ。大を救う為ならば小を切るなんて政治家みたいな汚い真似だけはしたくねえし、やらせねえ。となれば暴れた原因を突き詰めるしかないが、それもこれも無能なあいつらのせいだ。なら経済的に圧迫させんのが一番いいか」

そのあいつらとは学園長などの陰陽師であり、雄山はいかにして経済的に圧迫させるか考えていた。経費として払わせるのか、雇用費を出させるか。

「まああいつらのことなんぞどうでもいいがな」

雄山は自分でもくだらないと思いつつも駐車場に足を運んでいた。

「おいー 待て!!」

そして数分が経ち、雄山は駐車場に着くと同時に後ろから声をかけられ後ろを振り返った。

「あ?」

今度こそ帰れる。そう思っていた雄山は不機嫌だった。ドスの効いた低い声で雄山は返事をしてそちらをみると2人の不良の少年がそこにいた。

「さつきはよくも恥かかせてくれたな!」

「さつき……? ああ、あん時の兄ちゃんか」

雄山は先ほどチンピラに絡まれたのを思い出し、頭で整理する。

「で？ それで何の用だ？」

「決まってるんだろ！ てめえをボコしに来たんだよ！ さ、兄貴！ こいつをボコして下さい！」

チンピラはまたもや唾を吐き、汚らしく顔を歪めた。だが同時にその兄貴分が不機嫌になるを見て雄山は気付いた。こいつただのバカだと。

「てめえ、俺に命令してんじゃねえぞ！ ボケー！」

チンピラの兄貴分はチンピラを殴った。そのことがわかっていた雄山は苦笑していた。

「ウヴウ……すみません兄貴……！」

「それだけで済むと思ってるのか？ あ!？」

兄貴分は横たわったチンピラを蹴っ飛ばし、立たせると往復ビンタならぬ往復パンチをしてチンピラの顔を血塗れにする。

「そこまでにしておきな」

雄山は兄貴分の腕を掴み、往復パンチを止めさせると兄貴分は睨みつけた。

「カッコつけてるんじゃねえぞ！ 俺はてめえみたいにヒーロー気取りの奴が一番大嫌いなんだよ！」

「その為にこんなことをしているのか？」

「ああそうだ!! ヒーロー気取りの連中の絶望に染まった顔を見るだけでも楽しいね」

雄山はため息を吐き、一言。

「小せえ男だ。そんなこと女でも出来る」

「あ？」

「お前は自覚していないようだ。ヒーロー気取りの奴らの絶望した顔を見るのが好きなんじゃねえ……自分よりも出来の良い奴らを力でねじ伏せ見下すのが好きなんだ」

「んだとゴラア!!」

兄貴分は殴りかかり、雄山に攻撃するがあっさりと避けられてしまう。

「わからねえ奴だな。ようするにためえは力任せに人殴って嫉妬を無くす。嫉妬に狂った人間だつてことだ」

「ぶっ殺す!」

兄貴分はメリケンサックを取り出し、本気で雄山を殺すような勢いで殴りかかって来た。

「親御さんに教わらなかつたのか？少しでも危ないと感じたらすぐ逃げろつて」

右ストレートが当たる寸前、雄山は兄貴分の右腕を掴み、捻る。至って単純なことだが兄貴分には十分有効な手段で兄貴分が焦り始めた。

「てめえ離しやがれ！」

左フックで雄山の顔を殴りにかかるが雄山は右腕を更に捻った

「ぐあああつ！」

兄貴分は悲鳴を上げ、体勢を崩し地面に倒れるが雄山は御構い無しに腕を捻る。

「そういえばお前、ヒーロー気取りの連中の顔が絶望に染まるのは楽しいって言つてたよな？ 俺も似たようなことが好きなんだよ……なあ？ それがなんだかわかるか？」

そう語りかける雄山の目は完全に笑つておらず、一種の狂気すらにも見え、兄貴分とチンピラを怯えさせた。

「てめえらみたい力任せに来る連中を完膚なきまでに力尽くで潰す。こればかりは昔からの性根でなあ……未だに治っちゃいねえんだ」

「ゆ、許してくれ！」

「許す？ 何バカなこといつてやがる。これから俺のお楽しみが始まるんだ。どうしても止めさせたいなら、今後俺の顔を見たらすぐにその場から消え失せろ。もし俺が見かけたらそのお楽しみをする。もちろんてめえもな」

雄山はケケケ……と不気味に笑いながら兄貴分とチンピラにそう宣言すると2人は悲鳴を上げて逃げていった。

「さて塵掃除も終わったし、良い飯屋でも探して帰るか……」

そして車を走らせ、雄山はこの日収穫なしで寮へと帰った。

第3指導 動き出す

翌朝、雄山は職員室で妖怪の生徒の名簿を見ていた。

「さて今回の事件の最初の被害者であり最大の被害者の高等部2年の東堂美帆^{とうどうみほ}。16歳。種族は吸血鬼だが人間の血が混じっている為、太陽の光や流水には通常の吸血鬼よりも強く、せいぜい体調が悪くなるくらいで済むがその分他の吸血鬼に比べて身体能力は劣る」

東堂の項目を見終わると雄山は次の名簿を見た。

「南田汀間^{みなみだていま}。種族は天邪鬼。種族としての力は弱いが口が巧みな一面があるか」

その後、学年、年齢、種族、性別、誕生日、成績、学生寮等を調べたがどれも共通しているのは学園に通っている妖怪だということ。他に手がかりはなかった。その妖怪という手がかりもハーフから純血だったり、メジャーからマイナーな妖怪だったり様々だ。これでは精々犯人の動機が妖怪を憎んで実行したという情報くらいしか手に入らない。

「(なんにせよ巻き込まれたのは強い種族から弱い種族の妖怪の血が流れている奴らだ。それだけわかっただけでも良しとするか)」

雄山は切り上げ、それをしまうとドアから声が聞こえた。

「失礼します！……って誰もいませんか？」

その声の正体は一番の被害者である東堂だった。東堂は誰かを探しており、首を動かして見てみるが雄山と視線が合わない。

「(ト)にいます。東堂」

雄山は当然、声をかけ東堂に気づかせた。

「あ、ユーザン先生、おはようございます」

東堂がお辞儀をすると職員室に入り、雄山の前まで近づいた。

「おはよう、東堂。ところで何しに来たんだ？」

雄山は東堂が自分に報告しに来たか、あるいは全く関係ない用事なのかの可能性を考えた。前者ならば雄山の調査に必要な情報が手に入るかもしれない。そう期待していた。前者ならば雄山の調査に必要な情報が手に入るかもしれない。そう期待していた。

「伊崎先生に頼まれていたものを渡しに来たんです」

だがどうやら現実は甘くはない。後者の方だった。雄山は少しでも期待していただけに少しショックを受けるが持ちこたえた。

「それなら俺が渡しておこう。どうしても自分の手で渡さなきゃいけないなら俺は伊崎先生に伝えておく」

「ではよろしくお願ひします。失礼いたしました」

東堂が立ち去つてから10分後、職員室のドアが開いた。そこには少し歳を過ぎた中年の男性教員がいた。

「伊崎先生、おはようございます」

その教員こそ東堂の探していた人物、伊崎だ。伊崎は笑みを浮かべ、挨拶を返した。

「大和先生、おはようございます。そう言えば昨日、学園都市の敷地内で2人組の死体が見つかったそうですよ」

伊崎は話を作り、椅子に座るとラジオをつけた。

「そりやまた物騒な話で……それにしても伊崎先生、まだそんなラジオ持っていたんですか？ 10年くらい前のデザインですよ？」

そのラジオは長方形の小箱のようなものでポケットにギリギリ入れられるようなサイズだ。だが音質はよく音量も変えられるタイプだ。イヤホンの穴もあり、伊崎はその穴にイヤホンを入れた。

「こういうデザインも中々良いものですよ？ 聞きますか？」

そう言つて伊崎はラジオの片方のイヤホンを渡して雄山に勧め、スイッチを入れるとイヤホンからラジオの放送が流れた。

「いえ、俺にはこれがありますから」

雄山はカードのような端末を取り出し、スイッチを入れると電源がついた。

「あれ？ 大和先生、また新しい機種にしたんですか？」

それを見た伊崎はイヤホンを片方だけにしてラジオの放送を聞きながら尋ねる。

「まあそんなところですよ。後、東堂からこれを預かっています」

雄山はさりげなく東堂から預かった書類を渡し、インターネットに繋がれた。

「どうもありがとうございます。いや、しかし世の中も変わってしまいましたね。昔は固定電話や公衆電話しか一般人のやり取りはできなかつたのに、今ではインターネットを通じてやれるんですから大和先生達の時代が羨ましいものです」

「いつの話ですか？ 便利なのは違いありませんが昔も今も本質は変わりありませんよ」

雄山は溜息を吐いて、事件の記事を開く……そして雄山は目を丸くした。

「それもそうですな！ はっはっはっ！」

「……」

伊崎が笑っている一方、雄山は無言だった。その異変に気づき、伊崎は雄山に声をかけた。

「どうしました、大和先生？」

「ん？ああ、なんでもありませんよ伊崎先生」

雄山はいつも通りに戻り、パソコンのマウスを動かした。

しかしそれは校内放送の音によってそれを止める。

【大和先生、大至急事務室に来てください】

そして校内放送の音が鳴り止み、雄山が動いた。

「伊崎先生、すみませんがHRまで戻らないようでしたら教員と生徒達に事情を伝えておいてください」

雄山は端末をしまい、伊崎に頭を下げた。

「わかりました」

伊崎が了解するのを確認して雄山は事務室に駆け込んだ。



「失礼します」

雄山が事務室に入ると刑事ではなく別の人間がソファアに座っていた。

「よく来てくれた。雄山先生」

「学園長、何故ここに？」

そう、学園長だ。警察かと思いきやまさか自分の身内が呼んでいるとは思わず、そう尋ねた。

「雄山先生。この記事を読みましたか？」

学園長は新聞を取り出し、それを見ると先ほど話題になっていた事件についての記事だった。

「いいえ。ですが情報自体は伊崎先生から聞きました」

「では雄山先生、この2人に見覚えはありますか？」

学園長は引き出しから2枚の写真を出し、それを雄山に見せる。その写真の中身はあのチンピラ達の写真だった。

「ええ。帰りに絡まれたので少し説教しました。その後事件に巻き込まれるとは思いませんでした」

第三者がここにいたら「あれが説教？　んなわけねーだろ！　あれは脅しだ！」と言いきそうな嘘をさらりとついで話を促すと学園長が頭をかいた。

「その今回の事件なのだがどうやら生徒の仕業ではない。外部の人間が起こしたものだ」

「……外部の人間が？　そんなことをすればすぐに特定されて逮捕されるはずですよ。」

インターネットで殺されたことがすでに公表されているんですよ？」

外部の人間、つまり学園都市以外の人間は学園都市に入るには手続きが必要であり様々なことをやらなければならない。その為誰がどの時間に学園都市から入退場したかわかる。ましてや雄山が被害者に会ったのは夜遅くで朝には事件がすでに起こっていた。これだけでも十分に特定を出来る。

「雄山先生、この学園都市は結界で覆われているのはご存知ですか？」

「確か情報防御と認識妨害の結界でしたよね？ まさかそれに異常でも？」

情報防御の結界は文字通り、サイバーテロから学園都市の情報流出を阻止する為のもので現代になってから作られた結界だ。認識妨害は妖怪達と人間が互いに偏見の目で見ないように処置した結界だ。

「ええ。厄介なことに結界を弄られて昨日の夜から今日の朝までの外部関係者に関する情報が監視カメラ等含め全くない上に、外部や警察への連絡が取れないようになっていきます」

「なるほど。情報防御に関しては完全に突破され、盗まれたか消されたと考えるべきでしょうね。認識妨害に関してはラジオやインターネットに繋がったことを考えると逆に認識妨害のシステムを利用してこちらからは情報を発信できないようにされた訳

ですか」

「流石雄山先生。其処までお分かりなら私が呼び出した理由もお分かりでしょう?」

「学園長の言いたいことは妖怪達が暴れるのはもしかしたらその時間に入退場した誰かがいる、ということですね?」

「その通り。だがここは腐っても世界最大級の学園都市。ここの結界を弄り、情報を操作出来る奴は限られてくる。故に内部の人間が協力していると考えていいでしょう」

「まあ要するに、その結界の弄った形跡を辿って犯人を捕まろってことですか?」

「ええ。ですがそれでは何年かかるかわからないでしょう?」

学園長がそういつて地図を取り出し、魔法を唱えた。その魔法が地図に書かれた場所に小さい○のマークをつけた。

「このマークした場所が今回報告された結界に異常がある所です。どうかよろしく願います」

学園長はその地図を雄山に渡した。

「しかし学園長、異常があるとわかっていて何故直さなかったんですか?」

当然の疑問に学園長は気まずそうに答える。

「異常に気付いたのはつい先ほどのことで直そうにも忌引等の理由で結界術師がない

為、現状維持が限界です。」

「其処で俺の出番というわけですか？」

「はい。本来であれば一人くらい残すべきでしたが……学園都市の結界を弄れるような者はいないと甘く見ていました。こればかりは私達の責任です。しかし現時点で雄山先生しか頼れる人材はいません！ 何卒よろしくお願いします！」

頭を下げ、学園長は懇願する。それだけ切羽詰まっていたのだ。

「言われなくともやりますよ。それが俺の仕事ですから」

雄山は事務室から出て行き、急な出張が入ったと校長等様々な教員に報告しその場所へと向かった。

第4指導 気と魔力

雄山は車で移動して3時間が経過し、ようやく目的地に着いた。

「酷えもんだな。ここは」

そこは弄られた結界の場所であり、周りを見ると結界に亀裂が入りいつ壊れるかわかったものではなかった。

「よく来てくれました。大和先生。私は現場の監督をしている滝河敬一と申します」

現場を監督している陰陽師、滝河は手を前に出し握手を求めると雄山はそれを取った。

「滝河、じゃあどんな状況か教えてくれないか？」

「はい。現時点で判明した被害は認識妨害、情報防御に加え魔法防御、衝撃緩和の4つです」

魔法防御の結界は外からの魔法や呪術等の魔力による力を防ぐ為の結界の名称で結界を使う時は絶対に欠かせない分野だ。衝撃緩和の結界は所謂、物理防御の結界であり隕石やそういった物体で魔法防御の結界を乗り越えた攻撃を和らげるものだ。これも同様に結界の基本で対象を守るのに必要なものだ。その二つを失った今、学園都市は丸

裸となり外部からの侵入者を容易く入らせてしまう。

「おいおい腐りすぎじゃねえか？ この学園都市も。そんな状況だつてのに結界術を得意としている陰陽師すらもないって笑つちまうしかねえな。結界が決壊……なんてな」

くだらない親父ギャグで周囲の空気を和ませようとしたが返つて凍てつかせてしまい、4月だというのにこの場所は吹雪いていた。

「笑えるような状態ではありませんよ。大和先生！」

その吹雪を溶かし、晴れにする滝河。雄山のペースに付き合わされて誰よりも苦勞するのはこの男だろう。

「何にしても面倒なこつた。だからあれ程学園都市内に警察を入れろと言つてやつたつての……」

ブツブツと言いながら雄山は結界の前に立ち、結界に手を突っ込んだ。

結界はガラスや鉄などの物体とは違い魔力、所謂精神エネルギーを元にして作られておりその状態はないに等しい。だが魔力はとある条件を満たすと実態を持つようになる。その条件とは魔法の詠唱や魔法陣等が条件だ。もちろん詠唱や魔法陣を使わなくとも魔力を変質させることも出来るが魔力の消費が多い上に効率が悪い。

「はい。お気をつけて！」

雄山が車を出したのを確認し滝河は敬礼した。



そして3時間が経過し、学園の校庭に着くとそこには頭から血を流している学園長がいた。

「おい！ しつかりしろ！」

「ゆ、雄山先生……」

雄山が声をかけると学園長は震えながらも反応し、雄山の手を握った。

「何があった!？」

「と、東堂君だ……東堂美帆が私達を襲った」

「なんだと!？」

「今、私が東堂君を封印して取り押さえているがそれも時間の問題だ。東堂君を止めてくれ！」

学園長は意識を失い、目を閉ざすと校庭に魔法陣が現れ悪魔の翼と牙を生やした吸血鬼、東堂がそこにおり、雄山と目を合わせた。

「ひゃぱはははははー！」

東堂は奇声とも言える笑い声を上げ、雄山に襲いかかり：飛び掛かった。吸血鬼は弱点が多い分、身体能力が妖怪（化け物の類）の中でも高い。更に首と心臓さえ無事かつ環境が良ければ生きられるような生命力を持つている生物でありかつて欧州ヨーロッパの国々を恐れさせた。もつとも数の暴力には敵わず衰退したがそれでも脅威であり、東堂のパンチも然り、大変危険である。

「っー！」

雄山は東堂のパンチを避けると地面が押しつぶされて拳の跡がついた。

「（腐つても吸血鬼つてわけか）」

純粹な吸血鬼ではないとはいえ東堂がパンチするだけでもコンクリートの壁をぶち壊すだけの力があり、人間がまともに喰らえば複雑骨折で済めばまだいい方だろう。

「ピャーッヒヒャハハ！」

そして再び東堂が奇声を挙げながら雄山を殴ろうと左手を降り、雄山の腹に直撃させた。

「これで純粹な吸血鬼じゃねえんだから驚いたぜ」

だが雄山は無事だった。通常の間人であれば内臓がぐちゃぐちゃになって悲惨なこ

とになっていただろうが雄山は精神エネルギーである魔力とは正反対の生命エネルギーの気を纏い、身体を頑丈にさせていた。つまり、雄山は自分の生命エネルギーと引き換えに見えない鎧でガードしたということだ。

「ヒヒヒヒー」

魔女のような笑い声を上げ、東堂は雄山を殴ったが雄山は気を纏いガードして対処して呟いた。

「少々痛いかもしれないが我慢しろよ」

雄山は東堂の華奢な腕を掴み、何が書かれているかわからないくらい達筆な文字が書かれている長方形の紙を取り出した。

「喝ー！」

そしてそれを東堂の腕に貼り付けると狂気によって目が血走っていた東堂がおとなしく、翼も収納されて普通の人間と同じような外見になり、目を閉ざした。

▲▼▲▼☆☆☆☆▼▼▲▲

「あれ、ハハハハハ」

東堂が瞬きをし、目に入ったのは学校の天井だった。

「無事か？ 東堂」

男の声が聞こえ、そちらを振り向くとそこには雄山がいた。

「えっ!? ユーザン先生?」

東堂はキョロキョロと見渡すとピンクのカーテン、温度計が乗っているテーブル、そして保健室の教諭かつ保健体育の教員佐竹がいた。

「そうだ。それよりも身体の方は大丈夫なのか?」

「はい。でも普段よりも力が出ません」

「当たり前だ。お前は魔力が暴走して理性を失って暴れていたんだ。だから急遽お前の魔力を破魔札で封じ込めた。この事件が解決するまでそれをしていろ」

「でもこれだと剥がれやすいです。どうにか出来ませんか?」

「ちよつと待つてろ。佐竹先生、包帯とテープ持つてきてください」

「了解しました!」

佐竹は雄山の元に包帯とテープを持つて来ると雄山をデパートに誘ったが雄山はそれを断ると佐竹は明るく振る舞い、包帯とテープだけおいていつもの仕事に戻っていった。

ちなみに東堂が見る限りでもこのやりとりは10回目で日常茶判事となっており、東堂はその光景を見て安心していた。

「これでよし。これなら怪我をしたと認識できるし、保健室へ行った理由にもなる」

雄山は包帯を破魔札の上から巻きつけテープで包帯を止め、破魔札が剥がれないよう

に処置した。そうすることで雄山が言ったように誤魔化しも効くし、何よりも怪しまれない。

「ありがとうございます！」

東堂は感動していた。自分が思いつかないようなことをあつさり雄山は実行し、しかも東堂のことを考えていた。人間の血が混ざっている妖怪が多くなつたとはいえ、妖怪の数は元々少なく妖怪と人との混血は外国人と日本人のハーフよりも珍しい。それ故に東堂のことを考えずに無意識に傷つける輩も多かつた。その反動故に感動していた。

「それと東堂。明日の朝、学園長室に來い。今回の件で話がある。絶対に來い」

その言葉を聞いて東堂は頷いた。何せ二回も言っているのだ。これで來ないとなれば何があるかわかつたものではない。

第5指導 吸血鬼少女の意地

東堂が暴れ、翌日。学園長室に数人の生徒と学園長、そして雄山がいた。

「雄山先生、それで何が原因かわかったのですか？」

全員が沈黙する中、学園長が口を開き雄山のオリエンテーションが始まった。

「ここにいる生徒の皆さんはある共通点があります。それは一人暮らしであるということとともう一つ……とある外部の弁当屋と契約していることです」

「外部というと確か出入りしているのは鴨川弁当（かもかわべんとう）と定食ナポリの二つだけですが……それがなんの関係が？」

「ここにいる生徒達は毒を盛られたんですよ……この遅効性の毒を」

学園長の机にその毒の粉が入った袋を置くと学園長が興味深くそれを観察し、鑑定し始めた。

「ちよつと待った！ だったらなんで俺たちは生きています!? 毒を盛られているならとつくに死んでいてもおかしくないじゃないか!？」

「南田君……これは毒は毒でも死に至るような毒じゃない」

南田が疑問に思い、挙手して意見を述べると鑑定し終えた学園長がそういつて南田の

口を封じた。

「今回用いられたのは興奮剤です」

「興奮剤……？」

「通称オーバー。少し前までは調味料として使われていた物ですがそれには欠点がありました。人間が使う分には問題はありませんが妖怪やその血を継ぐ者が使うと個人差こそあれ時間が経つと凶暴になり魔力も増します……その点では毒というよりドーピングというべきでしょう」

「しかしオーバーは学園都市に持ち込まれないように厳重に監視しているはず……いったい何故……？」

「認識妨害を逆に利用されたんですよ。こんな風に……」

雄山が右腕を振るとそこにはなかった木刀が握られていた。

「!! いつの間に……」

「最初からです。認識妨害を用いればこんなことも可能……というよりか誰でも出来ませぬ。奴らはこうやってオーバーを混入させたんですよ」

そして雄山が木刀をおきオーバーを持つ。すると東堂が手を挙げ質問をする。

「でもユーザン先生が何でオーバーを持っているの？」

「ん？ いい質問だな……東堂。これは借り物だ。内部にある外部の弁当屋の倉庫を調べ

たら塩の代わりにこいつがあったから頂戴したまでだ。今鑑識の方に回している」

「で、では一体どちらなんですか？ オーバーを混入させたのは…」

「単刀直入に言いましょう。鴨川弁当です」

「なんだって!？」

「信じられない…!!」

場は騒然として、どよめく。それだけ鴨川弁当の知名度は高く信頼されていた。

「学園長。鴨川弁当の歴史は浅いですよね。」

「その通り…：半年くらい前までは宅配業を営んでいた。しかし営業が上手く行っていたにもかかわらず、何故か弁当屋に変更して活動し始めた。だが質の割に安く好評で今じゃ注文殺到…：まさか!？」

「そう。オーバーの力によるもの…：あるいは認識妨害の力。それとも両方か…：ですが外に連絡しても妖怪が暴れるような被害はなかった。つまり学園都市（ココ）だけ狙われた可能性が高いってことです」

「!!」

「そしてこの事件も、被害者を口封じする為に殺した…：と俺は考えています」

雄山は新聞紙を取り出して説明した。

「事件の時、鴨川弁当はいつも通りに弁当を運んでいました。しかし事故を起こし、オー

バーの単語を呟いたのを被害者が聞き、金を要求してきた。鴨川弁当は内部の裏切り者に連絡し、情報防御と認識妨害の結果を弄らせて警察に連絡が届かないように工作した後そのまま立ち去った……つてのが俺の推理ですが鴨川弁当が殺ったつていう決定的な証拠がないからなんとも言えませんがね」

どの道鴨川弁当はもう終わりだがな。と呟くと学園長室の電話がかかった。

「こちら学園……おいっ！　しつかりしろ！」

学園長が電話を取ると何やら只ならぬ雰囲気になり、電話が切れた。

「誰からですか？」

「滝河君からだ。君が修理していた結界の監督だよ」

「あいつか……一応お尋ねしますが何のようでした？」

「わからん。だが電話の様子から何者かに襲われていた。至急近くの応援を……」

学園長は電話をかけようとしたが雄山が声を出した。

「止めておいた方がいいでしょう。滝河の周りには役に立たないとはいえ陰陽師が腐る程いたはずです。滝河がやられた以上そんな奴らに応援をしてもすでにやられているでしょう。偵察にしておきましょう」

「それもそうだ……もしもし！」

「俺は少し出張してくる。お前達はもう教室に戻っていいぞ」

雄山はそれだけいって学園長から出て行った。

「…」

そして1人の少女は何も言わずに見ると教室の方向とは違う方向へと足を運んだ。

▲▼▲▼☆☆☆☆▲▼▲▼

雄山が車を運転していると突如上から重たいものが落ちた音が聞こえた。

「ユーザン先生ーっ!」

「ぬおおおっ!?!」

東堂が運転している車の前ガラスに張り付き、目の前が見えなくなったことに雄山はパニックになり、急ブレーキをかけ車を止めた。

「東堂! 何でここににいる?!」

「ユーザン先生のお手伝いですよ! ユーザン先生、滝河さんって人のところに行くんですよね?」

「…そうだ」

「私も魔力を封じられているとはいえ世界に名だたる種族の吸血鬼です! 戦力にはなりません!」

「てめえは相手がわかっているのか? 東堂…」

「…っ!」

雄山は冷たい声で東堂を突き放し、車に寄りかかった。

「相手は平気で陰陽師や妖怪を利用するような奴だ。…お前は何も言わずに帰れ」

「先生！ 私を連れて行かないや先生が私を誘拐して犯したってネットで拡散させます！」

そんなことをすれば雄山の人生はめっちゃくちゃなものになり、大きく変わるだろう。「勝手にしろ。俺は教師だ。教師たる者、生徒を危険な場所には行かせられない。例えば俺が退職に追い込まれるような事態を選ぶようなことになってもだ！」

「ならー！」

東堂は落とせなくなった食器の油污れのように車の窓に張り付いた。

「先生が連れて行くと言うまで絶対にこの場を離れません！」

こうなつては意地でも動くまい。雄山はそんな判断をしてため息を吐いた。

「なら一生張り付くか？」

雄山は腕を振つてタクシーを呼び出す仕草をして東堂を車ごと置いていこうとして東堂は慌てた。

「車をここに置いていったら駐車違反になりますよ!？」

「東堂。俺はな…生徒を守る為なら車を失おうが駐車違反をしようがそれで金を払おうがブタ箱に入ろうが構わねえ。むしろそれだけで止められるんなら安い値段だ。人の

値段は医学的に言えば数億円するからな」

雄山も東堂に負けず頑固で、東堂を帰らせようとしていた。

「ユーズン先生！　なんでそこまでして止めるんですか?!　理由を教えてください！」

「理由を話したら帰るか？」

「納得したら帰ります」

「…その言葉信じるぞ。助手席に乗れ」

雄山と東堂は車に乗り、その場を移動した。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

雄山がアクセルを踏んで車を発進させた。

「俺は陰陽師を一度引退している…それは知っているな？」

「学園長先生から聞きました」

「だけど引退した理由までは知らねえだろうよ？」

「はい。なんでですか？」

東堂が首を傾げ、尋ねると雄山がゆっくりと口を開き、事情を話した。

「9年前まで俺はマフィアや暴力団（ヤクザ）関係者を相手に取引し、そいつらにとって邪魔な陰陽師や妖怪、超常現象を起こせる超能力者達を殺す…早い話がヒットマンをやっていた。」

裏の世界にマフィアや暴力団（ヤクザ）関係者が含まれるのは組長格やその幹部達が妖怪や陰陽師などの存在を知っているからであり、金をちらつかせて組員としても客としても利用しているからだ。雄山がマフィア狩りをしていたのは踏み倒そうとしたマフィア達を見せしめる行為であり同時に代金を回収していたのだ。

「ヒットマンって殺し屋みたいなものですか？」

むしろヒットマンは殺し屋そのものであり、裏の世界の中でも表面上しか知らない東堂が疑問に思うのは当たり前だった。

「そうだ。だが9年前、その中に俺を恨んでいる海外マフィアが報復として俺とは関係ない弟を傷つけた」

当然、ヒットマンやマフィア狩りをする以上雄山は恨まれ、その報復にマフィア達は幼い雄山の弟に手を出した。

「先生に弟さんがいたんですか？」

「ああ…幸いなことに弟は顔に刀傷一本、胸に針を縫う程度の軽傷だったがそれでも巻き込んでしまったのは事実だ…」

それで軽傷で済ませるあたり、雄山の基準もおかしいのだが東堂はスルーした

「マフィアに狙われたのによくその程度で済みましたね。弟さん…陰陽師だったんですか？」

「いやそうではないが弟は生まれつき強かった。むしろマフィア達が弟を殺そうとしてムキになって疲弊したくらいだ。その隙を狙って俺はそのマフィアを潰して…とかとどめを刺して引退した。何故かわかるか？ …弟がもし普通だったら死んでいたからだよ。俺はそれに気づいてそれ以降は誰も巻き込まれないように陰陽師とは程遠い生活の学校の教師になった」

「じゃあ…ユーザン先生は何故この学園都市に？ 陰陽師とは縁を切りたかつたんじやないんですか？」

雄山の弟が規格外なのは置いておいて東堂は当然の疑問を投げかけた。西智学園都市は妖怪と人間が交流する為の都市であり種族だけで否定する偏見をなくすためにある。だが必然的に妖怪と関わる以上裏の世界と関わることになる…

「ここしか教員枠がなかっただけだ…就職に失敗したら親戚共が俺を陰陽師に戻そうとするし、やむなくここで教師をしているって訳だ。来年あたりにはもう学園都市(ここ)から離れる予定だ」

「えっ!?! それじゃあ…」

「余程の理由がない限りは陰陽師としての活動はこれで最後だ。お前達とも関わることもないだろうな…」

雄山はどこか切なげに語り、東堂に宣言した。

「まあ湿っぽい話になったが要するに俺は誰一人として巻き込みたくないんだよ。わかったらさっさと降りろ」

そして雄山は駐車場に車を止め、助手席のドアを開け、東堂を帰るように促したが東堂は首を振った。

「先生…本気で言っているんですか？　だとしたら先生がこの学園都市以外で赴任出来なかったのが納得します」

「…あ？」

「だって水臭いじゃないですか！　巻き込まれるならともかく自ら首を突っ込んで行くうとする人はただ巻き込まれる人よりも覚悟を決めているんです！　そうやって被害者を少なくするのは立派かもしれないませんが逆に除け者にされた人の気持ちも考えてください！　生徒は経験を通して成長するんです!!」

「…そうかもな。今思えば弟にも真実を話していないし、俺は水臭いのかもしれねえ」
雄山は助手席のドアを閉め、エンジンをかけた。

「だが俺の信念が邪魔をして俺の守るべきものを守れないならその信念を棄てる。今日から決めた」

「じゃあ…！」

「ああ、お前を連れて行く」

そして雄山の言葉を聞いた東堂は歓喜し、発狂するほど声を出した。

「やあつたあああああああつ!!」

「だがこれだけは言っておくぜ。死ぬな、何が何でも生きろ。それさえ守ってくれればいい」

雄山はそういつて高速道路に入り、徐々に加速していった。

「はいっ!」

「だいぶ時間を喰ったから飛ばすぞ! しつかり掴まつてろ!」

雄山は車のアクセルを強く踏み込みメーターが振り切る程のスピードを出し、飛ばした。

第6指導 手回しとハンドル

車を走らせ、現場付近に着くと背中を刃物で切り刻まれ血を流している滝河がうつ伏せの状態で倒れていた。

「滝河ー！」

雄山は呼吸を確保する為に滝河を仰向けにすると顔の一部が火傷しており、右眼に至っては完全に潰れていた。

「滝河さん！」

東堂の声を聞くと滝河はゆっくりと左眼を開け、口を開いた。

「あ…大和先生…？」

口を見るだけでも子規のように赤く染まっており、滝河の状態は重傷でありもはや助からないと雄山は思った。

「何があつた!?!」

「…追手にやられました」

「追手…？ 侵入者じゃないのか？」

滝河の言葉を聞いた雄山は妙に思い尋ねた。この場合追手は自分が組織を裏切り、そ

れを始末しに來た者であり、侵入者と呼ぶ方が正しい。だがもし追手であれば…滝河が内部の裏切り者ということになる。

「…追手です。私は6年前、当時引越し業者の社長だった鴨川慶次に10億円で学園都市の内通（スパイ）するように言われたんです」

その答えは雄山が望んでいないものだった。滝河が状況的に結界を弄ることが出来たとはいえ内部の裏切り者とまでは思いたくなかった…

「10億…!?!」

その一方で東堂はその金額に驚いていた。何せ宝くじの一等を当てるよりも高いのだ。その1割でも2等か3等くらい価値はあり、裏切るだけでそんなに貰えるなら逆に疑うだろう。そんな東堂の驚愕とは関係ないと言わんばかりに滝河は話しを続けた。

「当時生活に困っていた私はそれに頷き、鴨川の指示に従い行動し、てきま、した…ですが…はっ…うえっ…」

滝河は血を吐き、咽せると背中中の傷が開き、そこからより多くの血が流れ始めた。

「滝河、ゆっくりでもいい…無茶はするな」

「さ、最後の最後に…私の、良心が働きました。私はカメ、ラで証拠となる動画を撮っていました、が鴨川にバレ、てカメラも壊、され、て…マ…」

そして滝河は開けていた左眼を閉じてしまい永遠に語らなくなった。雄山は徐々に

滝河の身体が冷たくなるのを感じ、手を離した。



雄山達は救急車を呼び、滝河を病院へ運ばせると死亡が確認された。

「ユーズン先生…」

「東堂、辛いのか？」

「…辛いです。最後に良いことをしようとしたら殺されるなんて…」

東堂はそれ以上は言えなかつた。何故なら目から流れる液体と鼻から出そうになる液体が邪魔をしていたからだ。

「それが裏の世界の闇だ。正義がどうこう言える表の世界の倫理なんてものは通用しねえ。力がなきゃ何も出来ない世界なんだよ」

「…」

雄山がティッシュを取り出しそれを東堂の方へ向けると東堂は無言で受け取った。東堂は限りなく表に近いとはいえ裏の世界の住人であるが故に雄山の言っていることがそういう物だと理解してしまった。

「だがその場から生きられれば別だ。東堂、もしお前がいなきゃ滝河はとつくに死んでいて何も聞くことが出来はしなかつた」

「え…?」

「俺の顔を見るまで、滝河は俺でもなくお前でもない誰かの名前を呼んでいた：滝河の年齢とお前の性別からおそらく娘だろうよ。その娘に謝りたくて俺に全てを話したのかもしれないねえな。：生きれば弱者であつても可能性はあるんだ。だから生きろ。生きて自分を前へ進ませろ」

「…はいっ！」

「そんだけ返事が出来れば鴨川弁当に乗り込むぞ」

雄山は有無を言わず東堂を車に乗せ、鴨川弁当の本社へと殴り込みカチコミに向かった。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「東堂、鴨川慶次がどんな人物か知っているな？」

高速道路を走っていると雄山がいきなりそんなことを東堂に尋ねた。

「…私達妖怪を暴れさせただけじゃなく滝河さんを殺した極悪人、ですか？」

「そうだ。だが裏の世界じゃそんなのは当たり前だ：鴨川は非常に根回しが早え上に頭も切れる。おそらくあそこまで頭の切れる奴は裏の世界の奴らでもそうはいない。躊躇していたら逆に殺られかねえ：それ以上に厄介なのが逃すことだ」

東堂の答えに付け足すように、雄山は鴨川の危険さについて解説し、注意した。

「…でも仮に逃げられたとしても外部の警察とかに任せればいずれは捕まるんじゃないんですか？」

東堂のいうことはもつともである。通常であれば警察に任せれば大体解決してしまうものだ。それでも無理なら探偵を使い、鴨川の行方を追えばいい。

「そいつは無理だ……何せ事情が事情だからな」

雄山はため息を吐いて後ろから来た2台のトラックを避ける為に追越車線から走行車線に移った。

「事情とは警察が裏の世界とは関係ないからですか？」

東堂は裏の世界の表面だけを見ている……故にその答えが出てきた。

「違う。それだったら警察が暴力団（ヤクザ）を捕まえられる訳ねえだろうが。警官にもきちんと裏の世界の奴らはいるんだよ」

「じゃあ何で……？」

「学園都市は滝河の言うことが正しければ今、鴨川の情報操作によって警察の目が光らないようになってる。だからこの前起きた殺人事件も放棄された状態になっている上に滝河が殺されたことをなかつたようにしてやがる」

「つまり……警察は動けないってことですか？」

「ああ、警察が今動けない以上逃したら、永遠に捕まえられるはずがねえ。そういった根回しは鴨川の得意とすることだっ！」

雄山はいきなりハンドルを切り、片輪走行をし始めた。

「ユーザン先生！ いきなりなんですか!？」

東堂はヒステリックに叫び、雄山の方へ振り向くと雄山は指を前と後ろを交互に指していた。

「前と後ろ見てみる」

そして、前と後ろを交互に見ると大型トラック4台が二つの車線を平行して前と後ろから迫ってくるのがわかり、東堂は悲鳴をあげた。

「ぎゃあああーっ!？」

「東堂、しつかり掴まってる!」

雄山はアクセルを踏み、前のトラックと右壁の隙間を通っていき、トラックの前に戻った後、元の四輪走行に戻った。

「怖かった〜…」

「これでどっちか片方でも衝突してくればありがたいんだが…世の中そう甘くねえか」

しかし雄山が前に行ったことで前のトラックは加速し後ろのトラックは減速して衝突を避け雄山達を追いかけて来た。

「もしかして鴨川弁当が私達に気づいたんですか?」

「いやそれはねえだろうな。仮に滝河が俺達のことを話しても奴らが俺達を知る訳がね

え。となれば…俺を恨んでいるマフィアか暴力団（ヤクザ）の連中だな」

高速道路でいきなり襲撃され、現実味（リアルティ）が増し東堂は雄山が元ヒットマンだと確信した。

「…一旦SAに降りるぞ。このままじゃ確実に殺られかねないが奴らと言えどもSAで事故起こす程アホじゃねえ。そこで事故を起こしたら警察が駆けつけて面倒なことになるのは目に見えているからな」

雄山はSAの看板を見てアクセルを踏み、挑発じみたこと…いや挑発そのものをした。

雄山がこのような行動をした理由は二つほどある。一つはマフィア達が雄山の車を追いかけるのに夢中にさせることだ。そうすることでトラック全てがSAに入り、他の高速道路を利用する車に影響を与えなくてすむ。

「でもそこに着いたら…」

「十中八九間違いない、戦闘だな。東堂、もしかしたらお前も戦うことになるかもしれないから覚悟しておけ」

そしてもう一つが戦闘だった。雄山はマフィア達を誘き寄せ自分を追いかけるマフィアをこの場でしま…もとい、倒してしまおうという考えがあった。随分と脳筋じみた考え方だが下手に高速道路で動きを封じたら交通事故による渋滞など一般車両に大

きな影響を与えることになりかねない為にそうしたので。

そして雄山の狙い通りトラック4台が雄山の車をつけてSAに入った。

第7指導 元マフィアの扱き方

「出る。東堂」

雄山が車を適当な場所に止まらせ、東堂と共に外に出るとトラックはそれに対峙するように駐車した。

「やとアエタな。ユウザン」

そう言つてトラックから出てきたのは見た目普通かややヒョロめの日本人：に擬態している海外マフィアだった。片言であることと日本人に近い見た目をしていることから中国か韓国系のマフィアであることがうかがえる。

「挨拶はいい。それで何故俺たちを狙つた？」

「私達は金竜の残党。ボスの復讐しにキタ」

「復讐ねえ：鴨川慶次と手を組んだのもそのためか？」

雄山はカマをかけ、マフィア達に尋ねると全員が首を傾げた。

「カモカワケイジ？誰だソイツは？」

本当にマフィア達は鴨川を知らないようで逆に尋ねた。

「今世間で話題になつている鴨川弁当の取締役だ。そして俺はそいつを追いかけてい

る」

「そうか。では追いかけるのもここまでだ。死ねユウザン！」

雄山にマフィア達は銃を向け、なんの躊躇いもなくその引き金を引いた。

「ユウザン先生！」

東堂は隠していた翼を広げ、避けたが咄嗟のことだった為に雄山を持ち上げるという行動が出来ずにいた。

「おいおい、痛つてーな。この野郎。これで死んだらどうしてくれる？」

だがそこは雄山。まさしく名前の通り雄々しい山のように傷一つ付いていなかった。そして雄山が人間が持つ独特の魔力である霊力を込めた破魔札を投げ、マフィアの一人に当たるとマフィアが変貌し、化け物のような外見になり天へと帰って行った。

「やっぱり妖怪だったか…全く、現役から離れると力の調節が難しくなるもんだ」

「よくも金を！」

「復讐するんなら一人二人くらいは殺される覚悟くらいしておけ」

「死ね！」

「元からそのつもりだろうが…東堂！俺についてきた以上その力を振るうか、それとも学園都市に帰るか…どっちか好きな方を選べ！」

陰陽師としては吸血鬼の力が欲しい…しかしその一方で雄山自身が東堂にそんな真

似をさせる訳にはいかない…その両方の思いと教師としての役割が東堂に強制させず選択肢を与え、選ばせた。

「そんなことはもう決まっています！」

東堂は返事を返すとマフィア達に向かって急降下し、マフィアのうち一人をミンチにした。それが東堂の答えだった。

「東堂…それがお前の答えか。なら腹あくくつて行け！」

「はいっ！」

雄山の言葉と共に、東堂はマフィア達に一步も引けを取らず戦い始めた。

「ナマスにしてやル…」

マフィア達が本性を露わにして元の姿である妖怪そのものの姿になると爪を研ぎ、その爪でコンクリートで出来た地面をひっ搔くと地面が爪を追いかけるように切れた。

「妖力が増した…？」

妖力とは妖怪が持つ魔力の種類のことであり、霊力とは真逆の存在で妖怪達の力の源であるが源が源だけに霊力に弱い。しかし肉体に与える力や魔法の力などの強化系に優れた魔力である。マフィア達はそれを使って爪を刃物以上の切れ味にした。

しかし当然ながら姿形を変えた程度で変わるのは妖力の量ではなく妖力の循環…言ってみれば効率だ。効率が良くなればそれだけ力が増すということだが雄山の目の

前にいる妖怪は不自然なまでに妖力が増した。

「どうダ。見たか！これが私達のカダ！」

「で？ それがどうした？ 当たらなければ意味をなさねえぞ？」

「パワーだけだと思おうナ！」

マフィアは雄山に一瞬で迫り、腕を振るうと、下手な日本刀よりも切れ味のある爪が雄山を襲った。

「…っ！」

雄山はそれを後ろに避けることで避けたが反応が遅れ、雄山の服の一部が破れ体に傷がついた。

「やるじゃねえか…俺の体に傷をつけるなんてよ。だけどな…それだけで勝てるのか？」

「お前如きが…」

「ユウザン、その如きに殺られルンダ」

そしてまた一瞬で雄山に詰め寄り…吹っ飛んだ。

「ガハッ!？」

「バカが…二度も同じ手を食うかってんだ」

トラツクに叩きつけられた妖怪（マフィア）を破魔札で止めを刺し、浄化させながらそう告げるとマフィア達は激怒した。

「池までよくやてくれたナ！」

「むしろ同じ手を何度も仕掛けようとしたそいつに非があるんじゃないか？」

「ふざけるナ！ 私達の思いが貴様にはわかるまい！ 私達は行くあてがないところをボスに救われ、同僚……いや仲間は皆ボスを慕っていた。ただマフィアである……それだけの理由で私達のボスを、故郷を、お前に滅ぼされた！ それがどんな気持ちかわかる力！」

そのマフィア達はボスを慕っており、そのボスと共に歩んだ証である組織を雄山にマフィア狩り名目の元、めちやくちやにされ、恨んでいた。

「わからねえな。でもよマフィアってだけで恐怖に震える奴だっている。マフィアの存在自体が本来あっちゃいけねえ」

雄山のいうこともあながち間違いいではない。マフィアと聞くだけで恐怖に震える人間は大勢いる。それらの恐怖をなくするのが当時の雄山にとって使命だったといえるだろう。

「ならばお前達を切り刻んで東京湾の魚の餌にしてやる！」

「言葉じゃなくて行動で示せよ。さつきから同じ言葉聞いて飽きたぜ」

そしてマフィア達はその雄山の言葉にキレた。

「グガアアアッ！」

マフィア

妖怪達は妖力……いや力そのものと引き換えに理性を失い、復讐の相手である雄山を

放つたらかしにして東堂を標的にした。

「東堂ー！」

雄山が声をかけるが時すでに遅く、東堂に凶悪な爪が襲いかかった。

「ひっ!？」

妖怪達は理性を失ったことによつて大振りに攻撃してきたのが幸いし、避けることが出来たがその威力は凄まじく東堂が避けた場所は全て爪で切られており、その被害は東堂が暴走した時よりも大きい。いかに妖怪達がパワーアップしたかわかるだろう。

「らあっ!」

雄山は背中に破魔札を投げ当てる妖怪達を殲滅しようとするも、二匹はジャンプや横に飛んで避けた。

「くそが……」

現役の際であれば失敗することなく破魔札を当てていたが一度引退した身である以上、衰えてしまい外した。それだけならば問題はなかったが現役の際の癖か余分な破魔札は持たずにいた。つまり雄山の手元には破魔札がない。破魔札があるのは車の中でそこまで取りに行くのは不可能ではないが非戦闘民だった東堂に妖怪二匹を相手にさせるということだ。そんなことをすれば東堂は間違いなく死ぬだろう……そのことに雄山は舌打ちをしざるを得なかった。

「東堂伏せろ！」

東堂は反射的に頭を抱え伏せると、何がトラックにぶつかる轟音が鳴り……しばらくすると妖怪達マフィアがボロボロではあるものの人間の姿に戻ってトラックの前で気絶していた。

「ユーザン先生、一体何が……？」

雄山の破魔札が切れたのは知っていた。だが雄山が東堂が伏せている間に車に戻って破魔札を持ってきてマフィア達に投げた……と思うには無理があつた。そんなことをしている間に東堂は間違いなく死んでいただろうし、何故伏せさせるように指示したのか理由がわからない。そして何よりもマフィア達が人間の姿に戻っている。破魔札を使っていない何よりの証拠だ。

「おう、東堂無事か？」

東堂の質問には答えず雄山は安否を確認し、気絶したマフィアの二人の頭を殴り揺らした。

「は、はい」

「それじゃ少し待つてろ……色々と用事があるからな」

雄山はマフィアの一人をビンタで起こし、マフィアが目を開けると同時にマフィアが持っていた銃をマフィアに向けた。

「さてお前に幾つか質問をする。答える。拒否権はねえ」

「わ、ワカッター！」

即座に首を縦に振り、マフィアは屈した。流石に妖怪といえども頭を撃たれたら死ぬ…それは東堂もマフィアも同じだ。

そして雄山の口から予想もつかない質問が出てきた。

「お前達はいつからその体になった？」

第8指導 黒幕登場!?

「お前達はいつその体になった？」

その質問を聞いた東堂は困惑した。まるでマフィア達が別の生き物になったかのようない方だ。東堂が「何故そんな質問を？」と言いかけた瞬間、雄山の口が開いた。「お前達の妖怪化した姿は不自然極まりない物だった」

雄山が説明し出すとマフィアは顔を顰めた。

「まずてめえらが妖怪化した時いきなり持っていた妖力が増した。本来あり得ねえことだ。これまで俺は比喩表現抜きに何万何千ものマフィアや暴力団の妖怪を殺つて来た。だが一匹も妖力がいきなり倍増したなんてケースはそいつが実力を隠していたくらいのもんだが、てめえらは俺に恨みを持つている以上実力を隠す必要がない。となれば身体を戦隊物の特撮に出てくる怪人のように身体を改造したとしか思えねえ。そしていくつかには復讐の対象である俺を目の前にしてでも躊躇してしまふような副作用か発動する条件がある。違うか？」

マフィアはダラダラと汗をかき、そして閉ざしていた口を僅かに開けた。

「……その通りだ。我々はお前に復讐すルために昨日人間の身体を捨て、自ら妖怪の身

体となったそのために奴と取引しな

「その奴つてのは誰だ? 取引の内容は何なんだ?」

「ワカラナイ。だが奴はお前のいる学園都市で」

マフィアが肝心なところを話そうとした時、銃声が鳴り響く。マフィアは頭を撃たれ即死だった。

「おいおい困るぜ。勝手に組織の事話しちゃあなあ……」

おちゃらけた態度をした男だがその目は笑っておらず、東堂はそれをみて裏の世界の住民だと確信した。男は更に引き金を引いてもう一人のマフィアをあつさり殺し、雄山達に一步、一步と歩み寄る。そして雄山はその男が調べた人物の顔と同じであり同一人物だという事に気がついた。

「鴨川!」

そう、その男こそ雄山の探している鴨川だった。

「俺の顔と名前を知っているなんて光栄だぜ、キラーマウンテンさんよ」

「キラーマウンテン……?」

東堂はそのあだ名に首を傾げた。なんで雄山の事をそんなあだ名で呼ぶのか理解出来ないからだ。

「何だお嬢ちゃん知らねえのか? こいつは裏世界じゃキラーマウンテンって呼ばれて

いるんだぜ。10年くらい前まで全国各地神出鬼没に現れ、気に入らないマフィア団体や暴力団組織を見かけたら即潰すつてやり方をしていたんだ。それで名前から文字つてキラーマウンテンなんて呼ばれるようになったんだ」

「本当なんですか？ ユーザン先生」

「本当だ。ヒットマンとして活動する時以外は全てそうやった」

つぶやくように雄山は肯定し、東堂は何を言えがいいのかわからず困惑していた。

「まあそんな話しはどうでもいいんだよ。俺はね、お前達を始末しに来ただけなんだよ」
「その達つてのはこのマフィア達も含まれているのか？」

「そうだ。秘密を知った人間は消す。だからそいつらにも俺たちの秘密を知った人間を殺させたんだよ」

「……学園都市の事件と滝河を殺つたのはお前だったのか」

「そーいうこつた。まあ話したところでこれから死ぬ人間には意味はねえけどなあつ
！」

鴨川が服を破り、銃も捨てるど筋肉が肥大化し、身体も倍以上に巨大化し、ゴリラのような身体になった。ただし違うところはゴリラの毛の部分が竜の鱗で覆われており顔も竜そのものになっていた。早い話が竜がゴリラ化したような姿となっていた。

「ど、ドラゴン!？」

西洋においてそれは体格がゴリラでなければドラゴンと呼ばれる種族だ。ドラゴンは吸血鬼も恐れる種族であり、最強の種族と呼ばれている。日本のドラゴンに相当する龍などは神になっているケースもあり、ここでもやはり最強の種族であることがわかる。

「違う。よく見てみる。竜人だ」

「竜人!?!」

「竜人は竜の硬さと身体能力、そして息^{ブレス}攻撃、人間が持つ特殊な魔力の一つの霊力……それら全て兼ね揃えている種族だ」

雄山の解説に東堂は青ざめる。雄山の解説と自分の仮定が正しければ先ほどのマフィアよりも恐ろしい種族が相手になったのだということになるからだ。

「じゃあ破魔札は!?!」

「もちろん効かねえよ。おまけに竜の鱗があるせいでそれ以外の魔法も呪術も効かねえ」

その言葉に東堂は半泣きになった。雄山の主な攻撃である破魔札や魔法が効かない相手、それも雄山よりも身体能力の高い者が相手となると勝機はあるのか? と東堂は聞きたかった。

「だが竜人があまりにも強すぎるから当時の陰陽師達がありとあらゆる手段を使って絶

滅させたはずだ。俺だつて竜人を目にするのは初めてだ」

竜人は陰陽師から恐れられていた。日本の魔法とも呼べる陰陽術等が効かない相手となると陰陽師はどうしようもないからだ。しかもスピードは妖怪最速とも言われる天狗と互角以上、力は鬼以上、身体能力でも勝てる相手ではない。言わば陰陽師からして見れば天敵である。故に手段問わずの方法を使い絶滅させたはずだった。だが目の前にはその竜人がいる。雄山、いや陰陽師にとつてこれは悪夢でしかない。

「そう簡単に絶滅なんて出来つかよー」

先ほどの妖怪達の比ではないスピードで雄山に詰め寄り、殴りかかった。

話しは反れるがパワーは速さ×力（重さ）で定義されている。ボクシング等で体重で階級が分けられているのはそのためであり文字どおりパワーバランスを保ち、互角のパワー同士で戦わせる為だ。

閑話休題。見た目からして300キログラムを超える鴨川が己の身体能力に任せパンチをすればどれだけのパワーを持っているかなどはわかるだろう。

「グウウウツッ！」

そのパワーを気で防御したが鴨川のパンチはあまりにも重く、流石の雄山といえども吹っ飛ばされ、トラックにぶつかり、血を吐いた。

「ガフツ………！」

「ユーザン先生!」

「寄るな!」

血を吐くのを見た東堂が近寄ろうとすると雄山が怒鳴って東堂を止めた。

「どうして!？」

「今寄ればお前が殺されるだけだ!」

「その通り。邪魔をしたらお嬢さんを殺すだけだ…後でじっくりゆつくりと捌ってやるからそこで高みの見物しているよ」

そして鴨川が一步二歩、と歩み寄り雄山を持ち上げて頭を握りしめた。

「があああつ!!」

「良い声で叫ぶなあ……これだから面白い」

そして鴨川は雄山を投げ、再びトラックに叩きつけた。满身創痕となったがまだ気を纏える力があったのか意識は飛んでおらず、雄山は再び立ち上がった。

「俺の勝ちだ」

どこからどう見ても雄山は满身創痕であり、鴨川は無傷。この場の勝者は鴨川だと一目瞭然だ。

「違うだろ? 俺の勝ちだ。死ね」

「はあああつ!」

鴨川が腕を上げ、雄山にとどめを刺そうとした瞬間、東堂が跳び蹴りをしてそれを止めた。

「何の真似だ？ 吸血鬼のお嬢さん……」

雄山を庇った東堂を睨み、鴨川は低い声を出して脅すが今の東堂の前にそれは意味をなさない。

「これ以上ユーザー先生に手出しするなら私が相手をする！」

東堂は雄山の流れる血を多少だが浴びたことによつて吸血鬼としての本能が目覚め、食欲を促し興奮していた。

ライオンやヒョウなどの猛獣でもおとなしい時がある。それは腹を満たしている時だ。腹を満たしていれば食べる対象の兎が近くにいてもむやみに襲わない。だが逆に言えば空腹であれば気が立ち、襲うには十分な理由がある。今の東堂はその状態であり、包帯と封印の札を剥がし魔力を解放した。

「止め……ろ、東堂」

故に雄山が東堂を止めても、強い本能に逆らうことになり東堂はそれを制御する術はない。

「面白い。師匠を思う弟子の意地、見せてみるや！」

鴨川が雄山と闘った時と同様に間合いを詰め、殴ろうとしたがそこに東堂の姿はな

かった。

「ウスノロ……」

東堂は鴨川の背後に回っていた。

第9指導 キラーマウンテン復活

吸血鬼如きに背後を取られた。その事実は鴨川を驚愕させた。いくら相手がパワーアップしたとはいえ、竜人たる自分が遅れを取るなどあり得ない…

「ウスノロだと？ この俺が？」

それは東堂に対してか、あるいは鴨川自身に対してか…そう尋ねた。

「そんなデカイ身体でまともに動けるとでも思ったの？」

東堂は調子に乗り、人差し指と中指の立て、二回曲げて挑発した。彼女が雄山くらいの歳であればもう少し慎重に行動するのだが彼女は本来騒がしい女子高生だ。それに加え魔力が開放されハイになっている。鴨川が自分の手でボコボコに出来ると確信すると調子に乗るのは無理なかつた。

「だが百歩譲って俺がウスノロだとしても避けるだけじゃダメなんだよなあっ！」

東堂の鬱陶しい挑発を無視して、鴨川は東堂のスピードが自分よりも速いと言うことを受け入れた。彼は普段おちやらけているが違法薬物を使っていたとはいえ人気店の社長である。感情的になるよりもこの状況を突破する方が頭の中で理解し、この状況を解決しようと考えなければすぐさま潰れてしまうだろう…

「チヨロチヨロ避けてもスタミナが尽きた時が終わりだあつー！」

竜人の身体能力を生かし、東堂よりも優れた分野、持久戦に持ち込もうとしていた。竜人という種族は雄山が説明した通り竜の身体能力を得た人間だ。それ故に圧倒的なパワー、絶対的な防御、無限のスタミナ：etcが揃っており、東堂が上回ったのはその一つでしかない。

「はいっ！ はいっ！」

しかも東堂は鴨川が見た通り経験不足だ。現に行動をする際に無駄が多く大げさに避けている。

「くそっ！」

だと言うのに：何百発とパンチを繰り返しているのに何故一発も当たらない？ 鴨川はそう思い、攻撃して避ける時の東堂をじっくりと見るとハツと気がついた。

「スピードが上がっているっていうのか!? このままじゃ持久戦に持ち込めねえ！」

東堂のスピードが上がっていると気がついた鴨川は更にスピードを上げる。が東堂はその先を行き徐々に躲すのも上手くなり、鴨川は逆に持久戦に持ち込むと不利になるという錯覚に陥った。そして鴨川は初めて東堂に戦慄し、竜の顎に当たる部分を触り：鱗の一つを抜いた。

「逆鱗モードだ！」

鴨川の身体に変化が起きた。緑色だった身体は赤く染まり、牙や爪は鋭く、凶悪なものへと変わっていった。

「なっ!?!」

それに唾然としてしまった東堂は鴨川を見失った。右か? 左か? それとも後ろ? …そして振り返るとそこに鴨川がいた。

「が…!?!」

それは一瞬だった。鴨川が自分と目があつた刹那、トラックに叩きつけられた。そのダメージは混血とはいえ吸血鬼の身であっても大きく翼が折れていた。

「これが逆鱗モード。自らの逆鱗を取り暴走しソレに身を任せう。こうなれば誰にも止められエ。お嬢SUNあ俺の逆鱗に触れタんだア」

鴨川は爪を伸ばし、腕を上げる。

「…っ!!」

東堂は悲鳴を上げることなく目を閉じ、その爪が振り落とされる…そして生々しい音がし、その音を聞き自分は斬られたのだと思い、その痛みが来るのを我慢して待った。

「…?」

だがあまりにも痛みを感じるのが遅く、東堂は異変を感じ、何が起こったかを目で確認すると鴨川の手に万年筆が刺さっている様子が映し出された。

「つああ……！」

鴨川は苦しみ、手に刺さった万年筆を抜こうとするがなかなか取れず、苦戦していた。鴨川：東堂に止めろって言った理由、なんでだかわかるか？」

その最中、傷跡から血をボダボダと流しながら雄山が言葉を発した。その様子を見るだけでも痛々しく、それが逆に不気味さを醸し出している。

「ユーザン先生!？」

東堂は喜び、恐怖、不安などの感情が混ざり複雑な気持ちで満たされていた。

「お前達竜人を滅ぼした一族の名前は何か？」

東堂の声を無視して鴨川に尋ねるとしばらくして鴨川が動き出す。

「ま、まさか!？」

鴨川は自分の丁度首と胸の間くらいにある部分を見ると内と外の二つの正五角形の痣が浮き出ていた。

「そんな馬鹿な……何故キラーマウンテンが大和一族に伝わる秘術、空掌を使える!？」

鴨川は徐々に人間の形態に戻り、尻もちをついて尋ねた。

「決まっているだろ。俺は大和一族の一員だからだ」

「てめえ何もんだ……?」

「俺は大和宗家次期当主候補、大和雄山」

「…まさかキラーマウンテンが大和一族…それも宗家の人間だとはな。誤算だったぜ」
鴨川からため息が聞こえ、諦めの表情が見えた。

「さつきから大和一族って何ですか？」

雄山達の話についていけなくなった東堂が雄山に質問すると鴨川が代わりに答えた。

「大和一族は太古から続く陰陽師の一族だ。九尾や鶴などといったメジャーな妖怪を退治せず大和一族に伝わる秘術を用いて俺ら竜人をはじめとした伝承に残されていない妖怪達を歴史の闇へと葬り去った連中だ」

「秘術…？」

「その秘術は空掌。魔力や霊力を使わない訳のわからねえ秘術だが…これだけは言える。俺ら竜人はその秘術によって魔力や霊力を封じられて竜の形態になることも出来なくなり、殺された」

「魔力や霊力を使わないでそんなことが…!？」

本来魔力や霊力は気や一部を除いた超能力などでは封印できない。故に東堂はそれに驚いていた。空掌はその一部の超能力なのかあるいは別の何かなのか…鴨川が言ったとおり理解出来ないのだ。

「空掌は本来魔力や霊力を封印するために使われたもんじゃねえ」

「何だ…!？」

鴨川が声を上げると腿の部分に銃で撃たれたように風穴が開き、そこから血が流れた。

「空掌は本来、相手を傷つけるための純粋な武器だ。だが今の大和空掌弾は破壊に特化させた大和空掌砲だけじゃ竜人達を相手にするのは難しかった。そこで大和一族は陰陽術：当時の魔法陣と空掌を合わせ魔力や霊力を封印する術を作り上げて竜人達を殺していった」

「そうか…だからこんな痣跡が出来る訳だなあ…」

鴨川は自分の痣を見て、感心する。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「お喋りはここまでだ。鴨川：お前に幾つか質問をする」

「その前に煙草貸してくれねえか？ 禁煙していたんだがちよいとばかし吸ってみたくなるんだよな」

「断る。生徒の前で煙草吸わせるような真似はさせねえし何よりも俺自身が煙草が嫌いだ」

雄山やその同期は煙草が如何に危険か教育されており、嫌煙をする傾向が強い。

「そう言うなや。てめえらに逆らったところで既に俺は竜人としての力はねえ。抑えることなんぞすぐにできる。煙草吸ったって身体が元に戻る訳じゃねーし、そのくらいの

欲求くらい通してもいいだろ？」

「我慢しろ。その代わり後で奢ってやる」

「チツ：まあそう言うならいいか。で、質問はなんだ？」

「何故学園都市に送る弁当にオーバーを混ぜた？」

「上から学園都市を混乱させろって命令だよ」

「その上つてのは何なんだ？」

「妖魔連合会会長、三頭竜^{キドドラ}。そいつが俺やそこにいる人間達に指示した妖怪：いや怪獣だ」

「何言つてやがる。怪獣は架空の存在だろうが？」

貞子やトイレの花子さんなどの妖怪は存在するが怪獣は存在しない。どちらも近年生まれたものであるが貞子や花子さんなどの妖怪は都市伝説から生まれた存在であり、ある程度確証がある。しかしその一方怪獣は映画などの存在であり、現実にはそれこそ世界は混乱する。

「信じねーなら信じねーでいい。だけど俺は嘘は言っちゃいねー」

だが鴨川の様子を見ても嘘は言っていない。雄山はそう判断して次の質問をした。

「そいつの居場所は？」

「妖魔連合会本部：そこに三頭竜がいる」

「よし、煙草吸ったら案内しろ！」

鴨川に煙草を吸わせ消臭ガムを食べさせると、雄山達は妖魔連合会本部へと行くことになった。

第10指導 妖魔連合会への入り口

雄山達は鴨川を利用して今回の本当の黒幕、妖魔連合会の本部へと案内させて車を走らせていた。

「鴨川、妖魔連合会ってのはどんな組織なんだ？」

沈黙の空気の中、雄山は気を紛れさせる為に質問をした。

「妖怪や魔物、そういった類の奴らを集めて人間様にとつて天下取ろうって考えをしている連中の集まりだ。人間如きにぺこぺこ頭下げているのが気に食わねえ、人間そのものに恨みがある……まあ実際構成員はそんな奴しかいねえ。俺もそうだ。陰陽師……特に大和一族に一族滅亡寸前まで追い詰められたからなあ」

「じゃあマフィア達を怪人化させたのは何故だ？ 奴らも人間だろ？」

「さーな。俺は幹部でも末端だ。執行部じゃねえし、詳しい理由はわかんねーよ」

お手上げだと言わんばかりに鴨川は首を傾けた。その様子を見た東堂は内心毒吐いて堪えた。

「質問を変えろ。お前と手を組んでいた滝河についてだが……何故10億なんて大金を注ぎ込んだ？ あいつを動かすなら人質なり何なり捕らえて動かせば良いだろうが」

「わかっちゃいねーな。確かにその手もあるがそんなことをすりやあ足がついてしま
う。なるべくその時が来るまで悟られないようにする為だったんだよ」

「しかし悟られないようにする余り神経質になってマフィアを使ってあのチンピラ達を
殺したのが逆に仇となったってことか？」

「そうだ。互いに会つてもいない滝河とマフィアの連携が上手くいくはずもなかった。
だからお前に気づかれて計画がパア。さらにあいつも状況が悪くなった途端掌返した
から殺しただけだ。まあどのみち金の回収の為に殺す予定はあったけどな」

「そんなことの為に殺すなんて酷い……」

東堂にはそれが理解できなかった。綺麗な物を見てきただけに鴨川のように命をま
るでゴミのように粗末に扱うのが許せなかった。

「酷いのは失敗した奴らだ。おかげで後始末しなきゃいけなくなっただしな」

まるでではなく、もはや滝河をゴミそのもののように粗末に扱ったことに対して東堂
がキレ殴りかかろうとした：

「よせ東堂」

だが雄山が東堂の腕を掴み、それを止めた。

「何ですか!?!」

当然東堂は反論する。だが雄山は聞き分けの悪い子供に言いかけさせるように口を

開く

「裏の世界は皆こんな感じだ。殺すなんてことは奴らにとって何の躊躇いもない。そんな奴らに言ったところで暖簾に腕押し…無駄だ」

東堂は唸り、それから黙ってしまった。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「…着いたぞ。ここが妖魔連合会本部の入り口だ」

そしてその場所に車を止め、降りると雄山達には意外すぎる場所だった。

「ここって鴨川弁当の本社?!」

東堂はあまりにも意外すぎて大声を出してしまった。戦隊モノの特撮の展開で例えるならばヒーローの主人公に良くしてもらっている目の前のご近所さんが悪の秘密結社の本部長の自宅だったと言った展開だろうか。

「ああ。組織の目的は人間に変わって天下を取る…だが手っ取り早く天下を取るには実績と兵隊が必要だ。その為により近くでバレねーところに本部を設置する必要があった」

「失敗した時のリスクなんて考えていないのか…?」

「遠くでやったところで失敗するリスクはどの道変わるねーさ。バレたらすぐに警察(サツ)にパクられて計画どころじゃねー。それだけやべーことをやってんだよ」

「もつとも絵に描いた餅で終わるがな…」

雄山がそう呟くと東堂もそれに頷いた。

「妖魔連合会本部は地下二階の資料室から行ける。そこから先は自分の足で行ってこい」

鴨川は話を強引に逸らし雄山達にそう伝えると雄山は鴨川の頭を掴み地面に叩きつけた。

「そこまで案内しろ」

雄山は殺気を出し、もう一度叩きつけた。

「ぐっ…お前は俺に言われなきや何も出来ない駄々っ子ちゃんか？」

鴨川をさらに叩きつけて脅し始める。その様は暴力団ヤクザよりも凶悪だった。

「お前は敵だ。罨の可能性がある。てめえを人質に取れば交渉事も楽に済む。最悪盾にして戻れば問題ねえ」

雄山のいうことに東堂は引いていた。

「確かに俺は敵だ。だが俺は失敗した上に組織を売った以上俺はすでに妖魔連合会の敵なんだよ。妖魔連合会に顔を出しても人質の価値にもならねーし、むしろ真っ先に殺される。盾にしようにも童の形態の状態ならともかくこの状態じゃ相手が強過ぎて盾にもならねーよ。人質にも盾にもならねえ足手まといの俺を連れて行くよりここで置い

ていった方が良いと思うぜ」

だが言われた本人である鴨川は東堂よりも冷静だった。鴨川は東堂のように裏社会の表面を生きてきた者ではない。むしろ陰謀などの人の感情の黒い部分を見て生きてきた者である。その経験が鴨川のような冷静さを生み出した。

「まあお前が下手に殺されるよりかここに残った方が良いか。お前一人じゃ何も出来ないしな…東堂行くぞ」

「あ、待つてくださいいよー!」

東堂が雄山の後をついていき、建物の扉を閉めると鴨川はポツリと呟いた。

「…地獄で先に待っているぜ。キラーマウンテン…いや大和雄山」

その一言を呟き、口についた血を吹くと後ろから肩に手を置かれた。

「あの三頭竜キドラにどれだけやれるか楽しみだと思わないか？ なあ?」

その後鴨川は帰らぬ者となったがそこに無念を感じさせずむしろ遠足前の小学生のような楽しみな笑みを浮かべていた。

▲▼▲▼☆☆☆☆▲▼▲▼

雄山達はエレベーターを使い、地下2階へと向かっていた。

「ユーズン先生、大和一族に滅ぼされた妖怪は歴史の闇に葬り去られたって言っていましたけど…大和一族ってそんなに有名なんですか?」

「…裏の世界の中でも知っているのは一部の連中だ。大和一族は暗殺や汚れ仕事をやるから当然といえば当然だがな。二つ名が付いている俺は一族の恥晒しみたいなもんだ」
「複雑ですな…」

東堂の言葉と共にエレベーターの動きが止まり、女声のアナウンスが流れた。

【地下一階です】

雄山達が向かっているのは地下二階であり地下一階ではない。通常であればそのままエレベーターの中に人を入れさせるが今回は違う。敵のアジトとも言える場所にいるのだ。

「扉を閉めろ！」

雄山はすぐに判断し、ボタンに最も近い位置にいた東堂に指示する。経験が豊富な為に判断が出来たが裏社会に関わり始めた東堂は混乱していた。故に東堂の反応が遅れてしまい、侵入を許す。

「いつペン死んでこいや！」

巨漢オの豚男達クがボキボキと関節を鳴らし、「重量オーバーです」という女声アナウンスを無視して5人程入ってきた。

「邪魔してんじゃねえよ！ ファンタジーにしか出てこねえ奴らに用はねえ！」

雄山はそのうち一体を殴り、吹き飛ばすと他の巨漢オの豚男クが警報を鳴らした。

【緊急事態発生！ 緊急事態発生！ 警備員は直ちに地下一階まで召集せよ!!】

この放送が流れると警備員の足音が地響きとなって停止しているエレベーターを揺らし完全にエレベーターは使い物にならなくなった。

「東堂！ 一旦広い場所に出るぞ！」

雄山は東堂の手を掴むと膝を左腕に、背中を右腕で支える…所謂お姫様抱っこをして巨漢の豚男達から逃げた。

「待てやオラアツ!!」

巨漢の豚男は銃を使い、雄山達を逃がすまいと発砲したがやはり器用でない為に手元がブレてしまい取り逃がしてしまった。

「クソガアツ！ …まあいい地下一階から逃げられると思うなよ」

巨漢の豚男達は銃を握りつぶすことよって冷静さを取り戻し、電波が悪い為に携帯電話は使えず、非常用の電話機で連絡を取った。

「間中だ。春澤、てめえに用件だけ言う。そつちに二人ほど行つた。そいつらを足止めしろ。生死は問わねえ…わかつたな！」

巨漢の豚男のうちの一人、間中はそれだけ言うと電話を切つて他の巨漢の豚男達と共にエレベーター付近から去り、雄山が逃げた方向へと向かつた。

第11指導 妖魔連合会の門

雄山達は記憶した案内図と警備員が駆けつける音を頼りに階段を探していた。そこから降りてしまえば妖魔連合会本部への入り口である資料室に辿り着く。だが警備員と戦うのは愚策であり、鉢合わせしないように回り道をして気配を悟られぬようにしていた。

「ユーザン先生、左方向から音が聞こえます」

東堂は巨漢の豚男が見えなくなつた頃に降ろされており自由になつていた。その為雄山よりも優れた身体能力：いやこの場合は五感の一つ、聴力を使い感知していた。

「(左回りのルートも使えねえか：昔の俺らしく突撃か?)」

雄山は東堂の感知を頼りに階段に行くルートを探すが階段付近のどの場所にも警備員がおり現状では強行突破するしかなかつた。

「(：無理だな。あいつらは鴨川と同じタイプだ。破魔札が効くとは思えねえしな)」

だが相手は未知の怪物達。一応持ってきた破魔札を貼り付けたところで大した意味はないと判断し首を横に振つた。

「(となればあの方法しかないな。うまくいけば無傷で行けるか：)」

雄山はそう考えると二枚の紙を取り出した。



階段近くに二つの影が見え、それを見かけた見張り役は大声を出した。

「いたぞ〜っ!!」

影はその場から逃げ回り、巨漢オの豚男ウやスライム、その他諸々のファンタジーな魔物がその影を追いかけ、階段近くには誰もいなくなつた。

「行つたか…」

雄山はそれを見て一安心した。雄山がやったことは単純だ。先ほどの紙は式神の紙であり、雄山はそれを使い身代わりを作つたのだ。

「それにしても知能低すぎじゃないですか？ こんな手に引つかかるなんて…」

「お前が暴走した時やあのマフィアが怪人化した時、そして鴨川が竜の形態になつたように身体能力が高くなる代わりに知能が低下する。おそらくこの連中も同じだ。知能が低下した理由も指示を素早く受け入れ侵入者を追い出す為だ。その結果がこれだからバカだと思つて」

東堂の質問に雄山が答え、階段を降りようと近づくが…上から突如巨大な岩のような何かが降つてきた。

「見つけた…」

声の上から聞こえ、雄山達がそちらを見ると身長2メートル強の大男がいた。大男は顔は縫い傷を負っており、いかにも堅気の人間でないような風貌だった。

「フランケンもいるのか!？」

雄山はそれを見てわかった。それはフランケンシユタイン。かつて人間だった大男だがいつの間にか化け物となり、その名前は日本でも知られている。

「はあああつ!!」

封印を解いた東堂は調子に乗っていた。竜人である鴨川相手に善戦したのだからこのくらいの相手は楽勝だと。そう思っていた…

「ほい」

それを最小限の動きでフランケンは躲した。伝承で伝わるフランケンは見かけこそ醜く頭が悪そうに見えるが、かなり頭がよく知性を持ち合わせている。故にこのフランケンも東堂の攻撃を読んでいた。

「がつ!!」

更に身体も改造しているおかげで見た目通り、頑丈かつ硬く重い攻撃が可能となる。東堂にその攻撃が当たり、東堂は戦闘不能となった。

「まさか妖魔連合会がこんな化け物を飼っているとはな…とんだ誤算だ」

雄山は吸血鬼である東堂を一撃で倒したフランケンに動揺した。純粋なスピードこ

そ鴨川に劣るがそれを補う頭脳、圧倒的なパワー、そして妖力や霊力を持たない肉体。雄山の経験を持つてしてもこれらの要素を全て持った相手をしたことは無い。

「次はお前か？」

「…そうだ。てめえは？」

「俺の名前は春澤（はるさわ）直輝（なおき）。かつて俺はこの顔の醜さから周りから疎まれていた。お前もその顔面凶器の持ち主ならわかるだろう？常に疎まれ、誤解された者の気持ちだ……」

フランケン、春澤の言うことは間違いではなかった。雄山はその顔から周りから疎まれていた。オカルト部員からも雄山の顔そのものがオカルトだと言われるほど凶悪であり散々ネタにされてきた。

「春澤、お前と一緒にするな。俺は疎まれようがどうなろうが関係ねえ。そんな他人の評価で生きる人生ほどつまらない人生はねえ。俺は俺なりに有意義な人生を送り、それを他人に伝えてやる。その為なら損をしてもいいくらいだ」

だが雄山はそれを気にしていなかった。雄山にとつて大切なことは有意義な人生を歩むことだ。他人の評価で有意義かどうかなど決められないのだ。

「変わつてはいるが他の奴らと似たような意見だ。何にしてもここを通す訳にはいかない。それが俺を拾ってくれた三頭竜（ギドラ）様への最大の恩返しになるからな。それ

にあの鬱陶しい巨漢オウの豚男ブも俺をこき使う真似はできなくなる。だから俺の目的の為に死ぬ」

フランケンケンは拳を作り、雄山に向けて拳を振った。

「春澤…人つてのは話し合つて初めて信頼するんだぜ？」

雄山はそれを躲し、春澤に語りかける。確かに雄山は自分の顔は暴力団（ヤクザ）以上に人殺しの顔をしていると自覚している。しかし矢田や長門、そして今は幽霊部員のオカルト部員や佐竹や伊崎等の教諭はありのままの自分を受け入れてくれた。

「恐れられ、話し合うことすらも出来ない。そんな状況が俺の日常だ。俺の居場所なんてものはなかったんだよ…三頭竜（ギドラ）様に拾われるまではな。俺は三頭竜（ギドラ）様に拾われ居場所も作ってくれた。だから三頭竜（ギドラ）様の敵であるお前は排除しなきゃいけない」

「そうか…ならもう話し合う余地はねえな。玉碎覚悟でかかって来いやあつ！」

雄山はありつたけの紙と魔力を使い、雄山に酷似した式神を造り、兵隊を造る。そして春澤はそれに対して純粋なパワーで式神を吹っ飛ばし対抗する。量対質の典型例ともいふべき戦いが始まった。



雄山は式神に指示を出し、フランケンに突撃をする。

「あの身体に対抗出来る手段は接近戦にはねえ。遠距離攻撃が妥当…と普通なら考える。だがそれをするにはそれなりのリスクが必要だ」

春澤は式神をフランケン of 攻撃力を活かし一撃で吹っ飛ばし、元の紙へと戻すがそれに対抗するかの如く式神が増え続ける。

「(間中の豚足、いや鈍足が…いつまで応援に出来ない気だ!? 豚野郎の癖して遅れてやってくるヒーロー気取りか?)」

春澤はこの場にはいない間中に心の中で毒を吐く。しかしそんなことを思っている間に雄山の式神が襲いかかり、間中はそれを腕を振るうことで吹き飛ばす…が異変を感じた。雄山が消えた。春澤は周りを見渡すがどこにもいない。

「だがお前じゃ室内戦に向いていねえ!」

雄山はそう声を出し、春澤を振り向かせ、攻撃させる。すると雄山、否式神が爆発し春澤の左腕の肉を抉った。

「起爆札。式神の中にはそれを使っている奴がいくつもある…お前にそれを攻撃する勇氣はあんのか?」

「舐めるな! 勇氣があるなしは関係ない! やらねばお前をここを通させるだけだ! だがここを通す訳にはいかない!」

そして春澤が左腕を使い起爆札の式神を攻撃して爆発する。

「例え左腕をなくし右腕一本になろうとも三頭竜（ギドラ）様の元には行かせない……！」

左腕の骨が見えるほどボロボロになりながらも、それでも春澤は左腕を振り続けた。

そして……ついに雄山の式神のストックが尽きた。

「これでもう式神はなくなつた……あとはお前だけだ！」

春澤の左腕はすでに肉が僅かに残る程度で骨があちこちと見えていた。

「どうだかな」

そして雄山はニヒルな笑みを浮かべ東堂を抱えると、その地面に拳を向けた。

「大和空掌砲！」

その瞬間、春澤は見た。雄山の拳の前にある空気の塊が地面を押しつぶし、地下二階

まで床に穴が空く瞬間をスローで見ってしまった。

「バカな……!?!この床はロケットランチャーにも耐えられるようになってはるはずだ!!」

仮にもここは妖魔連合会の本部へと続く出入り口である。その出入り口が丈夫でなければ先ほどの巨漢オシの豚男ブクや春澤の巨体の魔物によって潰されてしまう。故に床を丈夫にする必要がある。

「何のために起爆札を使ったと思っっているんだ?」

「……まさか!?!」

そして春澤はわかってしまった。その疑問の答えが……

「俺は式神が爆発する度に魔法を使つて床を冷やし、床に金属疲労に近い状態を起こさせたんだよ。皮肉にもお前の覚悟が床に穴を開けさせた…そういうことだ。あばよ」

雄山はその床から地下二階へと降りた。それを追いかけてようにも春澤の大柄な体格では入らない。

「三頭竜（ギドラ）様…侵入者を地下二階まで行かせたことをご許し下さい…！」

春澤は日本刀を取り出し、自分の腹を切りその命を絶った。

第12指導 東の間の休憩



地下二階にたどり着いた雄山は東堂を休ませる為に資料室…ではなく、他の部屋の中で身を潜めていた。

「…もう19時か、早いもんだな」

雄山はふと時計を見ると午後7時になっていたことに気づく。無理もない。地下一階でだいぶ時間を取られてしまい、東堂の力なしでこの部屋に潜り込むのにも時間を喰った。

「んっ…!」

東堂の目が開き、唸り声を上げる。

「起きたか、東堂」

「ユーザン先生？」

「どうだった？ 調子に乗って負けた気分はよ？」

雄山は油断を許さない性格だ。それ故に柔らかく言ってもこの言葉しか浮かばなかった。

「…最高に最低ですね」

東堂が乾いた笑いを取って顔を俯かせる。雄山に見放された…そう思つてのことだった。

「使い方が間違つているがそれを指摘すんのも馬鹿らしい。東堂、いい報告と悪い報告どつちから聞きたい？」

「悪い報告から…」

「今19時を回つた。徹夜を覚悟しておけ」

「はい…」

「そして俺らがいる場所…ここが地下二階だ。どの部屋かはまだ分からないがな」
「つてことはあのデカブツに勝つたんですか？」

東堂の表情が安堵に変わり、明るくなる。どうやって勝つたは知らないが少なくとも東堂の敵はいなくなつたということには変わらない。

「勝つたと言えば勝つたな。ただ試合には負けて勝負には勝つた…そんなもんだ」

雄山は戦いを通して強引に地下一階の床から地下二階の天井まで穴を開けてそこから侵入したのだ。普通であればそんなことは考えずに春澤を倒して強行突破だろう。

「なるほど…でもこれからどうします？」

東堂が納得すると雄山は扉を開けた。

「無論、このまま妖魔連合会本部へ向かうぞ。資料室に行けば妖魔連合会本部に行けるとか言ってたがどうすれば行けるのか具体的には言わなかった…上手い手だ」

「何が上手い手なんですか?」

「まず俺達ができることは資料室で妖魔連合会に行こうと資料室で調べる…それはわかるな? しかし時間が経過すると共に睡魔に襲われる上に資料室の監視は厳しくなり、いつしか動きが取れなくなる。そうなる前に俺達は妖魔連合会への行き道を調べなきゃいけないってことだ」

「つまり時間が決められているってことですね」

「そうだ。制限時間内に妖魔^向連合会^うに行く…それが俺達のミッションだ」

「カッコ良いですね。それ…」

「もつとカッコ良くなるにはミッションを成功しないと…資料室に着いたぞ」

そして雄山達は資料室の扉を開いた。そこにあつたのは大量の本…本の壁だった。

「この中から探すんですか…かなり骨が折れそうですね」

「確かに…だが陰陽術は本にするとこの地下二階が埋まるくらいの量がある」

雄山はそういつて東堂に右の方を探すように指示すると自分は左から調べた。

「それ本当ですか?」

「ああ、ただ陰陽術の中には下らないものがあつたり、古すぎて使えないものがあるから

量の割に大したことはない。一部が使えるだけだ。それでも基本的なことは書いてあるからオリジナルの陰陽術を作ってみる際には丁度いいかもな。それで九尾を石に変えて封じたって奴もいたくらいだ」

「それって殺生石のことですか？」

「そうだ。まあ詳しい話しはオカルト部でしょうや。殺生石の話はオカルト部でも話せるしな」

「それもそうですね」

そして東堂はスイッチを見つけ、何の前触れもなくそれを押した。いやそれを押ししてしまい、乾いた音が雄山達の耳に響く。

「…東堂、今何を押した？」

雄山は作業を中止して東堂を睨む。この怒り様は東堂が見る限り初めてだった。

「えつと…ここにあったスイッチを押ししました」

「馬鹿野郎が！　そういう物を見つけたら俺に言え！　罠だったらどうする？」

「…すみません」

東堂が謝ると雄山は右手で頭を掻き、それが終わると左手を東堂の肩に置いた。

「…だがよくやった。どうやらそのスイッチは俺達が求めるスイッチだったようだ」

本の壁が真つ二つに割れ、その先には青白い鉄の扉があった。

「それじゃ行くこう…」

雄山と東堂はその扉を開け、中に入る。すると雄山は顔を顰め、東堂は口を押さえた。

▲▼▲▼☆☆☆☆▼▲▼▲

「おいおい冗談だろ？」

雄山がそう口にしたのは理由がある。異常なまでの禍々しい妖力が扉を開けた途端感じたのだ。東堂もその妖力に酔っていた。

「ユーズン先生、きぼち悪い…」

そして東堂はどこからともなく袋を取り出し、そこに食べ物を吐いた。

「(仮にも吸血鬼である東堂すらも吐くほどの妖気か…一体どんな化けもんが眠ってやがる？ 全盛期の頃でも勝てるかどうか怪しいな…)」

雄山は東堂の背中を摩りながらそう考える。かつて雄山はキラーマウンテンと呼ばれた陰陽師だ。だがその時の力を持ってしても勝てるかどうか怪しかった。それだけこの妖気は禍々しい物だった…

「うえ…」

東堂が胃液も出し切ると一台の車が此方へと向かってくる。その車は成金のような悪趣味でなく、上品な高級車だった。

「大和雄山様、東堂美帆様、妖魔連合会本部へようこそ。お待ちしております」

そこに現れたのは執事のような青年男性だ。だが雄山はその男から発せられる妖気から人間でないと感じていた。

「てめえは？」

しかしこの男からは全く殺気がない。そのせいかな敵か味方かすらもわからず戸惑っていた。だがわかるのはこの男がかなり胡散臭いということだ。何故自分達の名前を知っているのかはどうでもいい。問題はこの男が敵であるかどうかを見極めなければなかつた。

「これは失礼。私、妖魔連合会本部長の五十嵐泰造と申します」

「その五十嵐が何の用だ？」

「会長が貴方と話したいと…そのための送迎です」

「会長…三頭竜か？」

「ええ、詳しい事は車で説明します。さ、どうぞ」

そして雄山達は車へ乗り込んだ。

東堂は吐き疲れてしまい、寝てしまうと雄山と五十嵐は沈黙の空間を作っていた。

「…五十嵐とか言ったな。何が目的だ？」

その沈黙を破り、話しかけたのは雄山だ。雄山は荒事には慣れているがこういったことには慣れていない。いや教師の中では慣れている方が向こうの方が圧倒的に慣

れしているのだ。

「鴨川から聞いているかもしれませんが妖怪連合会は妖怪達を繁栄させるために作った組織です。妖怪達が人間を侵略する：確かに悪くありませんが最善の手ではないと私は考えています」

「そりやどういう意味だ？」

「私達が鴨川を使ってテロ活動をしたのは簡単な理由です。妖怪の認識を改めることですよ」

「認識がどうした？」

「妖怪の認識は様々ですが、架空の存在が一般的です。人型の妖怪でもない限りは私達は暮らしていけません。キラーマウンテンと呼ばれた貴方ならご存じでしょう？ 陰陽師において人型の妖怪や化けられる妖怪等は無闇に殺さないような暗黙の了解があることを：逆に言えばそうでない妖怪は影で暮らすしかありません。その状況を突破する為に人型の妖怪を暴走させ、そうでない者が取り押さえ、英雄視させる：その手筈だったんです」

「俺の存在が誤算だったって訳か。」

「その通り。西智学園都市には陰陽師達が大勢いますが所詮は頭でっかちの派遣のような物。実践なんてあるはずありませんし、彼らは教育者でありモラリストです。殺す

何て真似も出来ません」

「生徒を殺したらモラリスト以前に首になる。当然のことだがな」

五十嵐の言葉を聞いた雄山が即答した。

「どちらでもいいでしょう。ですがかつてキラーマウンテンと呼ばれた貴方が何の因果かそこにいた。貴方がテロ活動を解決したおかげで間中のような巨漢オースの豚男ウツや端本のような巨漢ミノタウルスの妖怪が表へ出ることはなくなつた」

「で？そのケジメとして死ねと？」

「私個人としては是非そうして貰いたい物です。しかしそれは会長に止められています」

「三頭竜は俺に何の用なんだ？」

「それは会長にご尋ね下さい。貴方を会長の元まで連れて行くことが私の仕事です」

「そうか。仕事に熱心なのはいいが本当に殺らなくてもいいのか？ 今なら殺せるぜ？」

「そんなことで感情的になつたら私はとづくに死んでいます。会長はそういった部分にはお堅い方ですから…それさえ守ればどんな方でも受け入れてくれます」

「けっ、そうかよ」

それを聞いて雄山は呆れて寝てしまった。これからその三頭竜を殺していく相手を

みすみす逃してしまうことに納得出来なかったのだ。もっとも理解はしているよう
しつかりと寝ているが。

かなりの強面の陰陽師とお転婆吸血鬼少女が眠りにつく様子を五十嵐はシユールに
思えたのは心の中に閉まっておいた。

第13指導 黒幕登場



雄山は6年前の出来事を夢で見ていた。

雄山は陰陽師を引退し、教師になる為に大学へと通っていた。そんな最中、一通の手紙が届く。

【大和財閥取締役社長就任式招待状】

その手紙は招待状である。一見すると普通の招待状のようにも見える…というか中身はそのままの内容だ。

だがそれは違う。大和財閥というのは大和一族がカモフラージュの為に経営している大企業だ。普通ならば陰陽師の集団は中小企業、あるいは法人機関にして陰陽師としての仕事を誤魔化す。規模が大きくなるほどその誤魔化しは効かなくなるので陰陽師の集団は多い。しかし大和一族は例外である。大企業…それも財閥クラスの規模であつても数多くの妖怪や化物等を歴史の闇に葬ってきたおかげで誤魔化しが効くのだ。

「親父からか…」

雄山がその手紙に靈力を込めると徐々に手紙の内容が変化していった。

【大和一族宗家当主任命式】

ここに書かれている内容は雄山達四兄弟が当時の当主……つまり雄山達の父から次の大和一族の宗家当主を決める式を挙げるということだ。

「俺は三男坊だし、ましてや陰陽師も引退している。ここは財閥も当主も大兄貴で確定だな」

しかし雄山からしてみれば当主の座は無縁である。その理由は雄山が三男坊であり、陰陽師を引退している。しかし長兄は違う。長兄はすでに大和財閥の取締役社長だと言われ、陰陽師の方も現役だ。

「一応行くだけ行ってみるか。勝手に当主になったら面倒だ……」

そして当日、雄山と二人の兄達が父の前に姿を現した。

「勇姿はまだ来ないのか？」

雄山がそんな言葉を呟くと、いきなり障子が開いた。

「た、大変です！」

大和一族の使用人がそう言って雄山達に報告すると雄山は冷静に返した。

「どうした？」

使用人は息を整え、語ろうとするも慌ててしまい咽せる。

「これを飲め……」

使用人に水を手渡すともものすごい勢いで飲み始め、使用人の呼吸が整う。そして使用人の口が開き、衝撃の一言を放つ。

「勇姿様が神隠しに遭いました!」

その場の空気が凍り全員が動けなくなった。雄山が質問しようとした矢先、視界がボヤけてまい、次に見たものは車内だった。

▲▼▲▼☆☆☆☆▼▲▼▲

「起きてください。着きましたよ」

五十嵐の声が雄山の欠伸を促し、雄山は起き上がる。

「そうか着いたか…」

車内に乾いた木が折れたような音とその場に響く。

「結構鳴るもんだな…」

関節を鳴らし終わると雄山が肩を回し目を冴えさせると東堂も自然に起き上がり雄山の姿を目に映す。

「おはようございます…ユーズン先生…」

一方東堂は雄山とは対称的に眠たそうに目を半眼にしていた。

「おう、おはよう。東堂目覚めは良くないみたいだな」

それをしっかりと返し、雄山は目の前の建物を見る。

「…で、三頭竜はここにいるのか？」

雄山はそれだけを気にしていた。何せ相手は敵の頭領だ。警戒をしすぎても困ることはない。

「はい。それにしても敵の目の前でよく寝れましたね？」

五十嵐がそう尋ねると雄山は少し間をおき、答えた。

「五十嵐…今俺を殺したところで何もメリットがないのはお前が教えたんだろうが」

「今は確かに殺したところでメリットはありません。ですがもしかしたら私が貴方の身体に何かを仕掛けるなんてことも出来ましたよ？」

「なら尚更安心した。それだけベラベラと喋る奴が本部長を務められるはずがねえ。もし俺の身体に爆弾やその類の物を仕掛けたならそんなことは言わねえ」

「そうでしょうか？ 絶対の自信があればベラベラと喋つても問題はありませんよ」

「確かに。だが俺が出会った妖怪の中には初見殺フアーストコンタクト・キラしの奴もいたがどいつもこいつ

も似たような感じでお前とは全くの別物だ。それに俺ら大和一族を知っている三頭竜が俺と話し合う際にそんな物を必要とは思えねえ。お前が爆弾なんかを仕掛けていたら外すように命令されてお前が死ぬことになるだろうよ」

「…それもそうですね」

雄山の答えに五十嵐は頷き、納得した。

「じゃあな。もう俺達は行くぜ」

雄山は東堂と共にその建物の中に入り、五十嵐は口角を上げていた。



「お前が三頭竜か？」

雄山は目の前で椅子に座っている男に語りかける。その男は一部を除いた見た目こそ人間そのものだが頭に生えた角が髪の毛に紛れて見え人間ではないとわかる。

「そうだ。皆は私のことを三頭竜と呼んでいる」

三頭竜は椅子から立ち上がり、物寂しげに語る。

「呼んでいる……？」

東堂が不思議そうに返すと三頭竜はため息を吐いた。

「我には名前がない。生まれついてから親はおらず名を名乗ろうとしても我のネーミングセンスは皆無であり締まらん。他の者にも名をつけて貰おうとしたが我が名は納得いくものではなかった。それ故に未だに三頭竜と呼ばれているのだ」

三頭竜がその後さらに口を開こうとしたが雄山がポツリと呟いた。

「龍造寺時夜」

それは名前だった。雄山自身にも何故その名前が出てきたのかはわからない。だが頭からその名前が浮かび上がりその名前を言ったただけだ。

「いい名前だろう？お前にその名前やるよ」

かつて名前を贈るということは縁起が良いものとされてきた。何故雄山が敵に塩を送るようなことをしたのかはわからない。しかし雄山は三頭竜に名前を贈ってスツキリしていた。

「その名前を有り難く貰おう」

そして一息ついて、三頭竜もとい龍造寺が椅子に座った。

「ところで雄山、我と協力せんか？」

まるでキャンプに誘う友人のような感覚で言った一言は雄山に衝撃を与えた。

「協力だど？」

「そうだ。末席とはいえ鴨川、春澤、間中、端本の妖魔連合会幹部が四人も死んで妖魔連合会はかなりの痛手…我等の悲願、人妖平等、妖々平等の実現が困難となった」

それはまぎれもない事実だ。だがその殺した犯人は雄山ではない。いずれも龍造寺の命令によって殺されている。

「だが雄山、汝が協力し、悲願を達成した暁には人妖平等に尽くした英雄として皆に紹介し、行方不明となった汝の弟、大和勇姿を探し出してみせよう」

「えっ!?! ユーザン先生の弟さん、行方不明なんですか?!」

東堂は雄山の弟である勇姿が行方不明になっていたことに驚き、戸惑う。キョロキョ

口と雄山と龍造寺を見る。そして雄山は東堂に目を合わせ、今語るとアイコンタクトを送った。

「そうだ。しかし勇姿のことを知っているのは俺ら大和一族とごく一部の奴らだけだ」

雄山は忌々しげに龍造寺を睨み、低い声でそう言った。

「妖魔連合会を舐めて貰っては困る…汝の弟大和勇姿は8月の某日、神隠しに合った…違うか？」

龍造寺はそう言つて雄山に聞くと雄山はこれまでにないほど怒りの表情に満ちていた。

「当たりだ。で？　なんで勇姿のことを知つてやがる…勇姿は特異体質故に大和一族とは無関係なように一族全員が誘導してきた。一族得意の歴史の闇に葬るのと同じようにな。だから俺と勇姿の関係をのを知っているのは一族以外ありえねえ。ましてや俺たちしか知らないその情報を知っていることは大和一族の中に裏切り者がいるってことだ。そいつが誰なのか教えて貰おうか？」

雄山は頭が混乱しており、自らに言い聞かせるかのように早口で龍造寺に尋ねる。

「その裏切り者を教えたいのは山々だが…それは無理だ。その情報の提供者は名前も顔も所在地もわからぬ匿名の者だ。しかし…」

「しっしっ」

「我はその行方不明となった勇姿を目撃した」

「またしても龍造寺がとんでもない衝撃的な一言を言い放つ。

「…なんだと!? それを教えろ!!」

雄山が食いついたのはその情報だった。これまで雄山は行方不明となった雄山を探す為に様々なことをしてきた。そう、別名陰陽師協会の問い合わせセンターことアンサーも利用したが答えは返ってこなかった。故にその情報がどれだけ貴重かは計り知れない。

「タダで教える訳にはいかん…しかしお互いここで戦うのは得策ではない。それは汝も分かっているだろう?」

しかし龍造寺とて馬鹿ではない。戦闘を避けかつ、雄山を引き抜くには雄山の人生に影響を受けさせ、行方不明となっている弟、勇姿の情報をカードにすることによって立場が有利になる。

「…確かにな」

「我の右腕となればその情報を提供しよう」

その提案は雄山にとってあまりにも魅力的だった。龍造寺の様子からしてあの一言よりも有益な情報が手に入る。しばらくの沈黙の後、雄山の口が開いた。

第14指導 未知の化け物



五十嵐は龍造寺の口元が見える建物の中にいた。そこで五十嵐は龍造寺の言っていることを読唇術を使い、観察していた。

「ようやくはじめましたか。会長……」

五十嵐がそう呟いた理由はただ一つ。会長たるギドラが腕を挽いで合図を送ったのだ。

五十嵐の能力は生物を何の違和感を感じさせないように意思や行動を操る能力だ。もちろん制限や発動する条件が多数あるがそれさえ満たせば強力な能力となる。実際に鴨川電人や春澤フランケン、間中オーグ、端本ミノタウルスなどと言った者も五十嵐の支配下にあり、全員がその命令に従い、行動した。そして今、雄山達はその支配下に置かれていた。

「後は待遇とかの説明ですよ……会長。ここまでお膳立てしておいて失敗したら笑い話でしかありません……」

そして五十嵐は能力を最大限に使い、雄山の意味を操った。

だが次の瞬間、龍造寺の身体が変化し五十嵐は呆然とそれを眺め、龍造寺の口元の中

に入っていった。

「(な、何故…何故私の能力が効かなかった…?!)」

放り込まれる最中、五十嵐は自らが犯したミスを考えるが見当がつかない。だが自分に不備はなかったはず。それだけは確実だ。原因がわからないまま、五十嵐は龍造寺の胃液に溶かされ骨となって死んだ。

▲▼▲▼☆☆☆☆▲▼▲▼

龍造寺の答えに雄山はこう答えた。

「確かに俺はその情報が欲しい…しかしそれだけ聞けばもう充分だ。お前に対する勧誘の答えはNoだ」

何故雄山はそう答えられたのか…その答えは自分自身にあった。雄山は名前を与え、ということとはしない。その理由は言霊である。言霊とはいわばその言葉の力だ。時折暗示などにも使われ、30年以上も前にそれを使った宗教が騒ぎになった。以来、陰陽師の業界の中で言霊を使うことは禁じられていた。雄山が操られている事に気づいたのは龍造寺に名前を与えた後だった。

「よかろう…名前をくれたことには感謝はする。だが永遠に分かり合えぬということだけはわかった。せめて我の本気の力を見せてから死なせてやろう」

そして龍造寺の身体がボキボキと音を立て、徐々に変化していく。その身体は巨大化

し、三つ首の竜となった。

「役立たずに用はない。死ね！」

そしてその場にいた五十嵐を食し、胃の中で消化し終わると東堂は腰を抜かしてしまった。それは五十嵐を殺したことじゃない。龍造寺の威圧感に押され萎縮してしまい、そうなったのだ。雄山も足が震えており、今までの経験を通してようやく立っていられる程度だ。

「さて、^{五十嵐}役立たずの始末も終わったことだ。我々の野望の為にもこの場で死んでもらおう！」

そして龍造寺が妖力を凝縮し、巨大なエネルギー弾を作り、それを放つ。

「やべえっ！」

雄山は瞬時に反応して東堂を抱え、エネルギー弾から離れる。するとエネルギー弾は地面に半径10mを中心とした底の見えない崖を作り上げた。

「流石に大和一族の宗家だけあってその邪魔者を抱えたまま避けることはできるようだな」

龍造寺は口角を上げ、ニヤリと笑う。これまでの相手は本気を出すまでもなく全て死んでいった。それ故に不満が溜まっていた…だがこの男に本気を出しても消化不足になることはない。そう感じていた。

「邪魔者？ 誰のこと言ってる？ 俺からしてみれば東堂は邪魔者なんかじゃねえよ」

雄山はそう言っていたが龍造寺のエネルギー弾の威力を見て、驚いていた。現代においてまさかこれほどの力を持った化け物が眠っていたとは想像していなかった。確かに鴨川から龍造寺の話聞いていなかった訳ではない。しかしそれは半信半疑で聞いていたのだ。まさしく鴨川の言う通り怪獣のような化け物だった。

「ならば我も本気の出しがあるというものよ！」

そして龍造寺の6つの目が光り、身体が黄金色に変色していった。

「くそ……がつー！」

「あ、あ……！」

初めて雄山が弱気になる様子を見た。東堂はそれに気づき、雄山に声をかけようとするも雄山よりも怯えている自分が声すらも出せないことに惨めになる。龍造寺があまりにも別格だった。

「…東堂、ここまで来たらもうお前は妖怪陰陽師としての道を歩むしかねえぞ。覚悟しておけ」

先ほどよりも大きいエネルギー弾が目の前に迫り、雄山は決意した顔つきで東堂に言い聞かせる。

「…え？ それってどういう…!?」

東堂が尋ねるが無視し、雄山は東堂を地面に起き、右腕を大きく引く。

「東堂、よく見ておけ。これが大和一族に伝わる秘術の一つ…大和空掌砲だ！」

その瞬間爆音が響き、煙が充満し東堂は吹っ飛ぶ。

だが東堂は迫るエネルギー弾が何かに押しつぶされ、爆発する瞬間を吸血鬼の目ではつきりと見ていた。そして煙が上がり、二人は視線で勝負していた。互いに先読みし、それを見破る。見破り見破られが続きついに龍造寺が口を開けた。

「大和雄山。汝に一つ聞く。それだけの実力を持つていながら何故鴨川や春澤を始末しなかった？ 汝の実力ならそれは出来ただろうに」

龍造寺の疑問、それは現在雄山が戦ってきた敵、つまり鴨川と春澤を何故殺さなかったという疑問だ。

「鴨川は情報を引き出す為だ。その為には殺さず生かす必要があっただけだ。春澤を本気で殺すには手間がかかる…だが安心しろ。てめえのような害にしかならねえ奴はきつちりと殺す」

「我を殺す？ 足手まといを抱えた状態でこの我をか？」

龍造寺の目はどこまでも冷たく、殺意が乗せられていた。

「何度も言わせるな。東堂は足手まといじゃねえよ。東堂は俺の相棒だ！」

パートナー

「ユーザン先生……」

東堂は雄山の言葉にときめいていた。その理由は相棒パートナーの意味を誤解していたからだ。東堂は配偶者の意味……つまり、雄山の言葉を「俺の嫁だから大丈夫だ」というように解釈してしまった。しかし、雄山の言う相棒パートナーとはそのままの意味であり、テニスにおけるダブルスのペアと同じようなものだ。

「東堂、よく聞け……吸血鬼のお前は空を自在に飛べるといふ特徴がある。その特徴を生かしてお前はこれを奴の口の中に投げろ」

そう言つて雄山が東堂に渡したのはボールに破魔札らしきものを幾つか張つた玉ゴムだった。

「ユーザン先生、私破魔札なんて使えせんよ?」

東堂がそう思うのは当然だった。何しろ破魔札は妖魔の類を滅ぼす効果があり、人間からしてみれば硫酸を身に纏つて特攻しろと言つていようなものである。

「安心しろ。それは破魔札で出来た奴じゃない。爆弾だ」

「ば、爆弾!?!」

東堂は思わずそれを手放すが雄山はそれをキャッチして解説する。

「つても余程のことがなきや爆発はしねえ。触れた奴の妖力に反応する爆弾だ。妖力に比例して爆発の規模が大きくなるが……少なくともお前のチンケな妖力じゃ爆発はしね

えよ」

そう、雄山が用意したものは爆弾だ。それも触れた者の妖力に比例して爆発の規模が大きくなるという対大物用の爆弾。東堂のような純血でない妖怪には大して意味がないが龍造寺には効果的だ。

「それはそうですけど、チンケなんてはつきりと言わないでください！」

「とにかくだ。龍造寺の妖力はアホみたいにあるから口の中に入れて途端ドカンと一発花火が上がる。そうなりや流石の龍造寺でもただでは済まない。口の中に入れば勝利は確定だ」

雄山は口で断定したものの、内心は不安だらけだ。確かにどんな化け物であっても生物である以上は内蔵に爆弾を入れて爆発したら溜まったものではない。しかし相手は雄山ですら未知の化け物だ。何が起こるかわからない。

「…はぐ」

東堂は雄山を信じることにした。

「俺が攻撃を引き受ける。東堂は口の中に入れてくれ。わかったな？」

雄山は役割を自分自身にも言い聞かせ、やることをイメージする。それだけでも龍造寺という化け物に立ち向かえる気力が増す。

「わかりました！」

その言葉を聞いて雄山も龍造寺に対する震えが止まり、微笑んだ。

「頼もしい言葉だ……期待しているぞ！東堂！」

そして雄山と東堂は西智学園都市を混乱させ、その上学園都市を裏切った滝河だけでなく、鴨川を始めとした多くの部下を利用するだけして殺された者の仇を討つために目の前の化け物に敢然と立ち向かう。

第15指導 キラーマウンテン覚醒

「お前の相手は俺だ！ 龍造寺！」

雄山が啖呵を切って龍造寺にそう告げると龍造寺は無言で首を振りかぶり、雄山を襲う。だが雄山はそれを容易く避け、腕を後ろに下げ：一気に空気を前へと押し出す。

雄山の実家である大和一族の秘伝の技、大和空掌砲を放ち龍造寺にそれを当てる。その秘伝の技を使う理由は敵が強すぎるからだ。大和空掌砲は長距離でも大砲に匹敵するほどであり、近距離になれば金剛石をも軽々と砕く：その一撃が龍造寺に直撃する。

「フン…くだらぬわ！」

だがその程度では龍造寺は倒せない。龍造寺の身体は謎の物質で出来た鱗で覆われており、大和空掌砲で龍造寺にダメージを与えることなど不可能だった。それは雄山も承知の上だ。あくまで雄山がやるべきことは困だ。

「ハッ！」

雄山は持っていた針を魔力と気で強化し、龍造寺に向けて投げる。その針の威力は鋼の板45mmを貫通するほどの威力だ。しかしそれでも龍造寺の鱗には通らない。い

かに龍造寺の鱗が硬いかわかるだろう。

「喰らえいっ!」

龍造寺がその場をジャンプして、雄山を踏み潰そうとする。その巨大な身体から生まれる体重で押しつぶされたら、どんなに身体が丈夫でもペシャンコになってしまうだろう。

「っ!」

雄山は右に行き、今度は龍造寺の目を狙い針を投げる。確かに身体全体は硬い鱗で覆われているが目に関しては別だ。そこだけは無防備であり、素っ裸である。

しかし龍造寺は首を振ってそれを躲す。

「無駄だというのがわからぬか!」

龍造寺の左首が炎の吐くために口を開け、チャンスが訪れる。

「えーいっ!!」

それまで隠れていた東堂によって投げられた爆弾が龍造寺の口の中に入り、龍造寺の腹の中で爆弾を起こす。

「やった! やりましたよ! 先生えっ!!」

東堂がそれを見て雄山に抱きつき、身体で喜びを表現する。しかし雄山は喜びを感じていなかった。

「…」

いきなりチャンスが訪れ、東堂も龍造寺の口の中に爆弾を入れた。身体は金ピカなままでもその中身はぐちゃぐちゃになって死んでいる。その証拠に目が白目になり、三つの首が項垂れている。だが龍造寺は聞いていたわけではないにせよ、東堂が離れた時点で警戒なり何なりと出来たはずだ。雄山はそう思っていた。

「どうしましたユーザン先生？」

東堂が雄山が浮かない顔をしていたのを不思議に思い、尋ねる。

「いや…あまりにもあいつが呆気ないと思ってたんだ。これが妖魔連合会を支配していた男なのかってな」

「何言っているんですかユーザン先生！ あの爆弾はユーザン先生の作った爆弾でしょ？ もっと自信持つてくださいよ!!」

「それはそうだが…今までの経験からするとこんなもんじゃねえ気がする。俺は長期戦になる…そう覚悟していたんだ。なのにこいつときたら妖力と身体だけの虚仮威しなのか…ってな」

雄山が顔を顰め、唸る。雄山が経験した中で一番呆気ない結末だった。魔力…妖怪でいうなら妖力、人間でいうなら霊力に相当する力を膨大に持っているにもかかわらず、ここまで呆気なく倒したのは雄山にとっても初めてだ。

「倒したのが信じられないだけじゃないですか？」

「確かにな。鴨川然り、春澤然り、どいつもこいつもあの爆弾を使わなかったから強く感じただけか？」

鴨川と春澤は後に死んだとはいえ生かしておいたが龍造寺は違う。龍造寺を相手にするには容赦なく全力を尽くす必要があった。

「そうですよ！」

東堂は龍造寺の死体に近づき、その身体にベタベタと叩く。

「こんな冷たい身体が生きているわけないですって！」

「冷たい……？」

雄山はそれを聞いて不審に思った。東堂の目の前で死んだ滝河はすでに冷たくなっていたものの、通常死んだ直後というのは体温がすぐに奪われるわけではない。冷凍物のように冷たくなるのはしばらくの間時間がかかる。

見た目通り冷温動物なのかあるいは……

「東堂！ 離れろ!!」

雄山がそう叫ぶが東堂は突然のことに身体が動かない。龍造寺の手が東堂を拘束した。

「ハハハ！ 危うく死にかけたぞ……！ 小娘！」

「ど、どおして…?」

東堂が握られながら、龍造寺に尋ねると龍造寺はニヤリと悪魔の笑みを浮かべた。

「此の世にはごく稀に超能力を扱える者がいる…人はそれをエスパーと呼ぶ。私もそのエスパーだ。もつとも我はテレキネシスを応用したもので我自身の衝撃を自動的に打ち消すようなものだがな」

「それじゃあの爆弾も…?」

「汝の想像している通りだ。私の身体は汝の放った爆弾の衝撃を打ち消し、消化しただけだ」

雄山が作った爆弾は妖力を吸収して、それを膨大に膨らませて爆発する代物だ。言ってみれば火薬も使わない衝撃のみの爆弾である。それ故に龍造寺が相手では分が悪かった…

「さて…邪魔者は消えて貰おう」

そして龍造寺は東堂の翼を指を使って腕いだ。

「ああああっ?!?!」

東堂は悲鳴をあげ、翼の部分から骨が露出し血だらけになる。

「俺の相棒に何をする!!」

雄山は東堂を救うため、攻撃を与えようとナイフを取り出し龍造寺の指の前までジャ

ンブした。

「うるさい奴だ。」

龍造寺の尻尾がハエを落とすハエタタキのように雄山をはたき落としたり。

「がっ…!?!」

仰向けになり、雄山は受け身を取るが龍造寺の超能力のせいかわり雄山の口元から血が吐き出る。

「大人しくしているキラーマウンテン！ なあに、あの世ですぐに会えるようにしてやる」

そして龍造寺は手元の東堂を飲み込んだ。

「東…堂…っ!!」

かつて雄山は弟に被害が及ばぬように陰陽師を引退した。そして西智学園都市を救うために陰陽師に復帰した…だが東堂が飲み込まれてしまい、何一つとて変わっていない。否、むしろ勇姿の時よりも最悪な状況だ。東堂という大切な相棒が死に、自分は何一つも出来なかった…そんな自分自身に腹が立ち、雄山は涙を流す。

「待たせたなキラーマウンテン。次は汝の番だ」

「龍造寺…俺はお前を殺す…っ!!」

雄山はありったけの殺意を込め、龍造寺に立ち向かい、腕を振った。



9年前、山奥の某会場にて：それは行われていた。

この会場には黒ずくめの男と強面の外国人しかおらず、怪しさ満点の雰囲気醸し出していった。

「ソレデハ始メマス」

中国人らしき男が、あまりにも素人すぎて逆に芸術かと思えるほどの絵画を持って来た：：

「オオ!! 始マルノカ!」

しかしそんなことは御構い無しに絵画が出てくるとともに会場のボルテージが上がる。

「デハ最初ハ五百カラ!」

「六百!」

「七百!」

そして千五百まで引き上げ、その男が競り落とすと絵画と同時に袋詰め粉が渡された。そしてその男は絵の方を向きながらその粉を舐め味を確認した。

「シー…確カニ本物ノヨウダナ」

…もうお判りの方はわかっているだろうが解説させてもらおう。そう絵画のオーク

シヨンに見せかせたマフィア達の麻薬（ヤク）販売である。決められた量でなく値段に応じた量も増える為にここにいるマフィア達が揉めることはない。

「次ハ」

司会者が次に進めようとすると会場の扉が乱暴に開き、一つの影が見えた。

「てめえら全員…皆殺しだ。弟に傷つけたケジメしつかりつけてもらうぜ」

「キ、キサマハ!?!」

「てめえらは俺のことをキラーマウンテンなんて呼ぶみてえだが俺の名前は大和雄山だ。…もつともこれから死ぬ奴に名乗る必要はないがな」

そう、その男は大和雄山だ。かつて雄山はマフィア狩りの仕事を趣味として陰陽師活動をしており、それを楽しんでいた。

「アノ勇姿ノ兄ガキラーマウンテントハ誤算ダツタ…：国へ帰ル時ニ襲ツテオケバ良カッタ…」

だがここにいるマフィア達は弟の勇姿を襲撃し、報復した。だがそれが雄山の怒りを買った。マフィアの言う通り欲張らず帰国寸前に勇姿を襲っておけばキラーマウンテント雄山といえども追いかけてはこなかっただろう。

「ダガ我々トテ無防備ニココニ来タ訳デハナイ！」

しかしマフィアとしてバカではない。万が一の時に備えた幾らかの兵隊を寄越し、雄山

の前に立ち塞がる。

「キラーマウンテン：ココニ居ルノハ全員ガ本国カラ取り寄せタヒットマン。貴様トテ死ヌ」

「で？ それがどうした。」

「貴公ノ首ハ弟ト一緒ニ海蘊トナルノガオ似合イダ」

その瞬間、数多くいたヒットマンの首と胴体が二つに分かれた。

「ナツ：何ヲシタ!? キラーマウンテン!?!」

「…答える義務はねえよ。てめえらが死ぬ過程を知りたいのか?」

「フザケルナ！ ヒットマンダケジャナイ！ 腐ッテモオレ達ハマファイアダ！ 堅気ニ

舐メラレテ引キ下ガルノハヘタレダケダ！」

そのマフィアもまた犠牲となり、死んでいった。雄山の怒りの対象となるマフィアはそれを見て凍りつく：

「なら堅気相手に手を出すてめえらはヘタレクソ野郎だな」

弟は何も知らなかったとはいえ怪我を負わせてしまった：それだけが雄山の悲しみと憎しみを生んだ。

「命令する。死ね」

そしてその場にいたマフィア全員の首が刃物のようなもので切断されていたが警察

はその凶器となるものを調査するも見つからず、証拠不十分により雄山を捕まえることは出来なかった。

▲▼▲▼☆☆☆☆▼▼▲▲

時は戻り現在…

「…なっ!?!」

龍造寺の三つ首のうちの一つが飛ばされていた。

「龍造寺…てめえの死に場所はここに決まった」

それはあの時のマフィアの時と全く同じだった。

「キラーマウンテン…今になって怒ったのか?」

「当然だ。お前に対する怒りが半分、俺自身の情けなさに半分…それを発散するにはお前を殺して東堂を取り戻す! それだけだ」

「ふん…あの小娘に拘るとは昔のお前が聞いたら信じられぬだろうよ」

「俺の過去のデータなんかに頼っているようじゃお前はもう終わっている」

そして龍造寺のもう一つの首がなくなり、残り一つとなった。

「凡庸な者ならばな。だが…ヌウウウツ!」

龍造寺は首をトカゲの尻尾のように生やして再び三つ首に増やした。

「だが我は妖魔連合会会長、龍造寺時夜也! 妖魔の長となるべくして生まれた者!

汝の力では我を命も行動も止めることは出来ぬということを知れ！」
「妖魔の長なんて器じゃねえよ。お前は」

雄山の一言の後、沈黙の空気が流れ、誰一人も動かない。

かと思いきや、龍造寺が動いた。

「ゴアアアッ！」

炎、吹雪、光線の三つの息が雄山の視界を埋め尽くし、炎の息の通った場所は黒焦げ、吹雪の息は銀河を映し、光線は太陽を彷彿させるような跡がそこに残った。

「龍造寺、一つ教えてやる」

雄山はそれらを交わし、龍造寺の上までジャンプすると手刀を作り、上段構えをとつた。

「人間よりもでかい動物は身体を真つ二つにされたら絶対に死ぬ」

そして雄山はその手刀を振り下ろした。

「…それがどうした？ 何度でも言う…：我は自分に來た衝撃を打ち消す超能力を持つている。故に空掌など効かぬ」

「それが逆に仇になるんだよ」

「何を戯けたことを…！」

龍造寺の鱗に切れ目が入り、それは時が経つに連れ、頭、中央の首、胴体へと続く。

「あ？ あああっ!!」

そして龍造寺の尻尾まで切れ目が入り、それを境目とした右半身と左半身がズレ始めた。

「こ、こんなバ…!?!」

龍造寺が言い終える前に龍造寺の切れ目から血が噴出する。そして右半身と左半身が別れを告げたかのようにそれぞれの方向に倒れる。

「大和空掌斬。空掌の奥義とされている技だ。ご先祖様がもつとネーミングセンスがあればよかつたんだが…そっちの方面は皆無だった。威力はあるくせに厨二臭え名前が欠点なんだよな…空掌ってのは」

そう一人愚痴ると龍造寺の右の首と左の首を切り落とし、担いで東堂に黙礼をする…これで終わったのだ。雄山の教師としての生活も、陰陽師としての仕事も、そして何もかもが。

「…ん?」

だがその最中僅かに声が聞こえ、首を置いて音が聞こえた方向へ向かうとボロボロになった東堂がそこにいた。

「先生〜!」

いつ死ぬかという不安や雄山が助け出してくれたことによつて生まれた安堵。そん

な感情が入り混じり、東堂は涙を流さずにはいられず、雄山に抱きつく。

「大丈夫だったか？」

「はい…運良く胃に達して胃液に溶かされないように端の方に避難してましたから…」

「それじゃ学園都市に帰ろうか。東堂」

「はいっ！」

こうして雄山達は一度学園都市に帰宅することになった。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「三頭竜は死んだか…情けない奴だ」

だがこの時雄山達は気づかなかった。顔に傷を負った大男がそれを見ていたことを

…

「所詮、失敗作は失敗しか産まないということか。この事をボスに報告するか」

そしてその大男はその場から立ち去り、雄山達から離れた。

第16指導 始まりの終わり



翌朝、学園都市に着くと二人は別れ、雄山はそれまでのことを学園長に報告していた。

「雄山先生、おかえりなさい」

「学園長……」

「滝河君の件は残念だったが……無事に戻ってきたということは鴨川弁当を潰したきたのかね？」

学園長は嬉しそうにそう尋ねた。

「はい。ですが鴨川は黒幕ではありませんでした。本当の黒幕は妖魔連合会という組織です」

「妖魔連合会……？」

「早い話が人妖平等を唱えるテロリストとっていいでしょう」

それを聞いた学園長は鴨川の事件もあつてかテロリストという言葉に過敏になつており、焦つた。

「何だ?!」では至急その組織妖魔連合会について調べる必要が……」

雄山が学園長の言葉を遮るように学園長の電話の電源を切ると首を振った。

「雄山先生？」

「その心配はありません。妖魔連合会の長や幹部5人は死に、残りの残党も陰陽師協会の方で調査中です」

「それは良かった……！ 流石、雄山先生ですな」

学園長は学園都市に平穏な日々が戻ったことに安堵し、笑った。

「それで報酬の件ですがこれを受け取って貰えませんか？」

「……雄山先生、本気ですか？」

学園長はそれまでの笑いを消し、雄山から渡されたものをマジマジと見る。

「本気です。俺は引退した後、陰陽師協会の方と契約しています。もし万一陰陽師として復職する時、陰陽師協会専属の陰陽師として働くようにと」

「まさかそんな契約があるとは……」

学園長は納得した。これまで雄山が陰陽師として活動しない理由がここにあり、皮肉にも教師としての生活を奪うことになってしまったことに後悔した。

「もつとも陰陽師協会専属とはいえ仕事でここに来るでしょう。西智学園都市はまだ創設されてから二十数年と間もないのに関わらず、面積は大阪府、人口300万人を超える世界最大級の学園都市です……が圧倒的に陰陽師の数が足りない……今回はまだ大騒ぎ

にならずに済んだものの滝河のように買収されたら西智学園都市は大混乱する事態は避けられません。専属の間人であつても学園都市を知っているならばここに駆り出されるのは目に見えています」

「しかし雄山先生、まだ4月です。せめて次の学期まで待つていただけませんか？ 中部の方の国語教師から取り寄せるにしても時間が足りません」

「俺はその言葉にイエスとはいえません。一刻も早く陰陽師として戻らなければならぬ時が来てしまったということなんですよ」

雄山は哀しげに答えると学園長が眉を寄せた。

「わかりました。：しかしせめてオカルト部に挨拶してきてもらえませんか？ オカル

ト部の部員達も雄山先生を慕っています」

「幽霊部員がかなりいますけどね…」

雄山はそう言つて苦笑した。それだけオカルト部は幽霊部員が多いのだ。

「ですが今年入つた新入生は違うでしょう？」

「ええ。矢田と長門は毎日部室に来てると佐竹先生と伊崎先生から聞きました」

「もし、そんな真面目な生徒達に何も告げずに去つて行つたら雄山先生に何かあつたと勘違いされます。そうなれば雄山先生も活動しにくいでしょう」

「：確かにそうですね。それと今日から5日間程、東堂を陰陽師協会の方へ連れて行か

ねばならずその間公欠にしてもらえませんか？」

「東堂君に何か問題でもあったのか!？」

雄山の話聞いて学園長は驚き跳ねた。もし雄山がミスをしたのであれば失敗を押し付ける…のではなく、学園都市の陰陽師では手がつけられない事態である。

「学園長落ち着いて下さい。少なくとも命に関わることはありません。むしろ逆です…陰陽師協会の後ろ盾を得る為に東堂を式にさせる必要があります。その為の手続きをしなければなりません。親御さんに外泊の理由を伝えておいてください」

「そういうことか…よし。そちらの方も手続きしましょう」

そして学園長が書類に書き手続きをしながら話しかけた。

「後、雄山先生。退職金に色をつけて口座に振り込んでおきました。君の実家からすればはした金かもしれないが私達なりのお礼です…学園都市やその他多くの犠牲者を救ってくれてありがとうございます」

「…では失礼します」

そして雄山はその場から出て行き、放送室に東堂を呼び出すように指示した。

【高等部2年の東堂美帆さん。至急職員室の大和雄山先生のところへ来てください】

これを聞いた東堂は友達との話を切り上げて雄山のところに向かった。

「ユーザン先生から呼び出されるって何の用なんだろう?」

東堂はそれだけを不思議に思って職員室へ向かうと雄山がそこで待機していた。

「東堂、来たか」

「ユーズン先生、一体何の用ですか？」

「まあここで話すのも何だ…生徒指導室に行くぞ。そこに行けば椅子もあるしな」

「はい」



生徒指導室の空気は重く、沈黙の状態だった。

「東堂、呼び出された理由わかるな？」

「いえ…」

「わからねえか？ 簡単に言う。お前を陰陽師協会に登録する」

「陰陽師協会…？」

「ああ。まず陰陽師協会ってのを知らねえのか？」

「はい」

「陰陽師協会は妖怪退治等の裏の仕事をこなす陰陽師を中心とした組織団体だ。世間一般的には法人って体制でやっているから誰でも実力があれば所属出来、どんな経歴も問わねえ」

「妖怪もですか？」

「まあな…色々条件があるが後々説明する。…組織団体に勢力があるように陰陽師協会にも勢力がある」

「勢力？」

「陰陽師協会のトップ…陰陽師協会会長の勢力と陰陽師協会最大内部組織を持つ大和一族の二つの争いがある」

「最大内部組織ってなんですか？」

「世の中には親戚全員がその会社に勤め、会社に影響力を持つ場合がある。その親戚共のことを内部組織と言っている。その中でも最も大きな影響力を持つのが最大内部組織だ」

「じゃあユーズン先生の大和一族も？」

「そういうことだ。俺の実家も陰陽師協会に所属していて、その多くが大活躍…いや大活躍しているおかげで陰陽師協会にも影響力がある。しかも陰陽師協会の最大のスポンサーが大和財閥…つまり大和一族の金を陰陽師共が雀っているってことだ。だから会長や恐れを知らない馬鹿幹部以外は全員大和一族の傘下に入っているって訳だ」

「でもそれだったら何で大和一族は陰陽師協会から独立しないんですか？それだけ影響力があるなら抜けても問題ないと思うんですが」

「陰陽師協会を作ったのが大和財閥の創設者だからだ」

「えっ!? 大和財閥ってあの 大和財閥ですか!？」

「そうだ…大和一族が陰陽師協会を抜け出せば何を言われるかわかったもんじゃない。大和財閥とは全く関係ない奴らに陰陽師協会を乗っ取られたことになって面目丸つぶれになって大和財閥諸共終わりってことだな。だからこそ大和一族は権力を持って影響力を持ったんだ」

「…複雑ですね」

「もつと複雑な事情もある。俺は一度陰陽師を引退した以上、陰陽師としての力があるかどうかを示さなければならぬ」

「どうやって?」

「その手土産用に龍造寺の二つの首を俺の車に積んでいる。それを見せれば流石の大兄貴も認める筈だ」

「大兄貴…?」

「俺達兄弟の長兄、大和雄大。陰陽師協会会長代行にして大和宗家当主…つまり現時点で陰陽師協会でも最も影響力を持つ男とこれから会うんだよ」

「こゝ、殺されたりしませんか?」

東堂は自分が吸血鬼であることを自覚しており、陰陽師から敵視されている存在だと思っていた。

「安心しろ。その為のコレだ」

雄山が手紙を取り出し、東堂に手渡しするとジロジロと外袋を見た。

「…別に開けていいぞ。それはコピーだ」

「はい…えーと…」

【東堂美帆

上記の者を推薦者の式として推薦する。

推薦者 大和雄山】

「…お尋ねしたいんですが式ってなんですか？」

東堂はそれを見ても嫌な汗がダラダラと流れてきた。

「式神の略語…西洋風にいえば使い魔。要するにパートナー的な存在だ」

「な、何で私が式神なんですか!？」

東堂が声を荒げて机を叩くが雄山は涼しい顔をしていた。

「まあ落ち着け。妖怪で陰陽師をやるからには信頼つてものが必要だ。信頼されなきゃ依頼もされねえし、下手したら他の陰陽師に殺される可能性もある。しかし陰陽師の式となつて働けば話は別だ。その陰陽師が信頼しているつてことはその妖怪は安全な妖怪だつて言っている証拠だからな。それにちゃんと仕事すれば依頼人から顔を覚えられて仕事にもありつける」

「つまり妖怪の保護目的ですか…?」

「そういうこつた。でだ…そこから陰陽師になる方法は陰陽師になる試験を受けて合格するか、その陰陽師が推薦する方法、他にもあるがこの二つが一般的だ」

「なるほど…でもその陰陽師さんが式を意地悪したらどうなるんですか?」

「まあ徹底的に調べた上で黒だったら陰陽師剥奪。白だったら式が不満を抱いていると見なして他の陰陽師に式の所有権が移る」

「へえ〜」

「他に質問はあるか? なきゃこれからのことを説明する」

「これからユーズン先生のお兄さん…陰陽師協会の会長さんに会うって言っていましたけど…それも説明が含まれてますか?」

「正確には会長代行だ。…まあそうだな。これから俺が説明するのは大兄貴と会う理由、何故お前が陰陽師協会に登録するか、とにかく説明することだらけだ。だがそんなことは後でも出来る。今説明しなきゃいけないのは3泊4日の外泊の準備だ」

「外泊…!?!」

「そうだ。ここから陰陽師協会まで半日、さらに大兄貴に会うまで半日、陰陽師協会の手続きが終わるまで2日かかる…」

「2日も何しているんですか?」

「俺とお前の適性検査を1日かけてやるんだよ……俺は元陰陽師とはいえ陰陽師になる以上ある程度の強さが必要だし、お前も式ならそれをサポートする力が必要だ」

「でもまだ1日足りませんよ?」

「その1日は検査の受付の時間と俺が陰陽師として、お前が式として相応しいかどうかを判断するんだよ。これでも随分早い方だぜ? 何しろ俺たち以外にも検査を受ける奴らは大勢いる訳だしな。せいづらも纏めてやるから時間がかかるんだ」

「なるほど……陰陽師協会も大変なんですね」

「学園長や親御さんにも話はつけてある。明日の午前6時、俺の車に荷物を積んだら乗れ。話は以上だ」

「はい。でも明日説明してくださいね……色々と」

そう言つて東堂は生徒指導室から出て行き、雄山が一人残された。

「勇姿、てめえは一体何してやがる……俺はてめえを守る為に陰陽師を辞めたのに上手くいかねえもんだな。大兄貴に伝えておくれ。てめえはぶらぶらぶらぶらついているつてな」

雄山が陰陽師協会に行く本当の目的は行方不明となつた弟を探す為だった。雄山には兄が二人いる。しかし弟は一人だ。それ故に雄山は勇姿を可愛がり、勇姿もまた雄山を慕っていた。

「だからよ。俺の前に一度でも姿見せてみろよ。そうすりゃ大兄貴に大目玉喰らわなく

て済むぜ」

雄山は窓を開け、日差しを浴びて少し経つと矢田と長門に別れを告げ、明日の支度を進めた。

1章 勇姿の影

第17指導 協会の概要

とあることがキツカケで教師を辞め、陰陽師に戻ることになってしまった大和雄山。それと式として保護されなくてはならなくなった吸血鬼の女子高生、東堂美帆。二人は車を使い、陰陽師協会へと向かっていた。

「ユーザン先生、そういえばこれから会う人ってユーザン先生のお兄さんなんですよね？」

「ああ。大兄貴がどうした？」

「ユーザン先生のお兄さんが現時点での陰陽師協会のトップって言っていましたけど會長さんはどうしたんですか？ お兄さんは確か會長代行のはずじやないですか？」

それは確かにそうだ。雄山の兄、雄大はあくまで會長代行でしかなく、會長そのものではない。しかしそれにもかかわらず會長と同じ立場にあるということは異常なのだ。

「會長は5年前からすい臓癌で入院中だ。6年前、20代という異例中の異例の若さ：それも同期の大兄貴を凌いで會長に就任したのにわずか一年しか活躍出来なかった。不運にも程がある：そんな會長に代わって大兄貴が5年前から會長代行として會長の

仕事を処理しているって訳だ」

「でも会長代行じゃなくても会長になつたらいいんじゃないんですか？ 今の会長さんの病気のすい臓癌つてもものすごく苦しいみたいですし、引退しても文句は言われなと思います」

「アホ抜かすなよ…今の会長が辞めたいと思つても辞められない状況なんだ。前にも言つたが陰陽師協会は会長と大兄貴の二つの派閥が出来ている。大兄貴が会長になろうとしたら現会長一派が防ぐはずだ。今でも大兄貴を蹴落とそうとしているのに下手に動いたら真つ先にやられる。会長代行になれただけでも凄いい方だ」

「まるで暴力団ですね…」

「そんなもんだ。俺みたいな奴が陰陽師だからな」

確かに雄山の顔は顔面凶器と呼ばれる程凶悪なもので下手な暴力団（ヤクザ）やマル暴よりも恐ろしい顔つきである。そんな顔つきの男の所属する組織が普通なはずがない。

「でだ…もうわかつているとは思うが一応説明するぞ。東堂、お前が陰陽師協会に登録する理由…」

話を交え、雄山は東堂に語りかけた。

「陰陽師協会の保護下に入っておく…ってことですよね？」

「そうだ。陰陽師協会に登録すれば陰陽師から狙われる確率は低くなる。同業殺しをするなんて真似は余程の事がなきゃしないからな」

「テロリストみたいな人達じゃない限り安全ってことですよね」

「…そういうことだ。でだ、これから大兄貴に会う理由についてはまだ話しちやいねえし、詳しく話す」

「…」

東堂は唾を飲み、雄山の言葉を待つ。

「ただ陰陽師協会に登録するだけなら大兄貴に会う必要はねえ。むしろ大兄貴と会う理由はそんなことじゃない。大兄貴と会う主な理由は後ろ盾を得るためだ」

「後ろ盾？」

「自分の意思でないとはいえお前が大暴れしたことは時間を巻き戻さない限りは不可能だ。それはわかるな？」

「ええ、まさか興奮剤が混ざっているなんて思いもしませんでしたから…」

「そういった過去を利用して何度も弄られる可能性がある。だが大和一族の下に入れば別だ。大和一族は情報操作が得意な一族だ。鴨川の種族…竜人なんかがいい例だろうな」

「情報操作…」

「要するにお前の過去を書き換えることも容易いってことだ。そうなれば俺もお前も皆ハッピーな展開だ。俺は東堂を守る。東堂は命の危険がなくなる。そして大和一族は新しい戦力が手に入るって訳だ。その為には大和一族の長たる大兄貴に会わなきゃ話にならねえってこった」

「そういうことですか…でも私一人の為にそんな情報操作して大丈夫なんですか？」

情報操作をするにはかなりのコネと多額の金が必要であり、借金を負わされるのではないかと不安になった東堂は眉を寄せた。

「心配ねえよ。そういうアピールをすることで宣伝になるし、宣伝のおかげで戦力が増して、大和一族はデカくなって来たんだ。だから傘の下に入れば借金を負う必要もねえ」

「うくん…でも相当お金かかりそうですね。本当に私一人でそんなに情報操作しても大丈夫なんですか？」

「安心しろ。逆にそういう情報が役に立つんだよ。国とか富裕層とかの脅しとかにもな」

「案外現実的ですね…」

「現実的であってこそその人生つてのは上手くいく。理想的過ぎるのは良くないからな」

30分のトイレ休憩にするぞ。と付け加えると雄山はS Aに寄ってトイレを済ませ

る。

そして雄山は自販機を見つけ、腕を組む。

「…女子高生って何が好きなんだ？」

雄山は女子高生ではない。共学の男性教師である。しかもその男性教師も辞めてきた。はつきり言つて雄山はそんなことがわかるわけないのだ。

「…まあこれとこれにするか。いぎとなりや交換すればいいしな」

自販機にあるペットボトルのお茶を二つ、唐揚げと焼きおにぎりをそれぞれ一つずつ買つて戻ろうとした。

「…っ!？」

だがその過程で今までは全く異なる視線を感じ、雄山は違和感がない程度に当たりを見渡すが何もいない。

「(気のせいかな? まあそういうこともあるだろうな)」

そう思い、雄山は車に乗り込んで東堂にお茶と唐揚げ、焼きおにぎりを渡すとその場を離れた。

▲▼▲▼☆☆☆☆▼▲▼▲

陰陽師協会に着いた雄山達は受付をしていた。

「予約を入れた大和雄山だ。会長代行に会わせてくれ」

女性の職員にそう言つて受付をするが職員は首を振つた。

「会長代行は不在です。おかえりください」

まるで関係ないと言わんばかりに雄山に言い放つと雄山は顔を顰めた。

「不在なはずがない。会長代行がここにいることはわかっている」

「何度でも言いますが会長代行は不在です。おかえりください」

「ブチツ」と雄山の頭の中で何かがキレる音が聞こえ、職員の頬を顎ごと右手で掴んだ。

「おい、いい加減にしろ。こっちはこの時間帯に会長代行と予めここで会うように連絡を取っているんだ。それでも不在というならためえの顎壊すぞ」

「ミシミシと職員の骨の音が響き、職員が真っ青な顔になる。」

「ユ、ユーズン先生！」

東堂が必死に止めるが雄山はまだ続けた。

「黙つてろ……こういう身内のバカはきつちり教育しなきゃいけないんだ」

「止めろヤマ」

だから……と続けようとしたところで一人の男がやってきた。その男の顔つきは雄山とは違い、柔和な笑顔が似合う好青年だ。一言でいうならイケメン王子様と言った感じだろう。

「会長代行……ご久しぶりです」

それを見た雄山はすぐに職員から手を離し、礼をした。この男こそが雄山達兄弟の長兄、大和雄大だ。

「ヤマ……私がない間にそんなことをしていたのか？」

「いえ……こいつが会長代行に会わせると言っても不在だと抜かしたのでつい……」

「そのついでとやらで使い物にならなくなったらどうするつもりだ？」

「もともと使い物にならないものを使い物にする方がおかしいだろうが！ 大兄貴！」

「逆ギレか。まあいい。後で説教するのはともかく……納谷さん。今日の仕事は切り上げてください。明後日から長野支部の方で働いてもらう。こんな奴がいても仕事がやり辛いだろう？」

雄大は受付をした職員、納谷の肩に手を乗せる。

「……はい」

「うちのバカが迷惑をかけたな……迷惑料だ。これで美味しいものでも食べてくれ」

そして雄大は手元から薄い封筒を取り出してそれを納谷に渡した。

「ありがたく……!？」

「頂戴いたします……と告げる前に納谷はそれを渡されて狼狽えた。

「会長代行……これ何が入っているんですか？」

見た目に反してそれはかなり重かった。一万円千枚…つまり千万円で1kgある。しかし、この封筒の中身はそれと同じくらいのもかさであるにもかかわらず千万円あるとは思えないほどの薄さだ。納谷はそれが何なのか気になり、尋ねた。

「金塊1kgだ…それだけじゃ不満か？」

「と、とんでもないございませぬ!!では失礼します！」

納谷がすぐにその場から立ち去ると雄山が口を開いた。

「流石、大兄貴だな。無能な優しい上司のふりをしてあいつを始末するなんて…中々えげつない」

「人聞きの悪いことを言うなヤマ…あいつが邪悪なる心の持ち主でなければ良いだけのことだ。それよりもその子がヤマの言っていた式候補か？」

「あ、はい！ 東堂美帆です。ユーザン先生にはお世話もなりますがご迷惑をおかけしないように頑張ります！」

雄大が東堂を見つめると、東堂が自己紹介してアピールする。

「ヤマ…中々面白い奴を拾ったな。確かにお前らしいな」

「これから話すことも俺らしい内容だ。場所を変えよう。大兄貴、どこか空いている場所ないか？」

雄山がそう言うのと雄大は電話をかけた。

「もしもし私だ、大和雄大だ。受付一人寄越してくれ。それとこれから6時間は私の部屋に蟻一匹たりとも通すな。用件があれば電話で聞く。以上だ」

雄大は電話を切り、背中を向けた。

「ヤマついてこい」

それだけ告げると雄大は歩き出し、奥へと進んだ。

「ユーザン先生。質問いいですか?」

「何だ?」

雄山達が歩いていると東堂が話しかけて来て雄山はそれに応える。

「さっきの納谷って人の始末がどうたらって言ってましたけどあれってどういうことですか?」

「ああ…あれか。昔から金を持ちすぎると心が汚れる…なんて迷信があるだろ? 心が汚れば妖怪が寄り付くようになる…その汚れが汚いほど強い妖怪に襲われて死ぬって訳だ。そうならない為には金を綺麗なところで洗浄するか強くなって妖怪諸共ぶち殺すしかねえ。大和一族は後者を選んで強くなつたって訳だな」

「へえ…」

「あの納谷って奴はどういう理由だかはわからねえが俺と大兄貴を会わせまいとしていた。自分の不正を無理やり通そうとした奴にそんな金を渡したらどうなる?」

「欲を剥き出しにしたから殺される……ってことですか？」

「そう言うことだ。殺されなきや奴の背後に会長派があるってことがわかる。どっちにしても有利になったことには違いねえってことだ」

雄山がそう断言すると雄大が止まった。

「ヤマ……甘いな。会長派はその程度じゃ全く動じないし、すぐに納谷を切り捨てるだろう。私はそれとは無縁の小さなゴミをゴミ箱に入れただけのことだ」

雄大は再び歩き出し、更に奥へと進んだ。

「大兄貴はやっぱりえげつないな……」

「……ですな」

二人はそれを追いかけた。

第18指導 対立と協力

「さてと…ヤマ。態々私を呼び出した理由…そろそろ教えて貰おうか」

雄山、東堂が雄大に対峙するようにソファに座る。

「大兄貴…これを見ればわかる」

雄山がそういつて取り出したのは巨大な鉄の箱だった。

「この中に電話で報告した妖魔連合会会長、龍造寺時夜の頭が入っている」

「例のテロリストの首領か」

雄大は電話で雄山の言っていたことを思い出し、頷いた。

「種族はギドラ。三つ首の竜だ。その中に首が三つ入っている…うち一つは真つ二つに分かれたがそれでも充分だろ？」

雄山は箱を開け雄大に見せると納得し、雄大が触り始めた。

「確かに作り物ではない…本物だ。だがその首がどうした？」

その触り心地や鱗などから判断して作り物でないと確信するが話の流れがわからな
い。

「大兄貴も鈍いな…こいつを始めとした妖魔連合会は人妖平等を唱え、それを実現する

為だけに西智学園都市を混乱させてその隙を突いて乗っ取ろうとしていたんだよ。そこにいる東堂を始めとした妖怪の血を引いた子供達を暴走させてな」

それを聞いて雄大はようやく理解し、頭の中で思考し、口を開けた。

「…そういうことか。ヤマ。西智学園都市はスポンサーである大和財閥によって作られた都市であり密接な関係にある。学園都市を抑えればこの地域の子供達は全員人質に取ったも当然。つまり妖魔連合会は財閥そのものの動きを止める力を欲していた。…となれば私と敵対関係にある勢力が関わっている可能性があるということだな」

雄大のいう通り、西智学園都市は大和財閥がスポンサーとなっておりそのスポンサーになる条件として学園都市の中で優秀な生徒を引き抜いている。生徒からしてみれば大和財閥に入社出来るということで学園都市内の学校に入学しているということになる。

「妖魔連合会を滅ぼした奴らからしてみれば俺と東堂は目の上のタンコブ…命を狙われる身だ。向こうと接触する可能性も高くなる」

「それでこの娘を大和一族の保護下におけ…と言うことか」

雄大は東堂を見る…確かにこのヘツポコ吸血鬼では頼りない。鍛えればモノになるだろうが現状では雄山の足を引っ張ることになる。

「頼む。俺の式として働かせればどうにかなるんだ。その首は大兄貴に献上する…」

雄山が頭を下げ、そう懇願すると雄大は顎に手を添えた。

「ヤマ……ついいいか？」

「なんだ？」

「お前がこの首をやるということは私の手柄ということになる……だがそこまでやる必要はないのではないか？ 私の方にメリツトがありすぎる。……お前の本当の目的はなんだ？」

「勇姿を見つける為だ」

雄山は即答した。

「イサムの行方が分かったのか？」

「そこまではわからねえ……だがその龍造寺が目撃したらしい。」

「目撃した？ この蜥蜴がか？」

雄大は東堂を見、その様子を伺う。

「それは間違いありません。私も聞きました」

東堂の目を見て嘘はついていないと判断すると雄大は雄山に話しかけた。

「……なるほどな。アンサーでも居場所がわからなかったイサムが遂に見つかったか。その為に大和一族の保護下に入ろうと……」

「そうだ」

「ならば私やヒロはともかく、大和一族の協力は得られんと思ってくれ」

「…どういうことだ？」

雄山は雄大が言ったことを理解できなかった。

「…私はお前が去った後の陰陽師協会や大和一族について説明しなきゃいけない。お前が近い最近の動きの中で知っていることと言えば会長が危篤状態になり、協会が会長代行として私を指名した事と、会長派と私の派閥に分かれている…と言うものくらいだろう？」

「そうだ。俺はそれに加えて引退する前…8年前の陰陽師協会の規則くらいしか知らない。今はどうなっているんだ？」

「規則はほとんど変わっていない…強いていうならば式の条件や取り締まりがキツくなっただくらいだ。それは後で確認してくれ。本題は陰陽師協会の勢力図だ」

「大兄貴と会長の二大勢力じゃないのか？」

「平たく言えばの話だ。…ヤマ、大和一族宗家当主任命式にイサムが呼び出された理由、何故だかわかるか？」

雄大は話題を変え、雄山に何故勇姿が関わりのない陰陽師の家の跡継ぎの任命式に呼び出されたのか…その理由を尋ねた。

「勇姿が呼び出された理由？俺達と同じ血の通った兄弟だからだろう…それ以外にある

か？」

雄山のいう通りでもあながち間違いではない。しかし雄大は首を横に振った。

「それだったら陰陽師の家の当主の任命式には出られない。イサムは陰陽師として育てられていない……だがヤマもすでにその身で感じているとは思うが肉弾戦においては大和一族史上最強級。その上私よりもずっと人を惹きつけていた」

「何言ってやがる。大兄貴。確かにあいつはステゴロでマフィア達相手に少しばかり傷を負う程度で済むほどで済んだ……でもよ、少なくとも親父や大兄貴ほど人を惹きつけたのを見たことはない。勇姿は友人すらもほとんど作れないでいたんだぜ？」

勇姿は確かに陰陽師の訓練を受けていないにもかかわらず肉弾戦に関しては最強クラスで雄山達兄弟も一目置いていた。しかし雄大のようなカリスマはなく友達と呼べる人物も数人程度である。

「お前の評価が普通の大和一族の評価だ……だが先代と私は違う。イサムはもつと高く評価されるべきだった。それ故に先代は長兄たる私を差し置いてイサムを宗家当主に任命しようとした」

しかし雄大と先代に当たる雄山達兄弟の父は勇姿を高く評価していた。

「……まさか、雄大さんが勇姿さんを行方不明にさせたの？」

東堂が口を挟み、雄大は苦虫を噛み潰したような顔になった。

「…いや、私はイサムが当主として任命された後、決闘を申し込むつもりだった。お互いに命を懸けてな」

ちなみに日本国内では決闘罪という罪があるが雄大はそれをしておらず未遂行為で済ましている。…したとしても警察や裁判所に圧力をかけてなかったことにするだろうが。

「親父はそれを認めたのか…?」

「勿論だ…先代はイサムが敗ればそれまでと考えていた。それだけイサムを買っていた」

「しかし勇姿が勝ったとしても勇姿は陰陽師の知識はないし、あつたとしてもあいつは脳筋だぞ?」

「脳筋なこととは私も同じだ。むしろ私の方が脳筋過ぎるくらいだ。昔、イサムに『裁判で弁護士や検事は矛盾点を探して犯罪者を庇ったり、追い詰めたりする職業で学がなくとも法律を暗記してしまえば馬鹿でも出来る』と教えたことがあつてな…イサムの唾然とした顔が今でも覚えている」

「…そりやそうだろうな。そんなことが出来るのは親父と兄貴達くらいしかない。それと全国の弁護士と検察官に謝れ」

二人は苦笑し、笑い合った。

「世間話もそこまでにしてだ……他の連中に協力が得られない理由はそれまで酷評していた大和一族が手のひら返してイサムを再評価し始めたからだ」

雄大は笑うのを止めて真剣な表情に戻り、理由を話し始めた。

「……別にそれとこれとは関係ないんじゃないか？」

雄大は雄山達の長兄であり、大和宗家当主でもある。その為勇姿が再評価されたところで雄大の立場を脅かすものではない。

「大有りだ。私達以外の大和一族がイサムが見つけたら当主に仕立て上げ、傀儡にする輩も現れる。……そして会長派のいいなりになる可能性も否定出来ん。そうなれば大和一族は滅亡しかねない。だから私やヒロ、先代しか協力出来ないんだ」

それを聞いて雄山は一人の人物を思い浮かべる。

「……師匠は？ あの人なら力づくで解決出来るだろう。かつては勇姿の手綱を握っていたくらいだからな」

そう、雄山の師匠だ。雄山の師匠は考え方が脳筋であり、恐ろしいまでに強く雄山ですら勝てない存在だ。その師匠は今もなお発言力がある。

「あの人は敵になることはない……が中立だ。どんなに頼んだところで動くことはない」

「さよか……だが東堂を守るには十分だ。大兄貴、よろしく頼む」

「後は任せろ」

雄大のシンプルな言葉は雄山や東堂から見ても頼もしい言葉だった。

第19指導 もう一人の兄



長兄雄大の協力を得た雄山は別れを告げ、東堂と共に旅館へと向かい、到着した。

「あー…疲れた…」

東堂がそんな声を出し、車から降りると雄山は冷えたお茶を取り出した。

「冷たっ!？」

「疲れたならこれを飲んでおけ。明日から忙しくなるぞ」

「それじゃ頂きます…」

東堂がペットボトルを持ってその中身を飲んだ。

【p i p i p i ! !】

端末が音を立て、雄山はポケットの中から端末を取り出し、その相手を見ると非通知と書かれており相手が誰だかわからない。確かめる耳に当てた。

「もしもし。」

【雄山。元気か?】

その声は雄山のような濁声と同じく、地の底を這うような低い男性の声だった。

「勇姿か!？」

その声は雄山の弟、勇姿そのものだった。雄山の顔は驚愕に満ちる。

【いけね…仕事から元に戻し忘れてた】

低い声から透き通った中性的な声に変わり、雄山の顔が悄気る。

【あー…あー…これでいいかな?】

「…なんだよ。裕二か」

電話の相手は雄山の兄であり、雄大がヒロと呼ぶ弟、裕二だった。

【なんだとは失礼な言い方だな。一応これでも血の繋がった雄山のお兄さんなんだよ?】

「確かに血は繋がっているが婿入りした身だろ? それで何のようだ?」

裕二は婿入りした身であり現在、妻の姓を名乗っている為、大和一族とはほぼ無関係。

あえて言うならば裕二は繋ぎとしての役割がある。

【大から聞いたよ。^{まじる}東堂って娘を大和一族の傘の下に入れたいんだって?】

裕二の言う大とは雄大のことで雄大の文字から由来しており、雄大も裕二のことをヒロと呼ぶのも裕二の裕から由来している。

「盗聴した、の間違いなんじゃないのか? そう言うの得意だろうが。」

【ははっ、まあ盗聴しようが誰から聞いても立場は変わりないんじゃないかな?】

「それもそうだな。会長の家に入りましたとはいえ会長本人は虫の息。裕二も大和一族として乗っ取った方が手取り早い。」

そう……裕二は現会長の家に婿入りしており、仲が悪くなった会長派と代行派雄大の繋ぎをしていた。もつとも現在では会長が危篤状態にありそれもほぼ無意味な状態で、裕二としても鬱陶しく思っていた。

「まあそういうこと。大和一族に戻つてもう一度妻を嫁として迎えれば問題ないし、勇姿が帰ってきた方が都合がいい。それより本題行こうか」

「本題?」

「雄山がやつてもらいたいことつて東堂つて娘を大和一族の傘の下に入れることでしょう?」

「まあな……妖魔連合会の残党はいくらか残っているからな。東堂が狙われない理由はない」

「オーケイ! で、その娘を保護下に入る方法は至つて単純……妖魔連合会と繋がつていた連中を一網打尽にすることだ」

「おいおい、こつちは相手がわからないんだぞ? そんな相手を一網打尽にしろと言われても流石に無茶が過ぎるぜ」

「そこで取引しよう。今の僕は表向きは会長一派で公に大和一族の関係者、つまり雄山

を助けることは出来ない。けれど取引なら許されている」

「…つまり後で何かやれってことか？」

【それでもしないとこっちの家から怒られるんでね。雄山の陰陽師復帰が終わった後でいいから僕の会社に来て。その時に僕が出す条件について話そう】

「わかった。そこに行こう」

一二つ返事で了承し、雄山は頷いた。

【それじゃ雄山も了承したことだし妖魔連合会と裏で繋がっていた連中について話そうか】

「もう調べたのか!？」

裕二のあまりの手際の良さに雄山が驚く。雄大が連絡したと考えられる時間を計算するとおよそ15分にも満たない。盗聴説が正しくともそれだけの情報を掴むのには相当な時間を要する。

【まあね。もつと褒めても良いんだぞ?】

「ああ、褒める褒める。偉い偉い。それでどんな奴らなんだ?」

雄山が皮肉げに言うが裕二は相変わらず、笑っていた。しかしその笑い声を止めると裕二の声が真剣そのものとなった。

【妖魔連合会が薬品を使っていたことを大から聞いてピンと来たんだ。その薬品、オー

バーから割り出した結果、日本セル研究所の角田所長が手引きしていた」

裕二は雄山の持つている僅かな情報からそこまで推測し、そこだけを集中して調べていたのだ。雄山はそんな推測ができた兄に脱帽した。

「日本セル研究所の角田所長……って言ったら確かノーベル賞を取ったあいつか？　なんでそんな奴が大和財閥に喧嘩を売るような真似をしたんだ？」

しかしそれ以上に理解出来なかった。それは角田という男だ。角田はノーベル賞を授与し、富や名声等様々なものを持つている。そのような人間がわざわざ大和一族に敵対する理由がない。

「10年以上も前になるけど当時無名だった彼は一度、大和財閥にスポンサーを頼んできたんだ。だけど当時の大和財閥の代表取締役社長だった父さんを除く幹部達が猛反対して大和財閥を逆恨みしているんだ。」

「そーいや親父の代の専務達が辞めていったのはその為か？」

「当時の専務達は欲と傲慢の塊だったから角田の要求を受け入れられなかったから反対したんだろうね。あんなの害にしかならないからこの世から退場して貰ったよ」

むしろ最小限の害であいつらを利用出来た父さんは凄いと思う。と付け加え、裕二は感心していた。それほどまでに専務に対する裕二の評価は低かった。というか裕二の口からこの世から退場して貰ったというあたり未恐ろしい。

「つまり、日本セル研究所以外に会長派の奴らと手を組んでいるのはいないんだな？」

「それ以外に考えられるけど専務達は大や父さんじゃない誰かにやられたから大和一族に恨みを持つているのは極少数。所詮逆恨みでしかないから出来ることもほとんどない…だから一番高いのは日本セル研究所。あそこを当たってみるといいよ」

「ありがとう裕二」

そして雄山は電話を切ろうとすると裕二が慌てた。

「わーっ たった たった！ ちょっと待ってよ。」

「今度はなんだ？」

雄山は裕二の声にイラつときたがそれでキレる程短気ではない。しかしイラついた声で語る姿は暴力団ヤクザそのものである。

「雄山、ゲームの俳優やってみない？ 給料出すよ？」

「裕二の会社の主力、VRMOシリーズに俺が出ていいのか？」

「悪役顔で物凄いインパクトあるキャラっていうのが今のところ周りに雄山しかないんだよ」

「…その前に素人、プロ問わないで募集したらどうだ？ あのシリーズは人気だからかなりの人数集まる…その中からキャラクターを作れば良いんじゃないか？」

「あ、そうか。でも気が変わったら僕に連絡してよ。一声でメインストーリーに絡ませ

ることも出来るから」

「そうか。まあ気が向いたらそうする…じゃあな」

そして本当に電話を切ると東堂が興味深そうに雄山を見つめていた。

「今のはユーザン先生のもう一人のお兄さんですか？」

「そうだ…世間じや財閥のトップの大兄貴よりも名前が知られているはずぞ」

「…でも大和財閥以外に有名な大和さんって名前全然知らないですよ？」

「こう言えばわかるか？5年前に世界史上初のVRMMOを作りあげた歩くゲーム・端末製造機…」

「それなら聞いたことがあります！ 九条さんよね！」

「そうだ。ゲーム・IT業界の超大手企業YOU—GREATMAN代表取締役社長…九条裕二。大兄貴の弟で、俺のもう一人の兄貴だ。ちなみにこの端末も裕二が設計したものだ」

「またとんでもない大物が身内にいますね…ユーザン先生の車も大和財閥が作ったものですよね？」

「ああ…俺の車は18になった時親父が誕生日プレゼントにくれたんだ。ちなみに伊崎先生のラジオは親父と裕二が共同で設計して販売されたものだ。懐かしいもんだ…」

雄山が思い出に浸ると勇姿のことも思い出す。あの頃が1番幸せだった…雄山がそ

う感じていると東堂が再び声をかけた。

「でも何で裕二さんの苗字が大和じゃなく九条なんですか？ 会長がどうたらとか言っていますけど……それと何か関係あるんですか？」

東堂の疑問も最もで裕二は大和の姓ではない。大和一族という巨大な一族の御曹司でありながら何故会長の家の姓を名乗るのか疑問に思うのは当然のことだった。

「裕二は会長が倒れる一ヶ月前に会長の妹と政略結婚して婿入りしたんだよ」

「何でそんなことを？」

「大兄貴は勇姿をライバルだと思っていた。……だが会長のことはライバルとして見ていなかった。会長は努力しても勝てなかった。どんなに頑張っても接戦がやつと。勉強やスポーツ、陰陽師としての力、全てにおいて会長は大兄貴に勝つことはなかった……あの日まではな」

「あの日？」

「勇姿がいなくなった日だ。あの日から気力のなくなった大兄貴を出し抜くのは容易かった」

「あ、それで会長になれたんですね」

「そうだ。だが会長は全力を出した大兄貴に勝ちたかつたことに気づいたんだ。会長になった会長は腑抜けたままの大兄貴にキレて会長は大兄貴を殺そうとするまでに憎む

ようになつたんだ」

「殺されかけたんですか!？」

「まあ大兄貴は腐つても大和一族の宗家当主だ。会長を抑えた後、裕二を婿入りさせて会長の下に降つて会長を怒りを鎮めた。早い話が嫉妬が原因でこうなつたんだ。：もつとも大兄貴が勇姿を評価していたことを話さなきゃこんなことはわからなかつたがな」

「へえ…でも会長さんは危篤状態で大和一族は会長さんから力を取り戻すチャンスつてことですか？」

「そのチャンスのキーマンは俺と東堂。俺らの動きにかかっている。俺らはそのチャンスを与える代わりに一族の保護下に入るつて訳だ」

「それじゃ私達の行動次第で待遇も決まるつてことですか…」

「だがその前に登録してテストに合格しなきゃいけない。部屋は別々にするが明日に備えて早く寝ろ」

雄山はその後、和風の旅館で受付を済ませ別々の部屋で就寝した。

第20指導 誘拐

深夜、雄山達は旅館の部屋でぐっすりと眠り旅館にいる人々は誰も起きる様子はない。そんな状況の中、一人だけが静まり返った廊下を歩いていった。

「…」

その人物の特徴は身長2mを超える筋骨隆々の大男。普通であればその大男の足音によつて旅館に響き、勘が鋭いものであれば起きる。しかしこの大男は全くと言っていいほど足音を立てず、床を軋ませなかった。

「やれやれ：ボスも何を考えているのかよくわからん。だがボスの命令に従っておかねえと面倒だしな」

この大男はある男に指示されてここまでやってきた。何故そんなことをしなくてはならないのかは疑問であるが上に立つ者の命令は絶対ということを身に染みておりそれを実行してただけだ。

「(さて：探すか)」

大男は音を立てないように慎重に受付の周りを漁り始めた。ただあまりにも暗く、大男の視界では流石に無茶が過ぎるために持つてきた端末を操作して懐中電灯の機能を

利用した。

「(…!! これだ!)」

それを見つければ頭の中に記憶する。その中身は客の名前が書かれた帳簿だった。この旅館は歴史のある旅館というせいか近代化されていない。その為、客の名前と部屋の番号が書かれた帳簿があるのは当然のことだった。

「(ターゲットの部屋は二階の奥の部屋か…面倒だな)」

大男が眉をひそめ、頭を掻こうとしたが下手に音を一切立たせないためにもそれは止めた。しかし現状、頭を掻きたくなくなる事態であるのは違くない。階段を使って移動するというのは床よりも音が立ちやすく、少しでも音を消したい大男からしてみれば大きな障害となっていた。

「(…あまりこういうことはやりたくないが仕方ない)」

その大男がとった行動は階段の頂上ギリギリのところまでジャンプし階段の淵を掴むという力技で音を消したまま階段の上まで登った。

大男が実践したのは自分がジャンプした時、速度が0となる瞬間とジャンプする時に必要な力を計算し、無駄な力を消すようにして限りなく自分の重さを0に近づけていた。自分の体重が足の面積で割った分だけ階段に圧力がかかり、音が立つ為そうしざるを得なかった。

「(後は方向を変えて：手すりを使って体勢を戻すだけだ)」

大男が自らの握力を使い、淵から器用に体勢を戻して再び歩き始めた。

▲▼▲▼☆☆☆☆▼▲▼▲

ちょうどその頃、東堂は夢を見ていた。

自分は暴力団に捕まり、もがいているという状況だった。何故暴力団に捕まっているのか一人の人物が思い当たった。雄山である。雄山はかつてキラーマウンテンと呼ばれる陰陽師だった上には本人によれば暴力団やマフィアを潰してきたと言っており、その手の連中からかなり嫌われている。実際この前の事件でもマフィアが雄山を殺す為だけに怪人となって現れたのだ。

そんな非人道的な手段を使う集団に人質を取る手段というのは普通の人々が息を吐いて地球の二酸化炭素を増やすのと同じくらいの行為であり、全くと言っていいほど躊躇いがない。

「玉乃：お前の兄貴分、橋野はすでにムシヨん中に行つた：お前もいい加減諦めてお縄につけい！」

この声は雄山の声ではなかった。この声はもつと地を這うように低い声だ。雄山以外の誰かが自分を助けに来たのだろう。おそらく警察の四課か特殊部隊のどちらかであるが特殊部隊はそんな大声を出す訳がない。特殊部隊は仕事に関しては何も無言

だ。となれば四課の人間だろう。

【チツ…もう来やがったか…】

玉乃という男がどうやら自分を人質にしており、その男が来たことに忌々しく顔が歪んでいた。

「(うわあ…やられ役の人の顔をしているう…)」

東堂はその顔を見てドン引きした。

【来い！】

玉乃が自分を無理やり引つ張り、首を下に向けた状態で固定し東堂を盾にした。

【玉乃、お前に逃げ場はねえ…盃交わした兄弟同士で仲良くムシヨん中で更生しろ。】

身長190cmのスーツ姿の男が銃を構える姿勢が見えたことからすぐにその男が刑事だとわかった。

【俺は橋野の兄貴とは違う…！ まずはてめえからだ！】

玉乃は東堂を盾にしてジワリジワリと前に詰め寄り、銃を構える。 …そして銃声が響いた。

【ぐあっ!?】

だがその引き金を引いたのは刑事の方だった。

【玉乃…俺を舐めすぎだ。俺は生憎だが射程距離の範囲内ならミクロ単位で銃を外すこ

とはない。だからどんなにその娘を盾にしようとも関係ない。単純にお前を狙えばいいだけの話だ：盾にするんだったら人質じゃなく鉄板にするべきだったな」

「（そんな漫画みたいなこと：出来っこない。夢に違いないよ。）」

東堂の視界は真つ暗になった。

「やっぱり夢だった…」

東堂は誰も目覚めぬ中、旅館でただ一人目が覚めてしまった：その原因は言わなくともわかるがああ夢のせいである。そして二度寝をしようと目を閉じたが尿意に襲われた。

「んっ…トイレ…」

東堂は寝ぼけながらも布団から出てトイレへと向かった。

一応吸血鬼なのに何故夜寝ているんだ？という疑問があるが彼女は吸血鬼ではあるものの人の血がかなり強く、人間と大差ない生活を送れる。逆に彼女は人間ではないのか？という声もあるが人の血がかなり強いため妖力こそ大したことはないが吸血鬼の身体能力と吸血をする習慣があり、吸血鬼と定義されるのだ。

「（でもあの人誰だったんだろう…）」

それはさて置き、寝ぼけたまま東堂は目の前にある扉を開けて部屋のトイレに入った。

「玉乃：どこかで聞いたことあるんだけど思い出せないな」

女のトイレは長く、小便をするだけでも男の数倍時間がかかるので東堂はしばらくの間トイレの中にこもることになった。

▲▼▲▼☆☆☆☆▲▼▲

そして大男は慎重に歩くこと数分、雄山の部屋の前を通り過ぎ、目的の部屋へと着いた。

「ターゲットの部屋に辿り着いたか」

そのターゲットの写真を取り出して顔を確認する。

「しかししたかが小娘一人のためだけにこの俺を使うか？ ボスが大袈裟すぎるのか、あるいは障害が余程大きいのか：どちらにせよ油断はしない」

そして部屋の中へと入り、トイレをスルーして東堂の布団へと近づいた。

「：逃げたか？ いやあの扉の電気が点いている。となれば偶然起きた：と考えるのが妥当。ここで待ち伏せていればやりやすい：最悪ターゲットを殺せばいいだけの話だ」

そして水の流れる音が聞こえ、東堂の歩く振動が大男の足にも伝わり、徐々に近づいてくるのがよくわかる。

「今度はへんな夢見ないようにしないと…」

ついに独り言を言いながら東堂が出てきた。その瞬間を見計らい、大男は東堂の口を轡で塞ぎ、手首を縄で縛りつけると銃を東堂の頭に突きつけた

「騒ぐな、動くな、抵抗するな。それらをしたらどうなるかわかるな？」

ドスの効いた地を這うような低い声が東堂を恐怖へと導き、東堂は大人しく首を縦に振った。

「よし、行くぞ」

そしてその大男が東堂を脇に抱え、外へ飛び出そうとしたが体勢を崩した。

「…ぬっ!？」

「おいおい困るぜ。人の式を勝手に持って行かれるなんて真似は…」

雄山はその大男にその場で腕を前に突き出すことで空気の塊を大砲のように放つ大和一族の秘術、大和空掌砲を撃っていた。だがこの大男は全くと言っていいほど傷が付いておらず体勢を崩しただけだ。

「フウファンフェンフェー（ユーザン先生）！」

しかし東堂からしてみれば頼もしい助っ人である。何故なら東堂はその目で雄山の活躍を見てきているからだ。純粹な強さこそ感じさせないが雄山の戦闘方法は隙を見て、頭脳で攻めるといった方法だ。それでどんな相手でも倒してきたのだ。

「…ふんっ！」

しかし大男は、何故雄山が大男の存在に気づいて東堂の部屋に入った理由も聞かずに東堂を抱え、雄山に背を向けた状態で煙玉を使い外へと逃げた。

「あつ!?!」

雄山は大男のあまりの手際の良さに一瞬反応が遅れてしまい、煙幕を晴らすために空掌を放つがすでに大男と東堂はいなかった。

「…クソが!」

雄山はトイレの扉を蹴つ飛ばし八つ当たりする。まさかあんな形で逃げるとは思わなかったのだ。

「(…だが今の後ろ姿何処かで見た覚えがあるな)」

雄山はその場に座り、思考し始める。

「(…ダメだ。ほんの一瞬しか見ていなかったからわからねえ)」

だがその答えは見つからず頭をガリガリと搔いて顔を擗めた。ここ最近出会ったものであれば思い出せるのだが、昔やったことがやったことなので大柄な筋骨隆々の男となればマフィアなどにもいるために思い出せないのだ。その上屈んでいる姿がほとんどだったので身長もわからない。顔も暗闇の上に雄山に背を向けていたので不明。とにかくわからないことばかりで雄山がイラつくのは無理なかった。

結局、雄山は長兄雄大に電話をかけた。

「もしもし、大兄貴か？」

「…ヤマ、こんな夜中に私に電話をかけてきたということは非常事態発生か？」

「ああ…俺の式の候補、東堂美帆が攫われた」

「いきなりか…しかししくじるとはお前らしくもないなヤマ。昔のお前ならどんな状況でも逃がさなかったはずだ。キラーマウンテンの渾名が泣くぞ」

「俺の渾名がどうなるうと関係ない…陰陽師1人か2人回してくれ。このままじゃ東堂を見殺しにしぎるを得なくなる」

「…一つ貸しだ。ヤマ、これで失敗したら私はお前を切り捨てる。兄弟とはいえそのくらしいの覚悟はしておけ」

「わかった。出来る限り早く那須脇旅館にくるように兵隊達に伝えといてくれ」

「那須脇旅館だな？」

「そうだ。なるべく優秀な奴がいい。俺が逃がした奴となれば中途半端な奴らだと死ぬ事になる」

「よしわかった…そう伝えよう」

そして雄大の電話が切れると裕二に電話をかけた。始めた。

「雄山…何かよう？」

「裕二、至急頼みたいことがある。電話番号090—TDOH—24MOの居場所を探

してくれ」

この番号は東堂の携帯の番号だ。携帯の番号がわかればその携帯の場所がわかるようなシステムがあるがそれを扱えるには資格が必要であり雄山は持っていない。しかし裕二はそれを持っており、雄山が頼るのは簡単なことだった。

「…もしかして雄山の式が攫われた？」

「そうだ。このままだと会長派にいいようにされて大兄貴や裕二の立場も危うくなる。そうなれば大和財閥もYOU—GREATTMANも終わりだ。裕二の会社はまた新しく作ればいいが北関東三県に恩恵を与えている大和財閥が倒産：はしなくとも寄付金を払えないまでに打撃を受けたら北関東、いや日本はバブル崩壊よりも悲惨なことになる…」

日本が悲惨になる根拠は大和財閥が日本、特に北関東三県に多額のお金を寄付している為である。その為日本では大和財閥の恩恵を受けている為に公共料金、教育費等のその他諸々ありとあらゆる生活に必要なものは5割以下（大和財閥の恩恵を最も受けている北関東三県に至ってはタダ）で済んでいるのである。それができなくなれば日本は大混乱するだろう。

「たしかにまた新しく作ればいいんだけど会社は潰れないほうが信用、信頼されるし手伝うよ。何よりも弟の頼みだし断る理由もないよ」

「ありがとう…」

【それじゃ新作のゲーム製作を中断して、やるか。じゃあね】
そして裕二の電話が切れた。

第21指導 犯人の要求

雄大、裕二に連絡してからおよそ二時間が経過し、雄山の端末に非通知の電話がかかってきた。

「誰だ？」

【キラーマウンテン、大和雄山だな？】

「名を尋ねる時は名乗るのが流儀だろうが！」

【そう急くな…だが今の声で貴様が大和雄山だとわかった。私は貴様が探しているものを預かっているぞ】

「詐欺師みたいな電話をしても無駄だ。第一俺が探しているものって何なのかわかっているのか？」

【無論、貴様の探しているものはこれだろうか？ テレビ電話にしたまえ】

言われるがままにテレビ電話に変えるとそこには縛られている東堂の姿があった。

「…東堂！」

【これで信用してもらえたかね？】

「てめえ…どこにいる!？」

「落ち着けキラーマウンテン。まあ凡人たる君の単細胞な頭では落ち着けといても落ち着けないか」

電話の相手は雄山を挑発し、煽る。そうすることで冷静さを失わせ交渉などを有利に働かせる。

「喧嘩売ってんのか?」

「でなければ誘拐してもデメリツトの大きいへっぼこ吸血鬼なんか攫わないし、殺した方がマシだ」

東堂がそれに反論しようと暴れるが無駄に終わる。

「東堂、お前がへっぼこ吸血鬼なことは事実だろうが。それよりもてめえの用件は俺を挑発するだけか?」

「いやいや。私の本命はそれじゃない。あくまでついのでしかないのだよ。このへっぼこ吸血鬼を返して欲しくばそこから北の方向に見える山の頂上に来い。もちろん貴様一人だけだ」

へっぼこ吸血鬼と何度も言われ東堂が落ち込んでいるのを無視して二人は話を進めた。

「北の山…到来山か」

「そうだ。ちなみにこの吸血鬼の持っている携帯や私の電話番号を使って居場所を探そ

うとしても無駄だ。電波が届かないように管理しているからな」

「通りで裕二が手間取っているわけだな」

「何度でもいうが一人で来い。さもなければこのへつぽこ吸血鬼は解放しない…わかつたな」

「…わかつた。その要求は呑もう。だがこれだけは覚えておけ…てめえが誰だかわかつた時、俺はお前に執着して殺る…覚悟しておけ。」

「くくっ…面白い。やってみせろ」

電話が切れ、雄山は怒りのあまり地面を殴り、地割れを起こした。

「あのクソ野郎が…東堂に何かあったらタダじゃすまさねえ」

雄山の怒りは只ならぬものであり、かつてないほどだった。雄山の逆鱗に触れる行為は『弱みに付け込む』『守るべき存在が危険に晒される』『油断する』のいずれかであり、今回の東堂誘拐は全て当てはまっていた。

最後の『油断する』に限り雄山自身に対する怒りであるが、そもそも電話の相手が東堂を誘拐しなければ怒ることもなかったので、誘拐犯の所為ではないと言い切れないのだ。

「(だが報告しておくか。過ぎたことをあだのこうだのといつてもどうしようもねえしな。…となれば大兄貴よりも先に裕二に連絡した方が良さそうだな。大兄貴に誘拐

したと連絡したとは言え東堂の行方を捜索を頼んだ訳じゃねえ」

雄山は冷静に頭を働かせると端末から電話をかけ、これまでのことを裕二に報告した。

「…という訳だ。裕二。東堂の電波は届かないようになってる」

「それは妙だね…」

「ん…？ 何がだ？」

「確かにその誘拐犯の言う通り、僕が幾らやつても美帆ちゃんの携帯電話の電波は受信出来ない。でも雄山はテレビ電話で縛られている姿を見たんだろ？」

「それがどうした？」

「僕の会社と契約するところでも電波が必ず届くようになってる。詳しく説明すると宇宙空間や地球、その他大勢の星にはUJっていうある電波Hを感知する物質がある…その電波Hを感知したら別の電波Iを発生し、反応するようになる。だけど面白いことにその電波Hを少し弄ってUJに反応すると電波Iが特定のものになって特定の携帯電話に繋がるようになる。つまり処理も早く終わるから回線も問題ないし、宇宙空間であつてもUJがあるからどこでも繋がる。ここまでわかる？」

「…さっぱりわからねえ、わかりやすく頼む」

「ようするに僕の会社と契約していれば余程特殊な環境でもない限りは携帯電話で場所

を特定することが可能ってことだ。だからテレビ電話で繋がる場所の近くに電話はな
い」

「何かその特殊な箱にでも入っているんじゃないか？」

「確かにその可能性はある。けれどその電話の相手の番号はわからないとなれば感知で
きないし、何よりも美帆ちゃんがそこにいるとは限らない。後数年すれば過去の電波を
逆探知してやることも出来るけど今は無理。犯人から電話がかかってくるまで待つし
かないし、専用の道具も必要だ。何にしても罠である可能性が高い」

「まずその前に一つ尋ねるが裕二が誘拐犯なんてことはねえよな？」

「ないよ。雄山の居場所に目星がついたとしても僕から雄山に電話をかけてからもずつ
と会社にいたんだし、会社からそこまで移動して車を使っても山道だらけで誘拐どころ
じゃない。よしんば誘拐したとしてもメリットがまずない」

「…確かにそうだな」

雄山は確信した。裕二は東堂を誘拐した主犯でも共犯でもない。その理由は誘拐犯
であれば誘拐犯の特徴である大柄な男と自分を比べて無罪であることを主張してしま
うものだが雄山は犯人がどんな特徴なのかは伝えていない。つまり裕二が誘拐犯だと
したらすでにボロを出している。だが裕二はその点に関しては何も言わなかった。裕
二がその事をわかって言っているならば話は別だが何よりも裕二にはその動機がなく、

東堂を誘拐しても何の役にも立たない。

「とにかく美帆ちゃん映像は合成の確率が高い……雄山を誘き出す罠だ。いくら雄山がキラーマウンテンって呼ばれた陰陽師でも危険すぎる！ 止めておけ」

裕二は雄山が優秀な陰陽師であることを理解していた。確かに知能面言えば雄大や裕二に劣るが雄山の強さは知識ではなく知恵だ。つまり未来を切り開くのに必要な発想力と応用力。その力が雄山に備わっており、今までの事件もこれで解決してきた。だが今度ばかりは雄山に足りないもの……つまり知識が必要になってくる。

「んなことはわかってる。だがこのままじゃ何も進まないだろ？」

「……ああ、もう！ 雄山は相変わらず頑固だな。今、雄山は……那須脇旅館にいるのか？」
「そうだ」

「そこまで4時間程で行けると思うから少し待つてろ。そこで僕も合流する」

「……わかった」

そして裕二の電話が切れると雄大に電話をかけたが出なかった。

「大兄貴が電話に出んわ……くだらねえ駄洒落言っているよりも何とかしねえとな」

雄山は端末をしまい、ポケットの中に入れて手を出し、途中でそれを止めた。

「……その前に東堂が本当にそこにいるのか調べればよかつたんじゃないやねえか？」

雄山は誘拐犯に交渉すべき点があつたことに気づくが、後の祭りである。しかし何も

かもがと言われればそうでもない。東堂の携帯電話に電話をすればいいのだが電話に出るかどうかは不明である。しかし雄山は少しでも可能性にかけて東堂の携帯電話に電話をかけた。

「……の携帯電話の番号は電波が届かない状況にあります。しばらく時間を置いてから電話をおかけしてください」

「……どうやら奴らは本物の誘拐犯のようだな。こつちからは干渉出来ないが向こうからは干渉が出来る。これほど望ましいことはねえ。だが……」

あまりにも準備が良すぎる、雄山の頭の中でその考えが過ぎり裏切り者を探す。

「大兄貴か？ いや東堂を誘拐するメリットよりもデメリットの方が遥かに大きすぎる。それにその時大兄貴が俺の居場所を知っていたとは思えない」

少なくとも那須脇旅館に雄山達が居ることを知っているのは雄山達自身や他の宿泊客だけであり、雄大は雄山を売りたいとも売ることが出来ない状況であり、売ったとしても何の得にもならないので雄大も裕二と同じく候補から外れた。

「……これ以上ウダウダ考えても仕方ない。応援が来るまでの間自分なりに調べてみるか」

雄山は裕二や応援が来るまでの間、何が起こったのかを整理し始めた。

第22指導 雄山のやり方



それから数時間後、中性的な顔立ちの人物が雄山のいる那須脇旅館の周りをうろつき回っていた。

彼の名前は九条裕二。雄山の兄であり、九条家に婿入りした男だ。そんな彼はかなりの理系人間であり、少し調査をすれば誰がそこにいてかつ、何をしていたかを知ることができる。その為ここをうろつき回っていた。

「もう出てきたら？ ここなら誰もいないよ？」

いきなり裕二がそう発言すると周りからガサリ、と音が聞こえ数人ほどが裕二の後ろに現れた。

「流石は現会長や現会長代行の弟と言ったところだな」

その男達は顔を隠す為に覆面をしているが同時に武装し、裕二を怨念を込め睨む。

「こうして僕の前に現れたってことは味方じゃなさそうだけど陰陽師協会の方かい？

それとも会長派？」

「どちらでもない。ましてや会長代行派でもない……」

「じゃあ何派？」

「我々は勇姿様一派だ！ 勇姿様の愚兄よ！ 貴様は邪魔者でしかない！ ここで去ね！！」

勇姿の一派の構成員達は裕二に向けて爆弾の代わりを果たす起爆札や破魔札に雷属性を付加した雷破魔札等様々な武器を投げ襲撃した。



「……これもダメか。」

その一方、雄山は裕二同様に陰陽術、魔法、様々な手段を用いて調べたが文系の悲しさ故に手がかりとなる魔力の痕跡が全く見当たらず、相手がどのようなにして自分達の場所を知ったのかわからぬままだった。それさえわかれば相手がどのような相手であるかということがわかる。しかし手がかりは実行犯が筋骨隆々の大男であることと、計画的な犯行であることだけでその他のことはわからなかった。

警察内部にいる陰陽師を呼んだとしても現場検証で時間がかかる上に雄大に助つ人を頼んだのはそういった捜査を目的としているからだ。

そんなことを考えているとかつてないほどの爆発が雄山の耳の鼓膜と地面を振動させた。

「なんだ!？」

その爆発に反応し、雄山は身構える。確かに警戒していたとは言え雄山からしてみれば予想外だった。計画的に誘拐したのであれば罨は必要最低限に済ませる。その理由は必要最低限以上に罨を仕掛けると第三者に目撃されてしまい計画に支障が出てしまうからだ。その為罨は最低限の量かつ最高の質で設置するのがベターである。

しかし今回は違う。余りにも爆発が大きすぎる。これだけ爆発が大きければ警察沙汰にもなる上に、証拠も残りやすくなり、テロ行為でもない限りはしないだろう。ましてや裕二の目を欺けるほどの誘拐犯がそんな馬鹿なことをするはずがない。この爆発と誘拐犯は関係ないという結論に達するには十分だった。

そして数分後ようやく爆発が収まり、揺れが止まる。

「……一体何だったんだ？」

雄山が呟き、周りを警戒しながら見渡す。するとエンジン音が全く聞こえない水素自動車雄山の前にライトを向けた状態で現れた。

「(これは…裕二の車か!?)」

雄山はライトを向けられて車を運転している者が誰だかわからない。その為、運転しているものが知り合いの人物であっても雄山はいつでも攻撃出来るように構えた。

「雄山、待たせたね。」

中性的な声の持ち主が雄山に声をかける。その声の正体は雄山は知っており、警戒を

緩めた。

「裕二……！ 今の爆発は!?!」

そう、その男とは雄山のもう一人の兄である九条裕二だ。

「少しね……問題が起きたんだ。その対処をしてきた」

「問題……?」

「このこと」

そう言つて裕二は達筆な文字が描かれた和紙を取り出し広げる。するとその紙の上に気絶している覆面の男達が現れた。

「こいつらは?」

「僕を殺そうとしてさっきの爆発を起こした犯人だよ」

「裕二をか……そりやまた無謀なことをしたもんだ。師匠ですらも殺せないのにこいつらが殺せるはずがない」

雄山がそういうと裕二は苦笑した。

「それはともかく雄山。こいつらが言うには会長の一派じゃない」

裕二は苦笑から真顔になり、シリアスな雰囲気醸し出した。

「じゃあ大兄貴の一派か?」

「それとも違う……こいつらは勇姿の一派。僕のことを勇姿様の愚兄とかそんな風と呼ん

でいた」

「勇姿様の愚兄…か。大兄貴の言っていた通り、勇姿も再評価され始めたってことか」

「そう…勇姿のことを知っている癖に僕の特異体質のことを知らないんだからよっぽど勇姿のことを評価しているみたいだ」

「なるほど…これから尋問でもするか？」

「そつち方面は雄山の分野だし任せるよ。僕は雄山の端末から犯人が誰なのか割り出してみせる」

「任せた…」

雄山は裕二に端末を渡し、裕二は襲撃した人物を引き取った。



深い森の中…そこに雄山と多数の襲撃者がそこにいた。

「ぐっ…」

襲撃者の一人が目を目を覚まし、雄山は襲撃者に視線を合わせる。

「よう、起きたか？」

「お前は…大和雄山…!!」

「俺のことを知っているとは驚きだ。自己紹介が省けた。」

「この縄を解け!!」

「おい…誰に向かって命令しているんだ？」

「うるさい！ 解げっ!!」

雄山は襲撃者が言い終わる前に襲撃者を殴り飛ばした。

「なあ？ 立場つてもんがわかっていないようだな？」

「黙れ！ お前はぐっ?!」

雄山は再び殴り、襲撃者の鳩尾に拳が入る。

「いいか？ 一回しか言わねえ。これから俺が質問することだけに答えろ。さもなければ…先端の方から切り飛ばして畑の肥料にするわかったな？」

言っていることが暴力団と変わらない。流石は元マフィア狩りの男である。

「ちなみにお前が死のうが俺がパクられることはねえし、てめえだけが損をするだけだ」
「…!!」

襲撃者は舌を噛み自害を試みた。ここで死んでしまえば自らの持つ機密情報を漏らすことはなくなる。死人に口なしとはよく言ったものだ。

「何をやっているんだ？ てめえは？」

しかし雄山は襲撃者の顎を掴み阻止した。雄山はその手を使う輩を何度も見てきた。その為それを阻止することが出来たのだ。

「…っ!!」

自害を阻止され、顔を歪ませる襲撃者は屈辱で一杯だった。

「安心しな。てめえを拷問する時は全員尋問して何も吐かなかつた時だ。誰か一人でも吐いてくれればそれでいい…」

「…」

「それじゃあ質問するぜ。お前達は勇姿の一派って言うていたが勇姿とは面識があるのか？」

「…我々は勇姿様の命を直接受け、貴様ら兄弟を殺すように命じられた」

「本当か？」

「事実だ。誰か三人のうち一人でも討ち取れば幹部へと昇格することが約束された」

「それで一番貧弱そうな裕二を襲ったわけか…」

「そうだ。雄大は陰陽師協会会長代行だ。周りに護衛がいてもおかしくない上に実力もある。お前は裏の世界で数々の武勇伝を残した男。だが裕二の強さは知れ渡っていないだけでなく魔力も少ない。つまりお前達兄弟の中で弱い…そう思っていた」

「当然だな…俺たちの影に隠れていてかつ魔力も少ない。そんな相手に油断するなどという方が無理だ」

「油断などはない。俺達はやる時はやる。相手が蟻だろうが油虫だろうが勇姿様の命令であれば殺る。我々が弱く裕二という男が強すぎただけのことだ」

「なるほどな。てめえらの評価も改めないとな」

雄山は襲撃者の言葉を聞いて感心していた。雄山の嫌いなことは『油断する』ということだ。裕二の見た目が中性的であり、魔力も少ない。その為雄山は裕二に対して『油断』しても仕方ないと思っていた。しかしこの襲撃者は裕二を殺す際に初めから全力を尽くした上で自分の弱さを受け入れた。あの爆発も今考えてみれば裕二を殺す為だけにやったものだろう。

「次の質問だ。お前達は何故勇姿の部下となった？」

「そんなもの人それぞれだ。理由は特に定まっていない」

「人それぞれだと？」

「そうだ。勇姿様の魅力に惹かれた者もいれば権力や金に釣られた者もいる。現在社会と変わらねえよ」

「(つまり動機は必ずしも一致する訳じゃないか…)」

雄山が考えていると襲撃者は忌々しげに雄山を睨む。

「最後だ…勇姿が俺達兄弟以外に襲うように指示したか？」

「されていない。お前達兄弟の首以外は好きにするように命じられたんだ」

「そうか。なら…お前は用済みだ」

雄山はそう言つて襲撃者に陰陽術をかけた。

「は、話が違ふ……」

襲撃者はそこに倒れ、息を立てて眠った。

「安心しろ。約束通り殺しはしねえ」

雄山は他の襲撃者達にも同じように尋問をした。

第23指導 悔しさと思い

雄山が尋問しているその頃、裕二は雄山の端末から誘拐犯の発信元を割り当てようとしていた。

「全くとんでもない設定だね……」

裕二がそうボヤク。というのも端末からは僅かながらの情報しか入っておらず誰が電話したのかもわからない。音声記録から周りの音の周波数を合わせ、その周波数が発生した場所を探したがこれも失敗。

裕二のやることなすこと全て封じられてしまった。

「ふっ……」まで僕の行動を封じられたのは初めてだよ」

ため息を吐きながら、裕二は別の手段に移った。

別の手段、それは雄山の端末に逆探知の機能を搭載することだ。勝手に改造をするあたりマッドサイエンスである。

やはりこの裕二も雄大や雄山と同じ血を引いているのだろう。それでもマシと言え
ばマシだろう。

何せ兄の雄大は部下に優しくしておきながら敢えて危険な場所に行かせるという悪

魔じみたことをしており、雄山に至つてはもはやマフィア狩りだ。それも勸善懲悪のヒーローではなく小悪党を喰い物にする大悪党のような存在だ。ダークヒーローではない。

特殊な環境は特殊な性格を生むと言うがまさしく雄大や雄山はその影響を受けてきたと言える。裕二は影響を受けているにしてはマシといえる方だ。



しばらくし、雄山と裕二はそれぞれの作業を終えて那須脇旅館に戻った。

「裕二、逆探知は出来たか？」

「ダメだった。うまく証拠隠滅させられている。その代わり逆探知出来るようにしておいた」

「流石裕二…仕事が早いな。」

「雄山の方はどうだった？」

「全員、勇姿と面識があるだけじゃなく俺達を殺すように命令されていたみたいだ。俺達のうち一人でも殺せれば幹部昇進が約束されていたようだ」

「勇姿が僕達を？」

裕二は驚いていた。裕二は自分をあまり評価していない。というのも裕二は表に顔を出しまくっている人間で表の影響力こそ大きいが裏世界の方では大したことはない。

その為裕二の自己評価は低いのだ。

「ああ。俺も聞いた時は驚いた。大和一族の中でも勇姿は評価は高まりつつある。裕二は九条家に婿入りしているし、俺は陰陽師から引退した身だ。勇姿は放っておいても勝手に一族の奴らが担いで宗家当主の椅子に座ることになる」

「大が雄山を陰陽師として復活させたりしなければの話だけだね」

「俺が気になったのは俺を殺す動機じゃない。むしろ裕二を殺す動機がわからない。裕二は俺や大兄貴よりも勇姿に慕われていた上に、九条の人間だ。元に戻ったところで大兄貴の後継者になるとは思えない……少なくとも俺はそう思う」

裕二は首を横に振った。

「それはありえない。勇姿から見て僕は足でまといでしかなかったと思う」
「何故だ？」

「ずっと昔、勇姿と一緒に崖から落とされて僕は怪我を負ったんだ。元の場所に戻るには崖を登るしかない。でも僕は怪我をしていて登れない。勇姿はどうしたと思う？」

「勇姿が裕二を背負って崖を登ったのか？　ありえそうだが……まさかな？」

雄山が苦笑気味にそう言うと裕二の口から驚愕の事実を伝えられた。

「半分正解で半分不正解。僕を脇に抱えて片手だけで登ったんだ」

「本当か?!」

「本当。勇姿に何故背負わず脇に抱えて片手だけで登ったのか聞いたんだ。そしたら『確かに背負つて崖を登ることは出来る。だが背負われる側にも体力が必要だからな。脇に抱えて登れば負担もなくなる。それだけのことだ』つて返してきたんだ」

「それなら慕われている証拠なんじゃないのか？」

「昔はね。でも今は違うよ。あの時は子供だったから慕つてくれたけど成長するにつれて合理的な考え方が出来るようになってるよ。だから邪魔であれば消すなんて考えも普通に出来るし、一度だけ僕のところまでバイトで働かせたのもそれが理由だ」

「…」

雄山はそれに心当たりがあつた。日が増していくうちに勇姿は大人びいていき、合理的な考えをするようになった。それは普通かもしれない。だが裏の世界の人間は合理主義者が多く存在する。勇姿も本能で合理主義者となつたのだ。

「でもそれ以上に気になるのが何で僕達の前に姿を現さないのかが気になる。6年前から会つてもいないのに顔を見せない、やり方が雑、それなのに変なところで几帳面。ここまで来ると誰が黒幕がいるんじゃないかって思うよ」

「確かにな」

【pipipi…】

雄山の端末から電話が鳴り、雄山はそれに出る。

「もしもし?」

【私だ。雄大だ】

「大兄貴か。一体何のようだ?」

雄山は裕二の方へ向くと裕二は頷いて逆探知を始めた。

【ヤマのところには派遣した陰陽師達と一時間おきに連絡を取り合っていたが誰一人も連絡が取れなくなった】

「何だ?」

逆探知は成功、だけど本物の大だった。裕二が読唇術でそう伝えると雄山は了解サインを送り、電話を続ける。

【そちらに異変はないのか?あれば報告して欲しい】

「ああ…わかった。」

そして雄山が雄大にこれまで起きたことを全て話した。

「…というわけだ。」

【ヒロが勇姿一派を名乗るものに襲われたのか。確かに妙だな。イサムが大和財閥のトップの椅子が欲しければ私のところに向かわせるはずだ。となれば私ではなくヒロの命を狙っているとしたか思えんな】

「大兄貴もその結論か」

【私は常に命を狙われる立場だ。故に相手の立場に立たねば命を守るなど不可能だ】

「確かに…」

雄山はそれを聞いて納得してしまった。雄大は様々な組織のトップである。大和一族宗家当主、大和財閥取締役社長、そして陰陽師協会会長代行。これらの組織のトップに立つだけでも命を狙われる立場である。

しかし雄大は3つの組織全てのトップであり、今すぐに殺されても文句を言えないくらいの立場なのだ。故に雄山が納得するのは何ら不自然なことではない。

【何にせよ今から派遣してもお前の所に間に合いそうにない。ヤマ、すまんが誘拐の件に関しては協力は出来ない。だが裏以外で手回ししておく…ヒロにもそう伝えておいてくれ】

「わかった。」

【くれぐれも気をつけろ】

そして電話が切れ、雄山達の空気が重くなった。

「どうする?」

「当然行くしかないだろう。東堂を救うには到来山に行くしか手段はない。」

「雄山、これだけは言っておくよ。危ないと思つたらすぐに逃げろ。例え美帆ちゃんを

救えたとしてもそこで命を落としたら美帆ちゃんをずっと苦しめることになる。」
「安心しろ。俺を誰だと思ってる？俺はキラーマウンテンと呼ばれた陰陽師。並大抵のことで命は落とさねえよ。」

雄山は自分の車を使い、到来山へと向かった。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

その頃、到来山では東堂を誘拐した大男が車で電話をしていた。

「はい、はい…わかりました。それでは失礼します。ボス」

大男が電話を切ると後ろに乗っていた東堂が目を覚まし、起き上がろうとした。しかし拘束具が邪魔をしてそれは出来なかった。

「起きたか…」

その物音を聞きつけ、大男が東堂の顔をみる。

「東堂美帆って言ったか？」

東堂はそれに頷く。口は嚙んで拘束され、何も喋れないからだ。

「美帆、朗報だ。お前達が潰した妖魔連合会の元幹部達は死んだ。残っているのは下っ端どもだけだ」

東堂が知っている妖魔連合会の幹部と言えば竜人の鴨川と龍造寺の話に出てきた間中と端本、春澤の三人だった。

「おかげでボスの機嫌が良いし、この下っ端どもの掃除も楽になる」

東堂は大男の言葉に首を傾げた。しかしそれも僅かな間だった。外を見ると明らかに人間とは思えない人外と目が合い、東堂がその場で暴れ始めた。魔力が暴走し始めたのだ。

「喝っ！」

しかしその大男は人差し指を東堂の額につけると東堂の魔力が収まり始め次第に東堂の暴走も止まった。

「これから先はお前が見るものじゃない。これでもつけてろ」

大男がアイマスクを取り出すのを見て東堂はそれをつけられるのを首を振って拒否した。しかし大男は東堂の顔を掴み、固定するとアイマスクをつけて自分は車の外へと飛び出し下っ端の妖怪達を次々と蹴散らしていく。

「悔しいな…私に力さえあればこんなことにならないのに…」

その様子を東堂は耳でしか確認出来ないことを悔しく思っていた。東堂は何時までも守られる立場でいたくないから雄山に着いて行ったのだ。それなのに自分はいつも守られてばかりで東堂は無力だと感じてしまうのは無理なかった。

第24指導 再会



到来山。そこは活火山である為に周りには温泉宿屋など様々な施設があった。しかし噴火の可能性が近年上昇してきた影響により、那須脇旅館などの宿泊施設は到来山から撤退し別の場所へ移動した。現在では空き家があるだけだ。

「聖君、本当にいるのかな？」

「長門おく、いるに決まっているだろ。ここで帰るなんて事は無しだぜ」

そんな到来山の宿泊施設だった空き家を歩く二人組がいた。その二人組はかつて雄山の勤め先だった西智学園都市の生徒であり、オカルト部の部員である矢田と長門である。この二人はこの付近の宿泊施設に幽霊が出ると聞いてやってきたのだ。

「そうは言っても信憑性のない噂だよ？下手に近づいたら私達…呪われちゃうんじゃない？」

「長門。だからと言ってこのまま帰ったら皆になんて説明すればいいんだよ？手土産の一つや二つ用意しておかないと公欠が欠席になるかもしれないんだぞ」

「内申点に響いて困るのは聖君だけだよ…私はなんともないし」

「流石、成績不良生は言うことが違うね〜…」

「成績不良生じゃないもん！ 聖君が頭良すぎるだけだよ！ S特なんて学園都市に数人しかいないんだよ!？」

長門は思わず叫んで反論した。この矢田は一見するとチャラ男であるがS特と呼ばれる特待生、所謂超エリートと呼ばれるものだ。しかし矢田にその自覚はなく、平気で授業を何回もサボったりするので嚴重注意されているのだ。今度欠席するようなことがあれば間違いなく矢田はS特ではなくなるだろう。

「そういえばあの椅子に座っていた連中がそうなのか…」

矢田は数年前の記憶、S特の特待生の説明会を思い出す。特待生と聞くからには数多くの人々が集まる…そう予想していた。しかしそこには矢田を含めた数人しかおらず思わず困惑してしまった。その時、矢田は初めて自分がS特にさせられていたのだとわかってしまった。

「んなことはどうでもいい。それよりも…」

矢田が反論しようとする窓から黒い車が走っているのが見えた。

「…あれはユーザン先生か?」

その車の運転席にはかつてオカルト部の顧問だった雄山の姿があり、矢田だけではなく長門も首を傾げた。

「なんでユーザン先生がいるのかな？」

「普段だらけてもオカルト好きだったってことじゃないのか？」

「そんなわけないと思うよ……」

「……ユーザン先生の写真でも撮って帰るか。その方がオカルトじゃね？」

「聖君、絶対学校サボりたかっただけでしょ？」

「長門着いてこい！ 先回りするぞ！」

矢田は長門の言葉を無視し、腕を引いて先回りした。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「(さて、もうそろそろだな……)」

雄山は目的地の近場に車を止め、外へ出て空気を吸う。西智学園都市はまさしく都会そのものであり、自然は全くないという訳でないがほとんどなかった。その為自然の空気というのは雄山からしてみれば澄んだ空気であり、心を穏やかにさせる作用がある。

「ユーザン先生！」

雄山が落ち着き、深呼吸をしていると聞いたことのある声が聞こえ、そちらを振り向く。

「矢田に長門か……何故ここにいる？」

「やだな先生。オカルト部の活動つすよ。わざわざ公欠までして来たんですから何か一

「写真でも撮らないと帰れないんです」

「残念だがここにオカルトはないぞ」

「先生の存在自体がオカルトです。だから写真撮らせて下さい」

「撮ったらすぐに帰るんだぞ。ここは危険だ……」

「え……？」

「そもそも部活の為とは言えオカルトを探すから公欠する方がおかしいんだ。さつさと帰ってテストに備えろ」

「教師じゃなくなつたユーザン先生に言われても説得力ありません……」

「とにかくここはオカルトは存在しないし、暴力団同士の取引があるんだ。俺はそれを止めなきゃいけない。下手に首を突っ込んで殺されるかもしれないから今日は帰れ」

「大丈夫ですよ！ そんな時は俺がぶつ倒してやりますから！」

「なあ、矢田……俺がキレる前に帰れ」

雄山はドスの効いた声を出し、矢田を脅す。

「わ、わかりましたよ。ほら長門帰るぞ！」

そう言つて矢田は長門の腕を掴み長門と共にその場を去つた。

「……までしないと言うことを聞かせられないあたり、俺は教師に向いてない……転職して正解だったか」

苦笑気味に笑い、雄山は再び車に乗って移動をし始めた。



そして雄山は到来山の頂上に着くと車を止め、車から出ようとしたがそれは端末の電話機能により遮られた。

「もしもし」

「ふっふっふっ…どうやら指示に従ってくれたようだな」

「んなことはどうでもいい。それよりも東堂はどこだ？」

「そう急くな…キラーマウンテン。あのへっぽこ吸血鬼なら無事だ」

「俺は東堂はどこだと聞いているんだ。無事かどうかよりもそっちの質問に答えろ」

「…あそこのワゴン車の中にいる。だが貴様の首を貰おう。勇姿様の目の前でな」

「お前…!! 勇姿一派か!？」

「そういうことだ。私は大和勇姿様を陰陽師協会の会長へと担ぎ上げ、この狂った世界を元通りにする…だがその為には看板が必要だ」

「看板…?」

「そうだ。陰陽師協会の会長になるにはそれなりの手柄がなきゃいけない…その手柄は大和雄大、裕二、雄山の三人の首だ。その首を取ったというだけで我々勇姿様一派は看板を得たことになる」

「俺達の首が手柄……？」

「最強の陰陽師の一族、大和一族の貴様らの首さえあればすぐにでも勇姿様一派には最強の一派だと証明できる。看板というのは貴様らを倒したという肩書きのようなものだ。だが我々の中でそれを持ってこれるのはただ一人……」

「その一人が勇姿という訳か。だが勇姿は大和一族の一員だぞ？俺達の首を取ったところで陰陽師協会が納得するとは思えない」

「貴様ら大和一族がクーデターを起こしたことにすれば何とでもなる。会長代行にはそれをするだけの動機があるからな」

「お前は大和一族を舐めすぎだ。大和一族は特に情報を操ってきたからここまで勢力が大きくなったんだ。真実を知ればいずれ勇姿一派は潰れる」

「ふん……だがお前がここで死ぬことには違いない。かつてキラーマウンテンと呼ばれた男がへっぴょこ吸血鬼を助ける為だけに死ぬのだから哀れなものだ。もつとも実の弟である勇姿様が介錯してくれるのだからありがたく思え」

「……そうか。だがためえらはミスをした」

「何だと？」

「俺が死んだら東堂を解放する保証はどこにもないと言うことと、ワゴン車の中には勇姿と東堂しか乗っていないことだ。どんなに暴れても何一つ問題はない！」

雄山は電話を切り、ワゴン車へ駆けていく。そして仁王立ちしている大男が目の前に現れ、止まった。その男こそが雄山達が今まで探していた人物、大和勇姿だ。

「久方ぶりだな…雄山」

勇姿が口を開き、雄山へと歩み寄る。一種の牽制だった。勇姿は兄である雄山を警戒していたのだ。

「色々聞きたいことがあるが…ひとつ聞かせて貰う。何故お前は陰陽師協会の会長の座を狙う？」

「無論、俺はこのふざけた世界を変える為だ」

「世界を変える…？」

「俺は雄山達とは違い陰陽師としての教育は受けていない。だからこそ陰陽師…否、裏の世界の存在を知り、戦った。だがそれと同時に人一人救えず、魔力も霊力もない自分が無力だと思わざるを得なかった…」

「それとこれとどういう関係がある？」

「俺は裏の世界…つまり陰陽師や魔法使い、超能力者等の存在を表に出し、それらに関する研究者を増やす…そしてその研究によって魔力や霊力が少ない者でもそれらの能力が使えるようにする。それが俺の望みだ」

勇姿の計画は余りにも壮大だった。勇姿のやろうとしていることは言ってみればパ

ワーバランスの崩壊。裏の世界の住民は誰もそんなことは考えられなかったが故に雄山は硬直してしまふ。

「だがそれをするには権力が必要だ。兄貴達がいなくなれば自然と俺は大和一族の宗家当主となり、情報を操れる。同時に陰陽師協会の会長となれば大和だけでなく九条、堂島等の名家も皆俺の前では無力。余計な圧力がないから超常現象の研究も進むと言うわけだ」

「勇姿、そんなことをする前に人類は滅びるぞ……！ 世界大戦に使われた兵器は元々は人類の発達の為に使われた道具でしかなかった。だが国はそれを利用して兵器を作り出したんだ。超常現象の研究もいずれそういった活動に使われるようになる！」

雄山は勇姿に力説するが勇姿は組んでいた腕を放し、構えた。

「かもしれない。だがそれでも俺はやらねばならない……例え実の兄と言えどもこれだけは譲れない」

「ならやるしかねえな。お互いによ」

雄山は勇姿が構えたことにより、破魔札を持ち、構えた。

「行くぞ……雄山!!」

「ハッ……」

そして兄と弟が激突し、互いに譲れない思いをぶつけ合った。

第25指導 イレギユラー

到来山頂上にて二人の男達が戦っていた。その二人は大和雄山と大和勇姿。二人の名字が同じことであることから親戚筋であることが予想される。それは正しく、二人の関係は兄弟だ。故に兄弟喧嘩と呼ぶべきだろう。だが規模は兄弟喧嘩などというレベルではない。

「らあっ!!」

勇姿の拳が地面に突き刺されれば地震や地割れが起き、到来山の岩雪崩を引き起こす。

「はっ!」

雄山の炎の属性を付加した破魔札が勇姿に当たり炎上し、それに巻き込まれる形で山火事が引き起きる。

「その程度の火で俺を殺せると思うか!雄山!」

だが山火事になろうともお構いなしに服が燃え半裸状態となった勇姿が雄山の前に現れた。

「何でお前は無事なんだよ…!」

そのことに思わず突っ込んでしまう雄山。普通、あれだけの炎に燃やされて無事でない

られるのは服が防災服でない限りは不可能だ。しかし勇姿の服が燃え上がったことから防災機能が全くないことがわかる。故に何故無事でいられるのか謎だった。

「俺の筋肉はダイヤモンドよりも密度が高い……ライターの火でダイヤモンドを燃やすことができると思ったのか？」

「そうかよ……ならこいつはどうだっ！」

雄山は先ほどとは違う破魔札を取り出し、それを雄山に投げた。

「この程度の破魔札で俺を止められると思うな」

そう言いつつも勇姿は雄山の破魔札を躲し、雄山に接近する。

「これで終わりだ！」

そして勇姿は拳を作り、雄山に向けて殴りにいく。

「詰めが甘くなったな、勇姿」

「どちらがだ！」

雄山は破魔札を拳に向け、投げる。しかし勇姿の拳は止まらない。だが勇姿は異変に気がついた。

「ぬっ!？」

勇姿の右拳が氷で覆われ、このままの状態では雄山を殴れば自分の拳が壊れるだろう。勇姿はそう判断すると左に逸らして回転すると裏拳を出した。

「ぐっ!?!」

流石に予想外だったのか雄山は勇姿の裏拳を防ぐことが出来ず、そのダメージを喰らう。だが雄山とてキラーマウンテンと呼ばれた男。何もしい訳ではなく破魔札を投げた。

「鬱陶しいー!」

勇姿の大柄な身体では避けられず、それを左手で握りつぶす。

「何…!?!」

雄山はそれを見て驚愕していた。何故ならあの破魔札には雷の属性を付加させた破魔札であり、それに触れれば感電することは違いなく、インド象ですら動けなくなる。だが勇姿は動けなくなるどころか感電する様子もない。

「おらあつー!」

雄山が唾然としている間に勇姿の拳が目の前に来ていた。それを見た雄山は障壁を張って対処した。

「ぐっ!?!」

だがその障壁は破壊され、雄山は腹に拳が当たり吹き飛んだ。

▲▼▲▼☆☆☆☆▲▼▲▼▲

雄山と勇姿が戦っているちょうどその頃…二人のギャラリーが戦いを見学していた。

「凄え…ユーザン先生あんな魔法みたいなの使えたんだ」

「…うん。あんなの空想上だと思っただよ」

その二人とは矢田と長門だ。二人は一度雄山の言う通り帰ろうとした。しかしオカルトを探すまで諦めずに二人はここまで来ていた。だが実際にあつたのはオカルトではなく魔法―正確には陰陽術―だった。魔法という存在に二人はただただ羨望の目を向けるのであつた。

「…あれ？聖君、あの車の中で芋虫みたいなのがいるよ？」

「どこだ？」

矢田が雄山の車の方へ向くがそれらしきものは見当たらない。

「ユーザン先生の車じゃなくてあのワゴン車の方に」

「本当だ。しかもあの制服、学園都市の生徒のじゃないか？」

「聖君、暴力団同士の取引って言ってたけどもしかしたらユーザン先生はあの人を救いに来たんじゃないかな？」

「ユーザン先生の見た目からして誘拐する方だとは思いますが相手も相手だしな」

そう言つて矢田は勇姿の顔を見る。雄山も大概だが勇姿も同じく人を怖がらせるような顔つきであり、どっちが極悪人なのかわからない。しかしあのワゴン車に被害者がいる以上は恐らくあの太柄な男の方が極悪人なのだろう。

「何にしても長門、あの子を救うぞ」

矢田の頭の中で被害者を救おうと決意すると長門もそれに頷いた。



「一瞬の判断であれだけのことをやるとは流石キラーマウンテンと呼ばれるだけあるな。雄山」

「その障壁を無理やりぶち壊したお前が言うか？」

「純粹に褒めている。大体ほかの連中は一瞬で終わってしまうからな」

勇姿は余裕そうに雄山を見る。勇姿は未だに無傷であるのに対して雄山は満身創痕の状態だ。雄山が満身創痕となったことは何度もある。しかしそれはいずれも雄山の作戦によるものであり、今回は違う。今回は勇姿を初めから殺す気で挑んだがそれでもこの有様だ。

「(並大抵のことでは死なないと言ったが：勇姿相手じゃ仕方ないのか?)」

雄山はそう自問し、口から血を吐き出した。雄山が吐き出す際に鉄の味がして眉を顰め、自答する。

「(俺の無責任な行動?：違うな、運が悪かったとしかいいようがねえ。それ以外に考えられる要素はない。)」

雄山は再び破魔札を持ち、勇姿に向けてそれを投げた。

「…ほかの奴らが一瞬で終わったのは諦めたからだ。だが俺は諦めない。東堂を救うことも生き延びることもな」

「だからこうして立っていられるか…面白い」

「人の思いを面白がるんじゃないやねえ！」

雄山は勇姿に向けて、大和一族の奥義、大和空掌砲を放った。それを喰らった勇姿は無理やりその場から後ろへと動かされた。

「はあつ…はあつ…グウツ!？」

雄山は空掌を放ったことにより、身体の負担が掛かり膝をついた。普段であれば身体に負担は掛からないが雄山は満身創痍の身…言ってみれば足が骨折しているのにサツカーをするのと同じだ。

「これで万策尽きたな。一応言いたいことは聞いておこう」

「例え、俺が死んだとしても裕二や雄大が待って」

【V E E !! V E E !!】

待っている。そう雄山が言おうとした瞬間、ワゴン車から警告音が鳴らされ、二人はそちらを見た。

「やべ！気づかれた!! 急げ！」

「うん！」

そこには雄山が到来山から帰らせた筈の矢田と長門がいた。

「(あれは…!?)」

雄山はその音を出す原因となった二人を見る。何故二人がここにいるのか?そんなことはどうでもよかった。問題は二人が芋虫状態になっている東堂を救い出している最中だったということだ。

「勝負の邪魔をするな!」

勇姿は石ころを二人に向けて蹴飛ばし、東堂を救い出すことを妨害する。石ころは大変危険な物である。何せ戦国時代に投石といった石ころを投げ、敵を攻撃する手段があったくらいだ。しかも戦国時代の人間は現代人よりも力を発揮できない状態だったのだ。それを勇姿がパワー全開で蹴飛ばしたらどの程度の威力があるだろうか?おそらく鉄板の一枚や二枚は当然、10枚程度も貫いてしまう。それだけ危険な物である。

「あぐっ!?!」

石ころに命中したのは矢田の方だった。矢田の身体を貫いた石ころは血塗れになり、木々にぶつかり止まる。しかし矢田の背中や腹から出てくる血は止まらない。

「聖君!」

長門がそれを見て矢田に駆けつけ、手当をしようと試みるが包帯などのものは持ってきていない。ただオロオロとしているだけだった。

「二人目」

「ひっ!?!」

勇姿が無慈悲に石ころを蹴飛ばす体勢に入る。それを見た長門は恐怖によって固まってしまふ。

「俺の元生徒達にこれ以上手を出させねえよ!」

雄山は勇姿の軸足を払い、転ばせて阻止しようとした。だがそれは出来なかった。

「もう遅い!」

勇姿は転ばせたが勇姿の蹴飛ばした石ころが長門に向かい、飛んでいく。

「いやあああああつ!!」

長門はその恐怖のあまり悲鳴をあげ、目を閉じる。誰だって石ころを投げつけられれば目を閉じる。しかも目の前で矢田が死にかけるほどの重傷を負ったのだから尚更恐怖に怯えてしまうのだった。

「…?」

だが痛みを我慢する為に目を閉じたが痛みはいつまで経っても来ない。妙な違和感を感じた長門はそろりと目を開けると雄山達が目を見開いていた。

「そんな馬鹿な…」

勇姿がかつてないほどに驚愕しており、動きが固まる。雄山はそれを見てポケットに

手をつ突つ込んだ。

「長門、矢田と一緒に俺の車に乗れ！」

その隙に雄山は長門に車の鍵を渡した。雄山の鬼気迫る表情に混乱している長門は正気に戻り、怪我をした矢田を車に乗せた。

「雄山、俺を相手に逃げ切れるとでも思ったのか？」

「思う！」

雄山は札を出し、地面にそれを投げる。すると煙が上がり、雄山の周りは見えなくなつてしまった。

「舐めるな！」

勇姿は雄山がいた方向へ殴ると雄山を殴った時の感触が別のものへと変わっていた。

「煙と式神の併用か。考えたな…雄山」

雄山は式神を使うことによつて勇姿の足止めをし、式神を無視して強行突破をしようにも式神が視界に映らない状態ではどうしようもない。

「(っ)は引くか…」

勇姿は雄山の姿をした式神に囲まれ、これ以上深追いしても無駄なことを悟り式神を数体倒してワゴン車に乗り、その場から撤退した。



「聖君、しつかりして…」

長門は弱々しく、矢田を看病していた。だが矢田は痛みに苦しみ、うめき声しか出せない。それもそのはず、矢田の今の状態は銃で撃たれた以上に深刻な状態だ。弾こそ石ころであったが銃弾よりもはるかに巨大であることに違いはない。矢田の内臓がちらほらと長門の視界に映ることもあつて長門が精神的に弱るのは無理はなかった。

「この辺の病院は全滅か…」

その一方、雄山は矢田の手当をしてくれる病院を探していたがどれも休日ばかりで緊急搬送もままならない状態だった。

「仕方ない、実家に頼るか」

雄山は苦虫を噛み潰した表情でそう呟いた。

第26指導 勇姿という男

「こんな形でまさかイサムと敵対するとは思ひもしなかつたが…それはそれで面白い」
事情を雄大に話すと雄大は笑い、そう返した。

「大兄貴…何がそんなに面白いんだ？」

「ヤマ、お前は知らないだろうが私はイサムを敵視していた」

「大兄貴が勇姿を…？」

「6年前、イサムが行方不明になって後継者候補から外れた時私はこれ以上ない幸運だと感じていた。何せその当時の私は常に自分が一番であり続けることに喜びを感じていた」

「そのセリフすい臆癌で寝てこんでいる会長に言つてやれよ…大兄貴をライバル視している会長が可哀想だぜ？」

「だがいぎイサムがいなくなつてみれば何か物足りないと感じるようになった…イサムがいなくなつてから私は何のために一番であり続けるのかわからなくなつた」

雄山の先ほどの言葉をスルーし、雄大は話を続けた。

「会長が可哀想過ぎる…」

雄山は思わずそう呟いてしまった。会長は雄大に対してかなりライバル視しており、血統、陰陽術、西洋魔法、学力、戦闘、ありとあらゆる分野において負け越していた。それでも挫けず、会長は雄大に挑み続けた。だが雄大の言う通り雄大は一番になり続け、会長はいつも二番手だった。故に会長がそんな心境の雄大に勝てなかつたのはあまりにも残酷な話であり、雄山といえども同情しざるを得なかつた。

「そして私はイサムに依存していることによく気付いた。その依存を無くすには私がこの手で決着をつけなければならぬ。その勇姿がいなくなつてはどうしようもないが……」

「勇姿と戦う機会が出来て面白いと思つたわけか」

「その通りだ。……しかし大和宗家に避難するとは本気なのか？ ヤマ」

「本気も本気。あそこは陰陽師協会よりも施設は整つている上にここから近い。いくら勇姿を宗家当主に迎え入れようとはいつても顔を出した訳じゃない。それに今行かないと後手になるからな」

「わかつた……師匠に話を通しておく。あの人が味方になればいくら騒ごうとしても騒がない状況になるからな」

「ありがとう……」

雄山は電話を切り、運転を再開し始めた。

いや、しようとしたところでブレーキを踏み、車を止めた。

「もう追手が来たか…」

「…」

雄山が止めた理由、それは目の前に現れた刺客達が妨害したであろう障害物が理由だ。その刺客達は勇姿に比べればなんでもない普通の男達だが、雄山からしてみれば面倒な相手だ。やることを為すことがエゲツなく、雄山寄りの人間であることがわかる。

「かかってこいよ…なんて言わねえぜっ！」

雄山は刺客のうち一人を不意打ち気味に空掌で仕留めると刺客達も動き、戦闘が始まった。

「だからてめえらは甘いんだよ！」

刺客達が何も言わないのに関わらず雄山は声を上げ、札を出す。すると雄山そつくりの式神が現れ刺客達に攻撃する。

「…っ！」

ただ刺客達も（元からだ）黙っているほど甘くはない。刺客達は式神に攻撃し抵抗する。そしてその刺客達が式神達を倒すと急に痺れ始めた

「無闇に攻撃すればてめえらは痺れる仕掛けになってんだよっ！」

雄山はそう言って刺客達全員を仕留め、気絶させた。



雄山が刺客達を気絶させたその頃：勇姿は山火事の対処をしていた。

「俺を殺す為とはいえここまでやるか？」

勇姿はそう思いながら木に着いた火を拳で揉み消す。通常であればその拳に火が着き、大火傷を負うことは間違いない。しかし大火傷を負うどころか拳にも火は着くことなく火傷の痕はどこにも見当たらなかった。本人曰く密度を高めればダイヤモンドよりも硬く、熱にも強くなるらしいが真実は定かではない。

「14—0801」

そんな最中、透き通った声の持ち主の少女が番号を言うと、勇姿はすぐさま敬礼する。

「お疲れ様です。ボス」

ボスと呼ばれた少女は満足気に頷き、腕を組んだ。

「その様子では雄山にやられたようだな」

くつくつと笑う少女はまるで楽しんでるかのようだったが勇姿にとって是不気味に思え、それが恐ろしかった。

「面目ありませんボス。まさかあのようないレギュラーが出てくるとは…」

「何もお前を叱っている訳じゃない。むしろキラーマウンテンの動きを制限しただけ上出来だ。おかげで病院等の施設を手回し出来たのだからな」

「ありがとうございますボス、そして流石です」

「さて、施設へ帰るぞ。後は私がやるから車に乗れ」

「はっ！ では失礼いたします！」

勇姿が車に乗ると少女は手を上に突き出し、詠唱し始めた。

「天竜よ、我が力を使い恵みの雨を降らせ給へ！」

そして少女の声が響くとその声に応えるかの如く、到来山に豪雨が降り出した。

「さて行くか」

少女はさぶ濡れにもかかわらず、焦る様子はなく車の中へ入る様は冷静そのものだ。

「ボス、お拭きします」

勇姿はタオルを持ってさぶ濡れになった少女を拭こうとする。

「よせ、私の身体は自分で拭く。それよりも早く出発しろ」

「御意。ではボス、出発します」

勇姿の声と共に車がその場から動くとき少女は身体を拭き始め、徐々に水分が飛んで行った。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

戦闘を終えた雄山は尋問を行ったものの収穫を得られず、刺客達を蔓巻きにして車のトランクの中に入れた。

「チツ…天気予報なんてアテにならねえな」

「ん…」

雄山が豪雨が降り出したことに舌打ちすると東堂が目を覚ます。

「()は…？」

東堂が起きるとそこに映ったのはいつしか見たことのある車の窓。右を見れば運転しながら電話している雄山がおり、自分が座っているところは雄山の車の助手席だということがわかった。

「…起きたか？東堂」

「はい」

そして雄山が話しかけると東堂は安心してそう返事をした。

「そいつはよかった。まだ後ろでネンネしている奴らがいるから静かにしろよ」

「後ろ…？」

そしていつの間にか自分の身体が自由になっていたことに気がつき、後部座席を見ると血まみれになったタオルを腹に置かれた矢田とその隣で涙を流しながら寝ている長門がいた。

「うわっ!？」

タオル越しに内臓がちらほら見える矢田の腹を見てしまい、東堂は驚きの声をあげ引

いてしまう。一体何が起きたのかわからないからだ。

「だから騒ぐな。こいつらはお前を助ける為にこんな風になっているんだ。静かに休ませてやれ」

雄山がそう声をかけると東堂はしょんぼりとした様子で雄山に尋ねた。

「すみません…しかし何があつたんですか？わかるのはこの男の子が自分を犠牲にして私を助けたことくらいですが…」

「だいたい合っている。というかそこで寝ている長門…あー、JKも協力したんだ」

「じゃあ私のせいじゃねえよ。」

「てめえが悩むことじゃねえよ。こいつらは自分の意思でやったことだ。いや…それどころか俺が来るなど言ったにもかかわらず首を突っ込んだと言うべきか」

東堂のうじうじとした姿を見た雄山は自分なりに東堂を励ますと東堂も少しずつ元気になり始めた。

「ユーズン先生が止めたのにですか…」

「そうだ。そのおかげでお前を救えたから助かったんだが…この二人が勝手に首を突っ込んだから自業自得と言うべきなんだろうな」

「先生！」

雄山の余りの辛辣な言葉に東堂は非難の目を向けた。

「自業自得かはともかく俺はこいつらを助けなきゃいけない。東堂の恩人だしな」

「…絶対に助けてくださいよ。私の所為で死んだなんてことは嫌ですから」

東堂は雄山に対してもっと批判したかったが矢田を助けようとするのは雄山、東堂共に目的が一致している為に口出ししても無意味だと理解していた。

「ところでユーザン先生、どこに向かっているんですか？」

「大和一族宗家、俺の実家だ」

「えっ!？」

「何をそんなに驚いてやがる…別におかしなことじゃないだろう?」

雄山はそう言っただけで啞然としている東堂を視野に入れる。それでも東堂のシヨックが大きいのか東堂は啞然としたままだった。

第27指導 回復

雄山が雄大との連絡を終え、裕二にも連絡すると到来山を降りると朝から昼間へと変わる。その数分後、雄山は大和一族の本拠地とも言える大和宗家に着いた。

「…」

東堂が大和宗家の屋敷のデカさに口を開けたまま唾然とする。屋敷を正方形に囲んだ塀一辺の長さだけでも学園都市の体育館5つくらい施設の施設ならば余裕で囲えるんじゃないのか？ と思えるくらいだ。

「ここが雄山先生の実家なんですか？」

「ああ…だがこの屋敷はダミーだ。本命はこつちだ」

車から降りた雄山は門を開け、すぐ左へと曲がる。そこにあつたものは井戸だった。

「なんでこんなところに井戸が…？」

あまりにもおかしい。普通このような屋敷であれば門のすぐ側に井戸を作る訳がない。東堂は雄山の言っていたダミーという言葉が引っかけかり、雄山を見ると案の定笑っていた。

「流石にわかるか東堂」

「当たり前ですよ！　というか何ですかこの井戸は!？」

「この家のインターホンみたいなものだ」

東堂はその言葉を聞いて雄山をジト目で見るが雄山はまるで気にしていなかった。その為東堂はすぐにジト目を止め、自分を助けた二人組のことを思い出した。

「そんなことよりもあの男の子の手当をしないと!」

「そう急くな…あの程度の怪我を治せないと思うか?」

「思いますよ!　だって臓器が露出しているんですよ!?　普通腐りますよ!」

「あのなあ…回復魔法のない魔法の世界があると思うか?」

「…あるんですか?」

雄山は鼻で笑い、東堂に胸を張った。

「ある。だが俺は回復系の適性が低いから使えん」

「威張ることですか!？」

あまりにも使えない。確かにキラーマウンテンと言う男だけあって回復などはほとんど関係ないのだろう。

「その代わり兄貴達が使えから問題ない」

「兄貴達って雄大さんや裕二さんですよね?でも二人ともここにいますか?　陰陽師協会からはともかく裕二さんの会社からかなり遠くありませんか?」

「大兄貴はこつちに向かつている途中だが裕二の方はもう着いている」

「…えっ!? 裕二さんの会社って北関東どころか中部の方にあつたはずですよ!? 新幹線を使つても相当時間がかかるはず!」

「裕二はお前が誘拐されたと聞いてすぐさま那須脇旅館に来てお前の行方を調べてくれたんだ」

「…言いたいことは色々ありますけど何で私を救出した後、裕二さんがいる那須脇旅館に行かなかつたんですか? 態々ここまで来る必要はないんじゃないんですか?」

東堂の疑問は尤もである。回復魔法やその類が扱える裕二が那須脇旅館にいるのにそこよりも遠い大和宗家に移動する必要は理由でもない限りほとんどない。

「あそこはダメだ。」

「どういう理由ですか?」

東堂が尋ねると後ろから肩を叩かれ、そちらを振り向くとそこには魅了させられる中性的な顔の持ち主がいた。

「…それは僕が説明する」

顔だけでなく声も中性的であり、東堂はその人物の性別がわからず混乱した。

「ど、どちら様ですか?」

雄山が井戸の縁を触つたことにより目の前の人物は現れたと東堂は頭の中で結論す

るが問題はその人物が誰だかわからないのだ。

「初めまして東堂美帆ちゃん。僕の名前は大和裕二。そこにいる弟から色々聞いているよ」

「貴方がですか。初めまして裕二さん。そこにいるユーザン先生の式になる予定の東堂美帆です」

東堂は裕二の事を知っていたがまさかこんな人物だとは思いつかなかった。しかし裕二の情報を少し持っていたことが幸いし、動揺するだけで済んだ。もし何も知らなければ「嘘だ！」と叫んでいただろう。

「君は僕が雄山の兄だって信じるのかい？ 良くて弟、悪くて妹なんじゃないかって言われるんだけどね」

「ユーザン先生が否定しませんから」

「随分信頼されているね…雄山」

裕二は雄山が信頼されていることに対してなのがあるいは、東堂の行動が可愛らしいのか…あるいはどちらでもない理由によって微笑んだ。

「でもユーザン先生が言うには九条家に婿入りして性も大和から九条に変わったんじゃないんですか？」

「大が和宗家の人間として呼び戻されたことにしているからね。九条家から籍を外した

んだ。」

「ほえ〜複雑なんですね」

東堂が感心すると裕二は雄山の方へ向いた。

「ところで雄山、患者は？」

「俺の車の中で寝ている」

「それじゃあそっちに行こう」

裕二がスイッチを押すと雄山達が雄山の車まで瞬間移動した。

「な、な、な…」

東堂は瞬間移動をしたことに驚きを隠せない。その為口から言葉がほとんど出ずに「な」を連続でいうだけだった。

「またくだらない魔道具を開発したのか？」

雄山はそれを見て、裕二に対して呆れの声を出し、東堂に目配りをして二人を車の中から出す。

「くだらないとは失礼だね。これは世紀的な発明なんだよ？ 名付けて！ 瞬間移動装

置だっ！」

「瞬間移動は確かに凄いがその分裕二の作る魔道具は魔力の燃費が悪いだろ？ この前作った魔道具なんかは魔力や霊力が膨大な雄大ですら半分くらいは持ってかれたって

嘆いていたぜ」

それを聞いた東堂は、もし雄山よりも少ない魔力の持ち主である自分がその瞬間移動装置を使えば間違いなく半端な状態で移動するだろうと想像していた。雄山にそれを言ったら間違いなく「お前の場合魔力が少なすぎて瞬間移動装置が中途半端にも作動しないんじゃないのか？」と鼻で笑われるので黙っておいた。

「でもその分性能はいいよ。今回の瞬間移動装置も使用者の魔力や霊力が尽きないように制御してある」

「普通に低燃費にすればいいんじゃないのか？　そうすればバカ売れると思うぜ」

「今の僕の技術じゃ低燃費にすることは出来ないよ。でも魔力を蓄積するようにしておけばなんとかなる」

「なるほどな。…裕二やってくれ」

雄山がそう告げると裕二の目の前には矢田と長門が仰向けに寝ていた。

「それじゃちやちやつとやるか」

裕二は矢田のタオルを剥がし、臓器を露出させている部分を見る。

「こりゃ酷いもんだ…裏の住民ならともかく表の住民が見たらドン引きするね」

裕二は苦笑し、臓器を露出させている部分付近に手を触れる。するとそれまでくつついていたタオルの糸屑やその他の細かいゴミが見えなくなり始めた。

「裕二、何しているんだ？」

雄山は裕二のかけた術が気になり、そう尋ねると裕二の口が開いた。

「まず清潔にして、それから回復術をかけるんだよ。そうしないと膿とかできるからね。そのくらい常識でしょ？」

「いや回復魔法とかの類は専門外だからな…傷がついたら回復魔法をかけておけばいいと思っていた」

「今度から覚えておいて。でないと救えるものも救えなくなる」

「わかった」

雄山はそれ以降口を閉ざし、黙って矢田の様子を見る。

「ところで裕二さん。先ほど言っていた那須脇旅館に戻るのがいけない理由でつて何ですか？」

「那須脇旅館は表の住民も利用する旅館だからそこで回復術を使ったら旅館にいた人達に裏の世界について説明しなきゃいけない」

「じゃあ説明すれば…」

「だからお前はへっぽこ吸血鬼なんて呼ばれるんだよ」

雄山が口を挟むと東堂の顔が顰めた。

「無能教師には言われたくありません！」

「俺が無能かどうかはさておき、へつぽこ吸血鬼つて言われた理由がわからねえのか？」
「…私の魔力が少なすぎるからですか？」

「それを今言う必要があるか？…ねえだろ。那須脇旅館にいる連中全員説明したらせいつらも裏の世界に関わることになる。その内100人中何人生き残れると思うか考えてみる」

「60人くらいは生き残れるんじゃないんですか？」

「そんな生ぬるい訳あるか！ 裏の世界に関わつて死んだ奴の割合は99%…言つてみれば裏世界に関わつたらほぼ死んだも同然だ」

「でも私は生きてますよ？」

「運が良かったんだよ。お前もこいつらも…」

雄山はチラリと治療が終わつた矢田を見ると先ほどまで死にかけて人間とは思えないほど気持ち良さそうに寝ている。

「まあ、要するにだ。そんな世界に入らせない為にも俺達は努力して裏の世界の存在を隠している訳だ。態々巻き込むのは俺達生まれついでにの裏世界の住民の義務に反するし、何よりも奴ら自身も望んでいることじゃない」

「…それはわかりましたけど私はどうなんですか？」

「お前が望んだことだろうが。少なくとも俺はお前以外に巻き込んではいない」

東堂は雄山を引き止めて裏の世界に関わる決意をしたことを思い出し、自分が確かに望んだ事だと改めて認識した。

「雄山、美帆ちゃん、この娘の傷も治しておいたよ」

東堂は裕二の言葉によって現実に引き戻され、女子高生の方を見る。

「うん？長門は怪我してなかったはずだが…？」

雄山は先ほどの戦いを思い出す。東堂を救う際に最初に狙われた矢田は大怪我を負ったが長門に関しては勇姿から守れた。そのはずなのに怪我を負っているということとは長門は無茶をしたのだろうか。

「確かに最近出来た傷はなかったけど腹の方にちよつとした古傷があったから治療したんだ」

裕二はそんな雄山の疑問に答えるように口を開けた。

「そういうことなら長門も喜ぶだろ。傷つてのは女の敵だしな」

治療する際に座っていた裕二が立ち上がると棒をどこからともなく出し何回か目の前の門を叩いた。

突如、地の鳴るような轟音がその場に響く

「な、なんですか!?! ユーザン先生、裕二さん!?!」

「東堂落ち着け。本当の大和宗家の屋敷の門が開かれるだけだ」

「本当の門…?」

「そうさ、大和宗家の屋敷はさつき見せたような小屋じゃない。もつと巨大な屋敷だよ」
裕二がそう告げるやいなや目の前に現れたのは屋敷などというレベルではなくもはや城。それも数々の歴史の偉人達が築きあげた城がフィギュアサイズに見えるほどの巨大な日本城だった。

「…ヒウ」

あまりの大きさに東堂は唾然とするとどこるか泡吹いて倒れてしまった。

第28指導 長門と東堂

東堂が目を覚ますと見知らぬ電灯のある天井が目に映る。

「……は……？」

東堂が上半身を起こし視線を天井から部屋の壁へ移すと木の壁が目に映り、いつもとは違う場所だと理解した。

「そうだ……私はアレを見てパニックになって気絶したのよね。ということは……あのお城の中？」

東堂は言葉に出して状況を整理し始め、かけられていた布団をたたんで起き上がる。しかしそれまで一緒にいた雄山や裕二が見あたらず、首を動かすとすぐ近くに東堂を助けた二人が眠っているのが視界に入る。

「この二人は……確か長門と矢田だったけ？」

「……う」

東堂が、雄山が口にしていた二人の名前を呟くと目を覚ましたのは長門の方だった。

「……は……？」

「おはよう、長門さん」

長門は東堂の姿を見て、真つ白になつていた頭を覚醒させていく。すると記憶が徐々に戻り、目の前にある東堂の顔と記憶にある東堂の顔を一致させた。

「貴女は、蓑虫にされていた人…?」

「東堂美帆。私は蓑虫にされていた人じゃないよ」

東堂はそう言つて自分の制服の赤色のネクタイを意図的に触り、締める。

彼女がこのような行動を取つたのは彼女として人間の血が流れており、それなりに自分が年上だという優越感を感じたいからだ。

学園都市の生徒はブレザーの制服である。その制服のネクタイの色で中学1年から高校3年の各学年を判断出来るようになっていた。故に東堂はネクタイを触り長門の視線をそこに注目させることによつて長門に自分の方が先輩なのだということを感じさせることが出来る。

「長門奈恵です。よろしくお願いします東堂先輩」

長門が東堂に挨拶すると唇が乾く間もなく東堂に尋ねた。

「ところでここは一体どこなんですか?」

「ユーザン先生の実家よ…もつとも確信はできないけれどもね」

「確信ができないというのはどういうことですか?」

「ユーザン先生の実家の前で気絶しちゃったからね…近くで眠らせるところがあるとす

るならユーザン先生の実家しかないのよ」

「でも先輩、何で気絶したんですか？」

「…それよりも身体の方はどうなの？ 一応ユーザン先生のお兄さんが治療してくれたみたいだから大丈夫なはずだけど」

東堂は長門の質問に答えず話を強引に逸らし、長門の身体を観察する。

「それじゃ聖君は…!？」

長門は矢田の様子を見るために自分の身体を動かすやいなやすぐに違和感を感じた。

「か、軽い？ それに古傷が痛まない…？」

人間に限りなく近いとはいえ吸血鬼である東堂は人間よりも耳が良い。故にぼそりと長門が呟いてもはつきりとそれを聞いていた。

「裕二さん…ユーザン先生のお兄さんがサービスで長門さんの古傷もしておいたって言うっていたからそのせいじゃないの？」

「え？ 嘘っ!？」

長門は自分の身体を勝手に見られた羞恥、あるいは傷が治ったことによる興奮により顔を紅く染め上げる。

「本当だよ。嘘だと思うなら身体の傷をみればいい」

東堂が長門にそう告げると「…今、聖君が起きたら…だからと言って起きなかつたら

後悔するだけだし……」などとブツブツ呟き、一つの結論に達する。

「お風呂の時に確認しますよ。それで治ってなかったらセクハラで訴えればいいだけですし」

東堂はこれが巷で聞くツンデレという奴なのだろうと思い、苦笑いをした。

「そういえば先輩、聖君はどうなったんですか?」

「裕二さんが治療して大人しく寝ているだけらしいよ」

「よかった……」

もし矢田がここで死んでしまったら長門は矢田を強く止めなかったことを永遠に後悔していただろう。しかしそれを聞いて安堵のため息を吐いた。

「長門さん、ところであの時の事を覚えているの?」

「あの時のこと?」

「そこにいる矢田君が傷ついた時の事よ」

「忘れもしません……東堂先輩を運ぼうとしたらあのデカブツが石を蹴って聖君を……」

長門は途中で言いかけたが止め、口に手に添える。

「無理しなくていいよ。でもこれだけは聞きたいから聞かせてもらうよ……その前に何か超常現象じみたものを見なかった?」

「ユーザン先生とデカブツが戦っているときデカブツが燃えているのに無事だったり、

地震が起きたり…それからユーザン先生が増えたり…とにかく一杯見ました」
「…」

東堂は無言で頭を抱える。素人である二人に気がつかなかった雄山もそうだが、よりよってそんな派手なことをしざるを得ない相手に目をつけられたという事実が東堂の悩み事を増やす結果になっていた。

「ユーザン先生、こんな時はどうすれば良いの?」

東堂は裏世界に深く関わったのはつい最近のことであり、二人の記憶や存在を消すのか、このまま裏世界に関わらせるか等のような判断は不可能だ。

「えっ? どうかしましたか東堂先輩?」

「…」

長門が東堂に尋ねるも東堂はそれに応えられず、気まずい空気がその場に漂ってしまいい、矢田の寝息のみが二人の耳に届く。

だがそれも長くは続かなかった。

次の瞬間、地鳴りと共に巨大な衝撃が部屋を襲った。

「地震!」

長門が頭に布団を被り身を伏せるがすぐに揺れは収まる。だが長門はそれでも警戒しており、亀のように丸くなっていた。

「長門さん、もう揺れは収まったから…出てきても大丈夫よ」

「東堂先輩はわからないと思います。地震は恐ろしいんですよ!? 余震とかで死ぬ場合も充分にあるんですから!」

長門は東堂にそう怒鳴り、更に身体を丸くする。

「…ひよつとして長門さんの古傷もその地震が原因なの?」

「そうです…東堂先輩。今の聖君のように死にかけたこともあつてリハビリが終わるまでは、ほんの些細な揺れでもトラウマになって生活が出来ませんでした」

ガタガタを震える長門は本当にそれを経験したものだと思われた。

「今は大丈夫なの?」

「先ほど見たいに大きな揺れでなければ大丈夫ですよ」

ようやく長門は布団をめくり、足を内股にする座り方…所謂女の子座りをして東堂に向き合った。

「そっか。じゃあ話しても良いかな」

「何をですか?」

「ユーザン先生が超常現象を起こせた秘密」

長門は喉の唾を飲み込み、東堂に目を合わせようとしますが東堂の背後にいる人物を見て顔を青ざめた。

「このアホタレが！」

低い男声がこの場に響き渡ると同時に、ドラム缶を鉄の棒で殴りつけたような音が響く。

「痛っ!?! いったい誰なの…?」

東堂が自分を殴った人物を見ようと振り返る。そこにいたのはかつてキラーマウンテンと呼ばれた男だった。

「よう、目覚めのゲンコはどうだった?」

「ゆ、ユーザン先生…今までどこに?」

東堂が信じられないものを見るような目つきで雄山を睨むが雄山にとってはそれは意味をなさない。

「話聞けよ。本来ならそこから先、御説教してやりたいところだが勘弁して質問に答えてやる。俺はさつきまで師匠に師事してきたんだよ…さっきのデカイ揺れもあれが原因だ」

「師匠の師の方の師事なのか、指の方の指示、どっちなんですか?」

「最初に言った方だな。でだ…長門が起きているようだから説明させてもらおうぞ」

「あれっ? 矢田君に説明しなくて良いんですか?」

「矢田に説明する内容と長門に説明する内容は全く別のものだ。いいか長門良く聞け」

「はい」

長門は雄山の口から何か特別なことを聞かされる。そんな予感を感じ取っていた。

「世の中には裏世界と呼ばれる狂気の社会がある…そこには他の社会とは違ってオカルトじみたものやファンタジーじみたものがあるんだ。例えばこんなものとかない？」

雄山は掌から火の玉を出し、それを宙に浮かせ、雄山の周りを周回させた。

「!?」

「種も仕掛けもねえ。あるとしたら魔法によって引き起こされた現象だ」

「これが魔法…?」

「そうだ…ようするにお前は魔法がある世界に首を突っ込めるようになったんだよ。おめでどう」

皮肉げに雄山がそう告げるとその空気を感知取った長門が手を挙げて質問した。

「でもどうしてですか? そんな魔法がある世界に私を案内するなんて…」

「お前が超能力者だからだ。それもかなりの素質を持っている超能力者だ」

「…はい?」

だが流石に自分に対してこの胡散臭い言葉を言われるとは思ってもよらず、首を傾げました。

第29指導 長門に説明

「ユーザン先生、長門さんが超能力者ってどういうことですか？」

東堂が哑然としている長門の代わりに手を挙げて質問すると、雄山が呆れたような溜息を吐いてその質問に答えた。

「聞いてわからねえか？ そのまんまの意味だ。龍造寺もエスパードだっただろう？ アレとベクトルこそ違うが非常に強力な力だ」

「でも人間の長門さんが…？」

東堂は胡散臭い者を見る目で長門を見る。そこには混乱している長門がいた。

「え？ ちょっと待つてください、ユーザン先生、それに東堂先輩…それじゃまるでユーザン先生達が人外と出会っているみたいじゃないですか!？」 というか東堂先輩が人外なんですか!？」

長門は表の世界、つまり魔法どころか魔物等の存在すらも知られていない環境で育ってきた人間である。故に長門は雄山が人外と出会ってきたことやどこからどう見ても人間らしい東堂が人外であることに驚きを隠せない。

「そうだけど…？」

東堂がバツサリと答えると長門は疑わしいものを見るような目で東堂を見つめた。

「長門、オカルトそのものが存在しているのは何故かわかるか?」

いきなり雄山が長門に尋ねる。しかし長門はさっぱりわからず、唸り、頭を抱えた。

東堂はその様子を見て自分の時のことを思い出し苦笑する。

「それってどういう…?」

「東堂、説明してやれ」

「ええっ!? ユーザン先生、いきなり振らないで下さいよ!」

東堂は苦笑から焦りの表情に変え、雄山に抗議すると雄山が舌打ちし毒を吐く

「チツ、使えねえヘツポコ吸血鬼だ」

「あー!! ユーザン先生、またヘツポコ吸血鬼って言いましたね! 無能教師! 今日

という今日は許しませんから表に案内してください!」

「封印しているお前相手に表に出るまでもねえ。すぐに決着を着けてやる」

それを聞いてキレた東堂が腕に巻かれている包帯を外し、御札を取り外して封印を解

こうと手にかける。

「えっ!? と、取れない…」

しかし東堂はそれを外す事は無くどんなに引つ張つても腕と共にするだけだ。

「東堂、お前の吸血鬼化は誰が封印していると思っているんだ?」

「あっ!？」

「お仕置きだな」

雄山がそう言うやいなや、東堂の頭を拳で挟む。

「ゆ、ユーズン先生! ごめんなさい! 許して!」

東堂は拳から逃れようともがく。しかし雄山の力に逆らえるはずもなくそれは実行された。

「あ、あああっ!？」

雄山の拳が回りながら東堂の頭をゆっくりと締め付ける。所謂梅干しの刑である。東堂が悲鳴を上げながら抵抗するも万力のような力で締め付けられているせいか逃れることは出来なかった。

数分後、梅干しの刑を喰らった東堂は目の焦点が合わなくなるまでやらされその場へあたり込んでしまった。

「だ、大丈夫ですか? 先輩?」

「うとうう…」

長門が話しかけても、先程の梅干しの刑が余程効いたのか東堂は返事をせず呻き声を上げるだけだった。

「さて長門。さっきの話を続けるぞ」

雄山はそれを無視して長門に話しかけた。

「わ、私が超能力者って話…ですよね？」

「そうだ。さつき勇姿…あの大男がお前に目掛けて石を蹴っ飛ばしただろ？」

「でも当たりませんでしたけど…一体何があつたんですか？」

「そいつはそうだ。お前の超能力が働いたんだからな」

「え？ ど、どういうことでしょうか？」

「あん時長門は目を瞑っていたからわからなかつただろうが石がお前を避けるように軌道を変えていったんだ。それも物理的にあり得ない方向にな」

「でもユーザン先生の魔法ならあり得るんじゃない？」

「俺はあの時何も出来なかつた。それに出来たとしても石を逸らすよりも障壁…要するにバリアーで防御し、はじき返して守つただらう。そっちの方が簡単だしな」

「…」

「俺が何もしていないのに関わらず石はお前を躲すように逸れた。そしてお前が魔力を使った痕跡がない…となればお前が超能力を使ったとしか考えられない」

「でも何故私が超能力者だからって魔法のある世界に関わらせるんですか？」

「二度目覚めた超能力の力は衰えることはない。磨き上げた上でサボれば衰えるだろうが基本的に超能力は自転車とそう変わらない」

「えっと…つまり？」

「長門の場合、このまま放っておけば感情が高ぶった所で超能力が発動する。もし仕事場で感情が高ぶってみろ…その度に物が浮いたり、何かを破壊する、最悪人を殺すことにもなりえる。そうなればお前は恐れられ、社会的に殺されるだけじゃなく永遠に心に傷を負うことになる。そうならないように超能力の制御の仕方を覚えなきゃいけない。その制御の仕方を熟知している人間がいるのが…」

「魔法のある世界、つまり裏の世界って訳ですか？」

「そうだ。裏の世界に関わっている奴らの中には超能力者が大勢いる。ところが表の世界に超能力者は極少数、それも大したレベルじゃない奴らばかりだ。超能力を制御しないなら断然裏の世界で学んだ方が良い」

「わかりました…」

長門はその提案に頷き、雄山は笑みを浮かべた。

「ひうつ!？」

それを見てしまった長門は怯え、震えてしまった。

「ユーザン先生、そんな笑みを浮かべないでくださいよ！　ただでさえユーザン先生の顔は怖いんですから！」

「そんなに怖いかな？」

「誰がどう見ても暴力団ヤクザにしか見えません！」

「そんなバカな…長門、俺は怖くないよな？ な？」

雄山は手を長門の肩に置いて、何度も尋ねる。それだけ彼が強面であることを認められなかったのだ。

「こ、怖くないと言えは嘘になります…」

しかし返されたのは無情な現実であった。

「何故だ…最近の若者は何故この顔の良さが理解されないんだ？」

「こ」まで言われるとは予想してなかった雄山はブツブツと呟く。

「それ以外の人は何て言っているんですか？」

「勇ましくて、雰囲気男らしいとかだな」

「それ、キャバクラで働いている淫魔の知り合いが言うにはイケメン以外を褒める時に使う言い回しですよ」

「な、何だと…？」

雄山はそれを聞いて砂になった。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「ゆ、ユーザン先生これからどうするんですか？」

落ち込んでいた雄山に対して罪悪感を感じた長門が声をかける。すると雄山が二人

に聞こえる程度に一言呟いた。

「修行だ」

修行、即ち心技体すべてを磨き上げる為の行為である。修業とも書く。

「修行？」

「何の為に？」

東堂は長門とは違い雄山と一緒に行動し、戦闘もしてきた。だがいずれも雄山は力こそ相手よりも下であつたが経験でそれを補つてきた。言つてみれば搦め手で攻める戦い方だ。故に雄山が修行をしても大して意味がないと東堂は思つていた。

「お前たちを鍛える為だ」

「…えっ!？」

だから雄山の言葉に東堂が啞然とし、長門もそれに続くように啞然としてしまう。

「わ、私もですか!？」

「もちろんだ」

長門の言葉に雄山が頷き、肯定すると二人は寄り添つて内緒話を始めた。

「長門さん、どういふことなのかわかる？」

「私の方がわかりませんよ…いきなりそんなことを言い出すなんて」

二人が話していると雄山が口を開け、大声を出す。

「おいお前ら！ わからないことがあれば二人でコソコソと話していいんで俺に質問しろ！ でなければ永久に答えなんか出ないぞ」

地獄耳の雄山がそう大声を出すと二人は器用にも座ったまま飛び上がり、それぞれ反応を見せる。

「じゃあ、何で私達を鍛えるんですか？」

「東堂は俺の式としての訓練をしなければならぬし、長門は超能力を制御する為だ。説明は以上だ。着いてこい」

「どこに行くんですか？」

「着けばわかる」

雄山の笑みは最初に元が付くとはいえ、いやだからこそなのかもしれないが、教師がしてはいけない凶悪な笑みだった。東堂がそれを見た瞬間、長門の目を雄山から背けさせ、気絶するのを防いだ。

第30指導 キラーマウンテンの師

東堂と長門は森の香りが漂う木製の廊下や蘭草の香りが漂う和風の部屋を見渡し、匂いを感じながら歩いていったが雄山はそれらを見せず、階段を下っていく。

「ひ、広いですね…」

元々身体能力が高い訳ではない長門は息を乱しながらそう呟いた。

「あと少しだ。我慢しろ」

しかし雄山は無情にも長門の方に振り向かず前へと進む。

「長門さん、乗って」

雄山の辛辣過ぎる態度に東堂が息を乱している長門に同情し、屈んで背を向けた。

「そんな…悪いですよ」

「いいからー!」

東堂は問答無用と言わんばかりに長門を背負い、歩く。長門はそれに不満顔であったが東堂の温情に感謝もしていた。

だがそれも束の間だった。

「グワアアアアッ!」

そんな叫び声と共に聞こえてきたのは地の鳴る轟音。地面が揺れた後、脈のある死体が雄山の目の前に転がり、それを雄山越しに見ていた東堂や長門は混乱していた。

「全く…相変わらず荒っぽ過ぎねえか？ 師匠」

呆れたように雄山がそう呟くと雄山達の目の前に現れたのは見た目三十代前の女性だった。

「雄山、お前に言われたところで痛くも痒くもないね」

その師匠は脈のある死体を片手で担ぎ、雄山にそう答える。

「ユーザン先生、この人がユーザン先生の御師匠様なんですか？ 見た感じユーザン先生と年齢が同じくらいに見えますが…一体？」

「ホツホツホ…雄山、お前の弟子は嬉しいことを言ってくれな。こう見えてワシは今年で69だぞ」

「へえ、今年で69ですか！ 随分お若く見え…？ ろくじゅうきゅう！」

「え、ええええーっ!」

雄山の師匠のトンデモ発言により、東堂と長門はお互いに見つめ合い、雄山の師匠を二度見する。二人が動揺するのを見た雄山と雄山の師匠は笑ってしまった。

「あり得ない…雄大さんや裕二さんといい、もしかして大和一族って皆若く見えるの？」

「そ、それだとユーザン先生が大和一族じゃなくて佐竹先生が大和一族になってしま

ますよ」

「長門、それはどういう意味だ？」

長門の毒舌に反応した雄山の顛顛に青筋が入る。雄山の元同僚の佐竹は確かに小学生のような外見であり、年齢よりも外見が遥かに若い……というか若すぎる。故に外見年齢が若い佐竹が大和一族だと思うのは理解できる。だが長門の最後の言葉は雄山に対して実年齢よりも外見年齢が老けていると言っているようなものだ。

「そのまんまの意味じゃろう？」 雄山

雄山の周りに味方はいない。その事実には雄山は顔を引きつらせた。

「……それよりも師匠、それにお前達にそれぞれの事を紹介する」

雄山は顔を元に戻し、デフォルトである強面な顔になる。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

長門が東堂の背中から降り、制服の皺を伸ばして服装を整えると雄山が口を開けた。

「さて改めて紹介するぞ。こっちにいるのは俺の師匠こと大和春。俺の父方の祖母にあたる方だ。これからよくお世話になるからしっかりと挨拶をしておけ」

雄山は二人に雄山の師匠、春を紹介すると春が笑みを浮かべた。

「大和春じゃ。よろしくのお嬢ちゃん達」

「……ユーザン先生のお婆ちゃんなんですか!？」

東堂と長門が再び目を見開き、合わせる。その理由はやはり見た目であった。

「そーじやよ、文句あつか」

「うわあ…ユーズン先生にそっくりです。納得しました…よろしくお願いします！」

「よろしくお願いします」

東堂と長門が春の言動に雄山を重ね、納得すると同時に頭を下げ、敬礼した。

「それで雄山、お嬢ちゃん達の紹介はまだかいな？」

春が目を合わせると雄山が口を開き、東堂に手を向け紹介し始めた。

「この女子高生が東堂美帆。こう見えても吸血鬼だ」

「よろしくお願いします！」

東堂はハキハキとした声で春に頭を下げ、挨拶をする。

「おやおや元気な子だねえ…」

その言葉を聞いた春は東堂に微笑み、東堂はそれを見て満足げに笑顔となる。しかしそれを後ろで見ていた雄山は苦笑していた。その様子からして見て少なくとも東堂に対して苦笑したのではなく、むしろ春に対して苦笑していた。

「でだ。こつちの子は長門奈恵。人間の超能力者だ」

だが雄山はその苦笑もすぐに止めて長門を紹介し、超能力者であることを告げた。

「よろしくお願いします」

「ふむふむ、こつちの子は若干声が出ておらぬな」

「師匠、厳しくしすぎないでくれよ？」

「わかつておるわい」

雄山と春の会話の中に長門が春に鍛えられるような事を聞いた東堂は恐る恐る手を挙げた。

「ユーザン先生、一体どういうことですか？」

「どういうこととは？」

「まるで春さんが長門さんを鍛えるみたいなきことを言っていましたけどどういうことですか？」

「え、っ!？」

長門がそれを聞いてア行濁点使いとなり、雄山をまじまじと見つめるが雄山はまるで気にしていなかった。

「その通りだ…とは言っても師匠は超能力専門じゃないからな基礎だけ教えて終わりだ」

「そうですか…よかったね、長門さん」

東堂が同情するように長門の肩に手を置く。長門は知らないが雄山は裏世界ではキラーマウンテンと呼ばれるほどマフィア達から恐れられる男である。そのキラーマウ

ンテンの師匠に鍛えられるともなれば例え軽めであつても地獄のような日々を迎えることになるだろう。しかも春の性格は雄山の兄達よりも雄山に似ているから尚更そう思い込むのは無理なかつた。

「東堂、何他人事みたいに言っているんだ？」

「へっ？」

東堂はその時、長門と同じように口を動かしたような感覚に襲われ、硬直してしまう。「徹底的に師匠からしごきを受けるのはお前の方なんだからな」

その言葉を聞いた東堂が口を開けたまま暫くの間愕然とし、硬直する。

「はああああーっ?!」

そして東堂はまるで聞いていないと言わんばかりに春の方へ向くが、すぐに雄山へと振り返り、首元を掴む。

「一体全体訳を聞かせて下さい！」

東堂は雄山の口からしごくという言葉が出たことと春に鍛えられることに対して理解できなかつた。自分はいくまで式である。故に雄山と一緒に戦い、鍛え上げる方が有効的かと思つていた。しかしまさか雄山の師匠に鍛えられるとは思つてもなかつたのだ。

「さつきも言つただろうがお前は俺の式としての訓練をしなければならぬ。その理由

は今のお前は封印を解いた時の妖力に振り回されているからだ」

雄山が首元を掴んでいた東堂の手を払い、冷静にそう告げた。

「振り回されている?」

「妖力その物に頼るのはそんなに悪いことじゃない。むしろ敵に対抗するようならそれを使え。だが東堂の場合はただ暴れるだけでしかないということだ。ゴルフで例えるならスイングのヘッドスピードは出ているのにも関わらず球筋が曲がってしまい飛距離が出ない…そんな状況だ」

「つまり伸びしろはあるってことですか?」

雄山はそれに頷き、返事を返した。

「そういうことだ。妖怪の力を伸ばすには妖怪の力を知らなくちゃいけない…妖怪退治を俺よりも経験している師匠の方が適任だ」

「そういうことじゃな美帆。この孫は儂に土下座してまでお主を鍛えるように頼み込んだんじゃ。ここまでされては流石の儂も重い腰を上げてお主を鍛えるしかないわ」

「師匠!」

余計なことを言われた雄山は春に大声を出し、睨む。

「事実じゃろうに…美帆、お主も雄山に義理があるなら儂に師事して少しでも雄山の役に立つことじゃな」

「…ふう、仕方ないですね。元々私が裏の世界に関わりたくいとユーザン先生に我儘を言ってしまったからにはユーザン先生の式として戦いましょう。その代わり、ユーザン先生…」

「ん？」

「せ、責任取って下さいね？」

東堂が顔を紅潮させ、小さいながらもよく響く声で雄山にそう言った。

「ああ取ってやる…お前が俺の式だということで行き遅れたら吸血鬼の男を紹介してやるよ」

雄山の発言はやたら生々しく、そして現実味のある言葉であった。

「そう言うだろうと思ったわい…雄山」

春は東堂に同情するような目を向け、雄山に呆れた声を出した。

「師匠、それよりも例のところへ行こう」

「その前にこの馬鹿弟子の始末をしてからな」

春は脈のある死体を担ぎ、外の隙間を見つけるやいなやその脈のある死体を投げ飛ばした。

「それじゃあ行こうかね、弟子達よ」

二人の女子高生達はそれを見て雄山の行動に首を突っ込んでしまった事に途轍もな

い程の後悔をしてしまった。

「頑張れよ。俺は俺でやるべきことがあるからな」

雄山がその場からいなくなり、二人に残ったものは後悔などのネガティブな言葉ばかりであった。

第31指導 扱きとその効果

深夜まで雄山の祖母である春は二人を扱いていた。

「よし、今日はそこまで！」

「ありがとうございます！」

二人はこれ以上ないまでに疲れ果てており、お辞儀をするとすぐに座り込んでしまった。

「いくら初日とはいえ少し体力がなさ過ぎじや。もう少し鍛えぬとついて行けぬぞ」

「無茶、言わんで下さい。私はまだ吸血鬼ですからマシな方ですが長門さんを見てくださいよ。もう爆睡しているんですよ？」

東堂の言う通り、長門は器用にも座ったまま爆睡するということをしていた。

「何を甘ったれたことを言つとるか！」

春の拳が床を貫き、屋敷を振動させるが長門はそれすら気づかないほど疲れ果ててているのかまだ眠ったままだ。

「儂が指導していた時の雄山や勇姿は寝ながら戦っていたんじゃ！ 少しはそれを見習わんかドアホ！」

「はい…」

東堂は眠気のあまり生返事で返すがそれも限界に近づいてきた。

「もう限界です…お休みなさい」

そして東堂も眠りについた。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「はっ!？」

東堂が目を覚ますと隣には爆睡している長門。上には見た事のある天井。下には敷布団。あることを除けば見た事ある光景だった。

「ここってさっきの場所?」

そう、ここは雄山が長門が超能力者であること告げた部屋である。しかしそこには矢田が寝ていたが彼はどこにもいなかった。

「ユーズン先生が移動したのかな?」

東堂が起き上がりとうとして身体を動かそうとすると激しい痛みが襲いかかった。

「っ!!」

それは筋肉痛。筋肉痛は使った筋肉を修復する為に起こる。故に時間をおいてその病状が現れるパターンが多く、東堂も例外ではない。しかし東堂は吸血鬼故に身体が丈夫であり悲鳴をあげるほどの筋肉痛になったことなくそれほどまでに春の扱きはキツ

イものであった。

「(首から下が動けない…)」

もし動こうものなら激痛に襲われてしまう。下手に動いたところで何も得られるものはない。東堂はそう結論付けると再び目を閉じ、静かに眠りにつこうとする。しかしやたらと騒めく音が聞こえ眠りにつけなかった。

「(もう眠れないじゃない!)」

そして目を開け天井を見ると蛙のような妖怪と目が合った。

「(へっ!?)」

東堂がまず感じたのは恐怖。それから驚愕だった。この二つの感情により間抜けじみた声しか出ず唾然としてしまう。

「あくあ。見つかつちやった」

その妖怪は泥のように液体状になり天井から東堂の真横に落ちる。その姿は普通の人間であればトラウマものになり得るだろう。

「むふふ…こんな可愛い子ちゃんを攫ってこいなんて御主人様も良い趣味しているな
〜」

元の蛙の形に戻った妖怪は東堂の布団に手をかけ…銃声とともに倒れた。

「やあ、無事かい? 美帆ちゃん」

その声は中性的な声であり、東堂が一度聞いたことのある声でもあった。

「ゆ、裕二さん……」

「どうしたの？」

「この妖怪が乗っかっていると筋肉痛のせいでめちやくちや痛いです。どかして貰えませんか？」

「はいはい。仕方ないね」

裕二がその妖怪をどかすと東堂は自由の身となるが筋肉痛のせいで動けない。

「ありがとうございます」

「礼には及ばないよ。それよりも一刻も早く避難するよ」

「避難する理由は避難した、後で聞きますが、まず筋肉痛を治して貰えませんか？ 身体全体の筋肉痛が酷くて動けませんから……」

「はいな」

裕二がすぐに治療すると東堂の筋肉痛が治り、布団から起き上がった。

「それでどこに避難するんですか？」

「ついて来ればわかる」

裕二の言葉に東堂は雄山を重ねてしまった。

「わかりました。でも長門さんの背負って行きますので遅くなりますよ？」

東堂が長門を背負い、裕二が頷いた。

「不本意だけどそういう理由なら仕方ないね」

そして裕二が扉を開けるとそこで待ち伏せていたのは数十にも及ぶ数の妖怪達であつた。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「ヒヤッハー!」

などと奇妙な掛け声とともに襲いかかる妖怪達。それを目の前にしても裕二は全くと言って良いほど動じてなかつた。

「美帆ちゃん。そつちに投げるから後始末お願い出来る?」

「え? あ、はい!」

裕二の言うことに最初こそ意味がわからなかつたが東堂はすぐに理解し、長門をそつと床に置く。すると投げられて姿勢を崩した妖怪が東堂の真上までやって来る。

「はっ!」

東堂はそれを右手の手刀で貫き、確実に仕留める。

「よし、今度は二匹行っちゃうよ!」

今度は二匹の妖怪が宙を舞い、東堂は左手にも手刀を作り上げ、妖怪達を始末する。その始末が終わると裕二が妖怪達を投げ、東堂が始末する。それらを何回か繰り返すと

みるみると数が減り、ついには一匹だけとなった。

「これで残るは君だけだよ？」

「ば、馬鹿な……裕二如きにあの精銳達がわずか数十秒でやられただよ！」

「あのねえ、僕だつてお祖母ちゃんの指導を受けたことあるし、大や雄山、勇姿達と血の繋がった兄弟でもあるんだよ？　いくら僕が貧弱でも君達如きに負けるほど弱くないっての」

裕二はその妖怪の頭を拳で揺らし脳震盪を起こして気絶させる。

「（僕が貧弱つて、どこがですか？）」

「それじゃその娘を背負つたら行くよ」

その後裕二達はいきなり襲われた妖怪と遭遇したものの、撃退し避難場所まで避難した。



その頃、雄山は矢田を陰陽師にするべく鍛えていたが、東堂達の状況と同じく妖怪達が襲いかかってくる。

「ユーザン先生、どういうことつすか!？」

「俺が知るか!」

口論しながらも雄山は矢田を守り、陰陽術を見せる。

「矢田、しっかり見ておけ！これがいずれお前が習得する武器、陰陽術だ！」

目の前にいた妖怪が消え去り、消えていく。

「今度はお前がやってみる！」

「無理です！」

「諦めんなよ！どうしてそこで諦めんだよ！あとちよつとじゃねえか！」

「いややっていないのにとちよつともへつたくれもねーつすよ！」

「さっきの特訓でやっただろうが！時間が足りないなんて言い訳は出来ねえからな
！」

「くっ…どうにでもなれ！」

矢田は全身全霊を込め、霊力を妖怪に向け放つ。だが効果はなかった。その原因は全くと言って良いほど矢田の出す霊力に威力が込められていないからだ。

「何故だあああつ！」

矢田が絶叫するが妖怪達は御構い無しに矢田を襲う。しかし雄山がその妖怪達を倒し殲滅していく。

「ま、初めての实战だから仕方ねえが後で出来るようになるまでたつぷりと扱いてやるから覚悟しておけ！」

それを聞いた矢田は目の前が暗くなった。雄山の扱きは間違いなく祖母の扱きを受

け継いでいた。

第3 2 指導 勇姿の出生



避難場所に避難し、無事難を逃れた裕二達。しかしそこには雄山達の姿は見えなかった。

「あれ？ ユーザン先生は？」

「雄山ならさつき弟子を連れて修行していたはずだけど…まさかこんな時でも修行をやるほど馬鹿じゃないから今頃、こっちに来てはいるはずだよ」

「そう言えば何で避難したんですか？」

「この家に妖怪が出たからね。こんな事態は24年前のある事件以来のことなんだ」

「24年前のある事件？」

「雄山の式である君になら話しても問題ないか…その事件は大和優一っていう僕達の父の兄、つまり伯父さんに当たる人が死んだ事件さ。その人は物凄く優秀な陰陽師でお祖母ちゃんからも期待を寄せられていた。だけどそれは偽りの姿でしかなかった…」

「どういう事？」

「皆が期待していた大和優一はドツペルゲンガーだったのさ。本当の大和優一はドツペ

ルゲンガーに消され、既に亡くなっていたんだ。もちろんその血を引いていた子供達もドツペルゲンガーに殺されていてそのドツペルゲンガーの仲間が代わりを務めていたんだ。それが発覚したのが24年前で、以来、妖怪が勝手に動くことが出来ないようにしているのがこの大和宗家つて訳。だから君のような式でない妖怪が進入でもしようものなら警報が鳴り続けるって事」

「へえ〜」

東堂はそれを聞いて感心すると、雄大がそこに割り込んできた。

「それは少し違うな」

「え？ でも大、お祖母ちゃんから聞いた話だとこんな感じだったよ？」

「伯父上は24年前、ある人間に殺されるまでしつかりと生きていた」

「な、何だつて!? お祖母ちゃんから聞いた話と全然違うよ!」

「24年前の事件、通称『ドツペルゲンガー事件』の真相はドツペルゲンガーを犯人にでっち上げることである人間を生かすようにし、かつ伯父上の名誉を守るようにしたからな。違っていて当たり前だ」

「ある人間つて…?」

「その人間はまだ赤ん坊でしかないから名前などなかった…だが後にこう名付けられた」

そして雄大の口からとんでもない人間の名前が告げられた。

「その赤ん坊に名付けられた名前は大和勇姿。私達兄弟の末弟だ」



24年前の8月初期。当時29歳の年齢にして陰陽師協会の会長と大和宗家当主を務めていた大和優一。そのあまりの強さに陰陽師史上最強とまで言われており、妖怪達
が恐れ慄いた。そんなある日のこと。

「兄^{はしめ}さん、ちよつといいかい?」

「どうした?」

雄山達の父である優一の弟が優一にとあることを依頼してきた。

「どうしても今度僕の子が生まれてくる日に丁度一ヶ月の出張でいないんだ。そこで兄
さんに僕の代わりにその子供が生まれるのを見届けて欲しいんだ。お願い出来るかな
?」

「それなら俺が代わりに出張した方が良いんじゃないのか?」

「それも考えたんだけど兄さんが行くと周りの仲間が萎縮しちゃうというか、白い目で
見られるというか、とにかく色々な理由から僕が行ったほうが適任なんだよ」

雄山の父親とは思えない程、空気が読める男であった。

「…確かにそうかもしれないが」

「それに兄さんばかり負担をかける訳にもいかないよ……僕の仕事も兄さんが片付けちゃったし」

「そう言われると……まあそうかもな」

「だからこれ以上、兄さんの負担をかけない為にも僕は出張に行きたいんだ」

「出張行きを主張する弟……プツ」

優一は雄山同様に親父ギャグが大好きな人間であり、それを聞く人間はだいたい硬直してしまう。

「……これさえなければ完璧なのに」

「まあ良い。とにかくお前の子供が生まれるのを見届ければ良いんだろ？」

「ああ。こんなことを頼んで済まない……」

「何、容易いことだ。ましてや断る理由も特にあるまい」

「それじゃ行つてくるよ兄さん」

雄山の父はこの時兄に感謝し、笑顔で出張に行った。しかし、二週間後彼は何が何でもその子供が生まれるのを見届けるべきであったと後悔することになるのは知らなかった。

二週間後

急遽帝王切開をすることになり赤子が生まれる予定が早まった為、優一は雄山の父

に変わってそわそわと慌ただしく待つ。流石の彼といえどもこういったイレギュラーの事態には慣れていないのだ。

「貴方、落ち着いて…」

優一の妻と息子がそれを宥めるも優一は冷静ではられない。

「落ち着いていられるか。あいつに代わって俺がここで待っているんだ。もし無事に生まれなかつたらあいつに合わせる顔がない…！」

「貴方…」

「父さん、僕の蘇生術なら万一死んでも大丈夫だよ。生き返らせてあげるから」

優一の息子は優一同様、陰陽師であり期待のポップとして大和一族から見られていた。しかし本人の戦闘能力は父に及ばず、挫折しかけたが後方支援担当として活動している。

「何を言っているんだ…それを使わない方が良いに決まっているだろ。違うか我が息子よ」

「それもそうだね」

そんな家族の団欒を過ごしながら赤子が生まれるのをただ待つ優一。そしてその時が来た。

「グガアアアッ！」

そこから発声したのは産声などという可愛らしいものではなく雄叫び。

「妖怪か!？」

手術室に入り込むとそこには身長70cmほどの小鬼ゴブリンのような化物が血塗れになりながらも立っていた。

「なっ……!」

優一はそれを見て驚愕する。といつても小鬼そのものではない。問題はその小鬼のへその緒が生まれるはずの母体と繋がっていたからだ。

「ま、まさか……あれが赤子っていうのか!？」

いくらなんでもあり得ない。だがそうでもないと母体のへその緒が繋がっている説明がつかない。そう思考していると微かに声が聞こえ、耳をすます

「お、お義兄さん……?」

「加奈美さん無事か!? 今へその緒を切ります!」

そう言つて優一は空掌でそのへその緒を切る。すると小鬼が優一を攻撃した。

「ぐっ!」

優一は咄嗟に気や霊力を込め防御したがそれが無効化されてしまい、小さな悲鳴をあげる。

「ヒャハッ!」

優一の苦痛に耐える様子を見た小鬼はまるで道具を得た子供のように笑い、はしやぐ。

しかしこれは優一にとって都合が良かった。相手は気や霊力も無効化してしまう上に自らの霊力や気の量はおろかパワーすらも上回る化物だ。もしこんな化物を外に出してしまえば自分の家族は当然のことであるが大和一族はおろか陰陽師協会も危うい。その為には少しでも気を引き、牽制する必要がある：そう考え足を引きずりながら、ゆつくりと詰め寄る。

「貴方、一体何が…」

「馬鹿、来るな！」

その瞬間、小鬼が笑みを浮かべ、優一達の家族の元までジャンプをする。それに対応しようにも優一の足は小鬼にやられ動けない。

「ニヒッ！」

小鬼が笑い声を上げた次の瞬間、妻と息子は殺されていた。ほんの一瞬でしかない。その僅かな間に二人は殺されてしまった。

「あ、ああ……！」

その事実が優一の目から涙を流す。一体どれだけ大切に過ごして来ただろうか？それが僅かな時間で失ってしまった。その事実のみが優一の頭を駆け巡る。

「ウヒヒヒッ！」

優一が悲哀に暮れ、膝をついているのを見飽きてしまった小鬼はその場から脱走した。



「それで優一さんはどうなったんですか？」

「その後、伯父上はすぐに立ち直ってイサムを追いかけたが時遅し、見つけた頃には既に数十人の犠牲者が出たそうだ」

「そんなに…？」

「たかが小鬼と違って油断していたのが原因だろうな。だが実際には鬼の弱点である炒豆どころか霊力すらも効かない。それならまだ対処出来たかもしれないがイサムの体質は不幸にも…」

「僕と同じ『術・能力無効化』の体質の持ち主なんだよね…」

「そうだ。イサムは陰陽術、魔法、それから波動、チャクラ、超能力など様々な科学では証明できないものを無効化してしまう『術・能力無効化』の体質の持ち主だ。それもON・OFFの切り替えも可能な特異体質だ」

「それじゃあ倒しようがないじゃないですか！」

「いや一つだけある…散々ヤマに見せられただろう？」

「もしかして空掌ですか?」

「当たり前だ。空掌は陰陽術や魔法などとは違い、科学的に誰でも実現可能と証明されている体術。故に『術・能力無効化』の体質の持ち主であつても効くようになってゐる」東堂は雄山が放つた空掌の事を思い出した。鴨川の時では鉄砲のように扱い、説明した光景を目にしたせいかわれが理論上可能なかを疑つてしまふ。

「う〜ん…あれが体術なのかさておき、とにかくその体質に効いたんですね?」

空掌が体術であることに甚だ疑問に思うが、そう仮定して話を促した。

「それで伯父上は途中で合流したお祖母様と共に追い詰めると空掌で気絶させ、その小鬼の処分をすることになった」



「イギヤア!」

小鬼が叩きつけられ、鈍い鉄の音が響く。

「はーっ…はーっ…」

その小鬼と対峙した優一は息を乱し、腹から血を流しながらも、小鬼を気絶させた。「やれやれ…やつと大人しゆうなつたか」

その隣には雄山達の祖母にして優一の母である春が腕を後ろに下げた。

「お、お袋? 何をするつもりだ? まさか殺す気なのか?」

「しかし放っておけばいずれ大和一族の障害となり得る…今この場で殺すしかあるまい」

「それじゃ、あいつになんて言えばいいんだ!? あの小鬼はあいつと加奈美さんとの間生まれた子供なんだぞ！」

「適当に死産したと言っておけばよからう。元々三つ子で生まれるはずの子供達のうち一人が異常なまでに強大で加奈美さんから送られてきた栄養のほとんどを其奴一人が吸収してしまった。故に他の二人は分裂を起こしてしまい、三つの魂は一つの魂へと変わってしまった…そうして生まれてきたのがこの小鬼じゃよ。もしこんな小鬼を育てるとなれば毎日が死と隣り合わせとなる。それを一族全員に強要させる覚悟はあるのかえ?」
「はしめ」

「俺にはそんな覚悟はねえ」

「じゃろう? だつたらせめて儂が殺してやろう」

春が小鬼を投げ、腕を後ろに下げ空掌を放とうとする。

「だが！」

優一は春の腕を掴んでそれを止めた。

「俺はそいつを無力化する力を持っているし、この場を収める方法も知っている」

「言うてみい」

「それは…俺がこの小鬼が暴走しないようにありとあらゆる力が出ないように封印する！」

「バカなことを言うんじゃないよ！ アホツタレ！ その小鬼は裕二と同じく『術・能力無効化』の体質の持ち主。空掌で封印したとしても一日で封印が解けてしまうわ！」

「奴の身体そのものを封印する要となれば何一つ問題ない」

「一、まさか死ぬ気か!？」

「死ぬ気も何も俺は血を流し過ぎた……なあお袋、あんたが倒したのは大和一族の人間達に化けたドツペルゲンガー達だ。あんたは俺を始めとした大和一族に化けた幾多のドツペルゲンガーから勇姿を守ったんだ」

「いきなり何を言っておる!？」

「勇者の勇に姿で勇姿…いい名前だろ？」

「そんな遺言みたいな事を言いおって…！ 死んだら儂は許さんぞ！」

「これが遅れてやって来た反抗期って奴だ。許せお袋…弟を宗家当主に推薦してくれ」

そして優一は春を吹き飛ばし、勇姿の封印をし終えるとその生涯を終えた。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「その後、伯父上の遺言に従ってお祖母様はイサムに殺された被害者全員をドツペルゲンガーとして処分したことを発表し、伝説的な英雄となった」

「…それが『ドツペルゲンガー事件』の真相なんだね」

「そうだ。伯父上は自らの息子や妻が犠牲になってもイサムを殺さなかった…今となつてはわからぬことだが伯父上は父上に自分の息子が伯父上の家族を殺したという罪悪感を残さないようにしていたのかもしれないし、父上に大和宗家当主の座を譲るようにお袋に告げることで家中を纏めようとしていたのかもしれない」

「でも結局、大和一族だけでなく陰陽師協会の人間達にも疑心暗鬼の心が生まれ、僕の婿入り先だった九条家にも影響したよね」

裕二の言う通り、その事件で影響したのは何もプラスの影響だけではない。むしろマイナス面が目立った。特に多数で妖怪達と戦うチームは裏切るのではないかという疑心暗鬼によって陰陽師協会が弱体化した。

「親父はそこから裏切り者を炙り出して腐り果てていた大和一族、陰陽師協会を立て直したんだ。親父も大したもんだ…」

割り込むように口を挟んだのは三人ではなく気絶している矢田を背負った雄山であつた。

「ユーザン先生？」

「よっ、東堂無事か？」

雄山は軽く挨拶を交わし、矢田を降ろした。

「なんとか…」

「雄山、ひよつとして『ドツペルゲンガー事件』の真相を知っていたの?」

「ああ…俺が20になったちようどその日に知らされた。師匠曰く見た目を除けば余りにも伯父貴に似ているとか、そんな理由でな」

俺は伯父貴ほどの頭も素質も持ってねえよ、と付け加えて雄山は苦笑した。

「そうか…私よりも早く知っていたのだな」

「大兄貴はいつそれを知ったんだ?」

「私は当主に任命された時にお祖母様から知らされた…しかしドツペルゲンガー事件の真相は余程のことがない限りお祖母様から口止めされている」

「それを破ると?」

「教える理由はない。だがイサムはすでに強硬手段を取り始めた。ならばイサムを悪とし、イサムを保護する奴らを孤立させた方が私としては都合がいい」

イケメン王子のような整った顔立ちの雄大が腹黒い笑みを浮かべると東堂が見惚れてしまう。

「一斉掃除つて訳か…だが大兄貴、ここに妖怪達の群れがやってくるのは何故だ? 裏切り者がいるにしたつてこの数は異常だ」

「妖魔連合会の残党ではないのか?」

「でも妖魔連合会の元幹部達は全員死んだって勇姿が言っていましたよ?」

「東堂、それは本当か!？」

その情報を聞いた雄山は大声を出し、東堂を見つめる。

「ええ、後は下っ端を掃除すれば終わりとも言っていましたから間違いありませんよ」

「妖魔連合会の元幹部達でないとするなら、裏で糸引いているのは陰陽師協会か?」

「あるいは勇姿一派か、それとはまた別の勢力…どれも考えられるけど、取り敢えず尋問から始めないとね」

裕二がそう言つて一匹の妖怪を取り出すと雄大、雄山は笑みを浮かべた。

「どうやら皆考えることは一緒つて訳か」

「そのようだな、雄山」

雄山と雄大も妖怪をそれぞれ一匹ずつ前に出す。

「やっぱり僕達つて兄弟なんだね」

「うむ」

裕二の言葉に雄大が頷くと、三兄弟はそれぞれ尋問を始めた。

第33指導 尋問後



「おつす、戻ったぞ！」

しばらくすると雄山が戻り、そう告げるとそこに居たのは尋問を終えた雄大と裕二、それに雄山が連れてきた三人組であった。もつともその内二人はまだ眠っており、起きているのは東堂のみである。

「ヤマ、遅かったな」

「いつものことですよ？ 雄山が遅いのは」

「それよりか報告しようぜ。皆揃っているんだ」

雄山がそう促すと雄大達はそれに頷いた。

「それもそうだな。私のところは妖怪達がただ暴れるように命令させられていたようだ。少なくともオーバーなどによる薬によつて暴れていたという訳ではなかった」

雄大は尋問らしい尋問をしていたのかノートにその内容をまとめており、スラスラと報告する。

「なるほど流石大兄貴だ。こっちはオーバーかどうかはわからねえが鉄砲玉を捕まえた

みたいでな……敵の親玉も知らなかったからつい浄化させちゃった」

逆に雄山は尋問らしい尋問をした形跡はなく、顔だけはすつきりとしており、メモなんてものはどこにもないことから拷問に近い尋問をしていたのだろうと推測出来る。

「何やってるのさ、雄山……この分だと僕が一番収穫が大きいかな？ 僕の担当した妖怪は当たりといえれば当たりで、この敷地内から1km離れたところにアジトがあるらしい」

「アジト？ 具体的には？」

「日本セル研究所」

「日本セル研究所だと？ それは本当なのかヒロ」

「僕も信じられないよ。だけど齒の神経にフッ酸をかけてようやく吐いたんだ。間違いないよ」

「可愛らしい顔して俺よりもエゲツないことするなよ……裕二」

雄山が裕二がやった拷問のエゲツなさに畏怖する。何故ならば齒の神経にフッ酸と言えば金的、あるいは出産の痛みを凌ぐほどの痛みであるとの同時に人間が経験する痛みの中で最も強烈な痛みである。むしろ妖怪達がなまじ生命力がある為に、その痛みはより強烈なものとなる。

「日本セル研究所ってそういえばユーザン先生が大和財閥に喧嘩を売ったとか買ったと

かそんな事を言っていたような気がするんですけど…詳しく教えてくれませんか？」

「日本セル研究所の所長が大和財閥をスポンサーに頼もうとしたは良いが失敗し、逆恨みして妖魔連合会と手を組んで西智都市学園を乗っ取って大和財閥を混乱を起こさせようと企んだって訳だ。ちなみにオーバーを作ったのもこの日本セル研究所だ」

「うわあ、わかりやすい！」

「しかし、日本セル研究所と言われても大和一族の力を持つてしてもどこで研究しているのかわからず、机上の空論ばかりだという噂しか流れてこない。先代の時に専務達が大和財閥を日本セル研究所のスポンサーになるのを止めたのもそれが原因だ」

雄山と雄大の解説に東堂は理解し腕を組んだ。

「つまり今、あるはずのないものがあつたつてことが裕二さんの尋問でわかつてユーザン先生達が驚いている。…肝心なのはそれがどこにあるかですよ」

「今鳥達がそれを捜している」

「鳥…ああ、ヒロの式か。確かに鳥ならば見つけられるが、大丈夫なのか？」

「雄大さん、どういうことですか？」

「鳥は頭が良い上に飛行能力も高いし、その上住宅街に紛れ込んでも何一つ不自然じゃない…それは理解出来るな？」

「それがいったい何だつて言うんですか？」

「この周りは人工物は大和宗家の物を除けば少なく住宅街なぞありもしない。故に敷地内から離れば自然のものが多くなり鳥がそこにいる事自体が不自然になり、アジトを見つけたとしてもその鳥の連絡が取れなくなると心配しているんだ」

「うん…：なかなかわかりにくいです。もつとわかりやすい例をお願いします」

「ヒロの行動を例えるなら部下達をサハラ砂漠に人工のプールを作らせるようなものだ。オアシスの水で利益を得ている連中、つまり日本セル研究所からしてみればそれは面白くないことだ。当然潰しにかかる」

「なるほど、そういうことですか」

「そういうことだ。その現場で働いている鳥達に害が及び、下手をすれば帰って来れない何てこともある」

「それが唯の鳥達ならね。僕の育てた鳥達は普通の餌にロティンを始め様々なサプリメントを加えた上で訓練しているんだ。鷹や鷲の姿をした妖怪達相手に一対一で勝てちゃうくらいには強いんだよ」

「鷹と鷲の違いって何ですか？」

「大きさだ。鷹の方が生物学上小さいとされている…：東堂、半年前に教えたのにもう忘れたのか？」

裕二が答えようとすると雄山が口を挟み、東堂をジト目でみる。

「半年前じゃ覚えてませんって……裕二さん、鷺の姿をした妖怪達はともかく鷹の姿をした妖怪ってどんなのですか？ 鷹の方が小さいんでしょう？」

「基本的に鷹の妖怪は体長1.7m前後と定められているんだけど鷺の妖怪は体長2.0m以上を超える妖怪と定められているんだよ。つまり、鷹の妖怪が成長、あるいは突然変異による進化をすると鷺の妖怪になるってことだね」

そんな雑談をしていると裕二の懐から電子音が鳴り始め、ノートパソコンを開く。

「おつ？ 連絡が来たみたいだ。どれどれ……なるほど。皆これを見てくれ」

ノートパソコンを開き、画像を見た裕二が頷き、全員にそれを見せる。その風景は苔を生やし黄緑色に染まった大樹と大地、葉を水の上に浮かばせ風情を思わせる湖。一言で表すならば大樹海であった。

「おいおいマジか」

「これならば確かに、建築物があるとは思ってもよらず見逃してしまおう」

雄山と雄大は二人で頷き、腕を組む。それはどこか美しさを感じさせる樹海を見て、感心したのでなく納得した頷きであった。

「あのう、どこに建築物なんてあるんですか？」

これだけ緑が鮮やかに映る樹海に建築物なんてものはありはしない。あつたとしたらずぐに気づくだろう。そう結論付けた東堂が尋ねると雄山が指を指した。

「……だ」

雄山が指を差したところは湖に浮かんでいた葉であつた。

「ええ？ これですか？」

意味がわからず、雄山に再び尋ねると確かに頷き、それが建物だと言葉をなくして語る。

「普通大木から落ちた葉は水の上に浮かぶ。だがこれだけは別だ。これは大和宗家の周辺しかない桜の葉で水につけるとスポンジのように水を吸収してしまう性質がある。その結果水よりも重くなり、沈んでしまうのだが……この葉はまるで土の上にあるかのように不自然に浮いている」

雄山が何も言わないので雄大が代わりに答えると東堂は納得した。

「でも何でその桜の葉が……？」

「烏達に持たせたんだ。あれは水に馴染んだ魔力の質を測る為に使われる物なんだけども、こんな用途で使うとは思わなかつたよ」

「じゃあ行きましようよ！ 今すぐに！」

東堂の意見に全員が首を振った。

「どうしてですか!？」

「そこは通称還らずの森と呼ばれる森で、その場所には簡単に辿り着けないんだ。しか

も必ず三人以上で一斉に行く道が変化して迷うようになっていゝ。鳥達にもこの森に入るときは二匹で行動するように伝えていゝしね」

「…でもあの妖怪達は一斉に来ましたよね？ 還らざる森からやってきたとしたら一斉に来るなんてことは無理なんじゃないんですか？」

「東堂、確かにあの妖怪達が一斉に来ることは不可能だ。だが問題はそこじゃない。最初に大物を始末しその後小物を始末する。妖魔連合会がそうだったようにこういう組織で動くような幹部の連中は大体小物とは別に動く。幹部が動くとしても鴨川のような末端の幹部だ。それはあまり気にする必要はねえ…俺達の目的は大將首だ。龍造寺達幹部亡き後の妖魔連合会が鳥合の衆となつて全滅したことから対組織戦は大將達を如何にして片付けるかで決まるんだ。その為には多人数で包囲するのが良いんだが…還らざる森の効果によつてここに三人以上が一斉に行つても一人以上が辿り着けないようになっていゝ。つまりこのまま行けば自殺行為も良いところだつてことだ。妖魔連合会を潰した時も準備してから潰すことが出来たからな」

「た、確かに…」

東堂は頷き、雄山が龍造寺対策の為に持ち込んだ爆弾を思い出す。龍造寺が非超能力者であれば間違いなくあの爆弾で始末出来ただろうし、あの爆弾を使うことで能力者であるということが分かつたことで持ち込んで不正解ではなかつたのは確実だ。

「そう言う訳だから、東堂すぐに支度しろ」

「何がそう言う訳なんですか？」

「確かに還らずの森には三人以上で行けはしないが、二人までなら大丈夫だ。俺と東堂が先行し、日本セル研究所の様子を見て拠点を作る。その後は裕二と長門、大兄貴と矢田の2組が時間をズラして日本セル研究所前で俺達と合流して日本セル研究所を潰すという訳だ」

「…普通に裕二さんと雄大さんのペアが合流して、後の二人は置いていけば良いんじゃないんですか？」

「置いていく訳にはいかねえよ。あの二人が一人前だったらそうするかもしれないがまだあの二人はひよっこも良いところだ。勇姿一派の連中に人質を取られたら流石にどうしようもない。それだったら兄貴達に預けて実戦に行かせた方が良い。兄貴達の戦いも見れかつ、身も守れるんだからあの二人からして見れば一石二鳥だ」

「そう言うことですか。わかりましたユーザン先生…それじゃあ日本セル研究所に行きましよう！」

「そうだな」

雄山と東堂はそう言つて大和宗家の屋敷から出て行き、還らずの森へと向かった。

第34指導 還らずの森で



キラーマウンテンと呼ばれた陰陽師と吸血鬼が足でその土を噛み締め、歩く。

「ユーザン先生、何で車で行かないんですか？」

吸血鬼の東堂美帆が陰陽師にそう尋ねる。

「わかりきったことを言うな。車で行くには狭すぎる。いくら俺が車のテクがあつてもあの狭い道で目的地に突っ走るのは無理だ」

雄山はバツサリと東堂の意見を切り捨て、首を横に振る。

「でもユーザン先生、あの広い道に車のタイヤ跡がありますよ？」

「あそこはぬかんている。水陸両用車ならともかく、スピード重視の俺の車じゃ無理だ」

「無理無理いつてないで何か車で行く方法はないんですか!？」

「チツ、仕方ねえな。これを使うか」

ヒステリーに叫ぶ東堂を見て渋々雄山が取り出した物は絨毯だった。それを見た東堂は目を光り輝かせた。

「まさか魔法の絨毯？」

「ああ。裕二が開発した魔道具の一つ。操縦者の魔力を使って動かすくせして重くなるほど操縦者の負担も大きくなるから余り使いたくねえんだよ」

響めつ面で答え、雄山は紫色の液体が入ったペットボトルを東堂に渡した。

「これってぶどうジュースですか？」

「残念だがぶどうジュースじゃない。ちなみに言っておくがワインでもないぞ。こんな形状のペットボトルのワインなんて聞いたこともねえだろうが」

「うっ！」

東堂は自分の言おうとしていたことがバレ、縮こまる。

「こいつは大和財閥が開発した魔力回復薬のMP回復剤だ。こいつを飲むと名前の通り魔力を回復させることが出来る。表の世界で例えると栄養ドリンクのようなものだな」

「そう考えると陰陽師協会ってブラックなんですね」

「ブラックなものか。一回あたりの依頼料が大和財閥の証券部門の月給よりも高い金で払われるんだからまだ良い方だ」

「物凄く高いってことはわかりますけど、そのお金はどこから払われるんでしょうか？」

余程の金持ちじゃないと陰陽師協会に依頼するのは無理じゃないですか？」

「陰陽師協会を通せば大和財閥が依頼者が本来払うべき依頼料の99%も負担してくれる。その代わり大和財閥は陰陽師協会に大和一族では請け負えない依頼を頼んで

いる」

「インサイダー取引とかですか？」

「……」

「えっ、マジで？」

冗談で言つたつもりと言葉だったが雄山が黙り込み、東堂は顔を青ざめる。もしこの秘密をばら撒いてしまったら自分は大和一族に物理的にばら撒かれることになる。その責任の重さを感じ、足が冷え、指が悴む。その様子はまさしく恐怖に震える女子高生そのものであった。

「そんな訳ないだろうが」

「えっ?」

東堂が驚きの声を上げる。極悪人のような顔をしている雄山にそう言われ戸惑ったのか雄山なりのジョークであったこと、あるいは別のことで驚きの声を上げたのかは東堂にはわからない。

「陰陽師協会の陰陽師の魔力や霊力を抽出して魔力回復薬にしてそれを売りさばくんだよ」

「そんなことで儲かるんですか？」

「儲かるに決まっている。一昔前に中東の国々とか石油を掘り当てて金持ちになつただ

ろ？ 大和財閥も同じだ。大和財閥は他のところじゃ真似出来ない良質かつ経費も抑えられるような回復薬を作るから今じゃ回復薬Ⅱ大和財閥が作った回復剤という認識がある。つまりほつといても金になるんだよ」

「それだったら何故雄大さんは会長になれなかったのかますます不思議ですね。今の会長さんって雄大さんに遅れをとって万年二位だった人でしよう？」

「会長を舐めんじゃねえ。会長は確かに大兄貴に遅れを取って万年二位となったがその差はいずれも僅差だ。俺からしてみればあの二人は神の領域に達している。師匠は先々代会長つまり伯父貴に似ているのは俺というが才能という意味じゃあの二人こそ伯父貴の後継者そのものだ」

「そ、そこまで言います？」

「ああ。そうでなきや会長が伯父貴同様20代で陰陽師協会の会長になれる訳がない」

雄山がそう告げるも東堂はイマイチピンと来ない。

「そもそも20代で陰陽師協会の会長になったのって何人いるんですか？ その基準がわからなきや凄いととは思えませんかよ」

東堂は歴代の会長どころか今の会長の顔を見たこともない。故に何がどう凄いと思えるかはつきり言ってわからなかった。陰陽師協会をあまり知らない者からして年齢ほど判別しやすいものはないが逆に言えばそれだけで判断出来るということだ。

「伯父貴と現会長のたった二人だけだ。30代以下での就任を含めると親父や初代も入るがそれでも4人。それ以外はみんな40代以上だ」

「話を戻すぞ。確か会長が大兄貴に勝てた理由だったな」

雄山が話を戻すと腕を組み、その場にあつた切り株の上に座る。

「実力はほぼ拮抗しているが故に何か一つ負ける要素が加わると一気に崩れる。それは精神面でも同じだ。前にも言っただろうが九条会長は大兄貴が精神的弱つているところを見計らい、一気に畳み掛け陰陽師協会会長に就任することが出来たんだ」

「それじゃ今立場が実質逆転しているのもそうなんですか?」

「その通りだ。大兄貴が会長を傀儡に出来ているのも会長がすい臓癌で弱つているに過ぎない。むしろ会長の座を明け渡さない会長を褒めても良いくらいだ……万が一、会長のすい臓癌が治ったとしたらすぐに元通りの会長と大兄貴の一騎打ちの状態に戻る」

「でもそれはないんですよね。九条会長さんは雄大さんを会長にする気は無さそうだから勇姿一派を後押しして勇姿さんを会長に就任させようとするんじゃないんですか?」

話を聞いていると会長さんは大和一族よりも雄大さんを毛嫌いしているようですか
ら」

「よくその発想に気づいたな。なるほど兄貴達に連絡しねえとな」

「その必要はない」

雄山が端末を取り出して操作しようとするのと地を這うような低い声はその場に響く。その声の正体を雄山は知っていた。

「勇姿……!!」

そう、雄山の弟である勇姿であった。

「到来山の後始末を俺に押し付けるとはやってくれたな。雄山」

「褒めるなよ」

「まあいい。ここから先にある施設は何だかわかっているんだろう？」

「日本セル研究所」

「そうだ。そこは俺の故郷でもあるんだ」

「何を馬鹿なことを言っているんだお前は？」

勇姿の故郷はあくまでも大和宗家。それは春がきちんと教育し、しっかりと認識させた。だがそれにもかかわらず勇姿が日本セル研究所が故郷であることを断言したので雄山は混乱してしまう。

「そもそも俺は大和勇姿であっても雄山の弟の大和勇姿じゃない。真実が知りたいなら日本セル研究所まで案内する」

「案内しろ。勇姿」

勇姿の出した提案に雄山は即答で答えた。

「ユーズン先生、罨ですよ！ それにそんな情報を集めたところで何の意味もありませんよ！」

あまりの雄山の返事の早さに東堂は却って冷静になり、雄山に突っ込む。だが雄山は至って真剣に考えていた。

「東堂、確かにお前の言う通りだ。だが俺達はどのみち日本セル研究所に行かなきゃいけないんだ。罨であることは百も承知だがそれ以上に弟の同姓同名のこいつが何で弟の姿をしているのかが気になるんだよ」

「そんな、そんな理由ですか!？」

「おうよ」

東堂は雄山のあまりの身勝手さに頭を抱えてしまう。確かにこの世界に首を突っ込んだ自分も人のことは言えないがまさか雄山がここまでフリーダムだと思えなかったのだ。

「勇姿、この吸血鬼は無視して案内してくれ」

「良いのか？」

「俺達がお前についていくのは権利だ。罨とわかっていても引き返さずに行くかどうかなんてものはてめえ自身の責任だ。それにお前も気づいているとは思うがこの吸血鬼はヘツポコだ。妖力のよの字も感じさせないような奴に罨だとわかっている場所に行

かせようが行かせまいが同じ結果だ」

「確かにその吸血鬼は現時点では無力に等しい。だが雄山、お前が妖力を封印しているだけで実際は大妖怪並みの妖力を持っている。封印しているのはその力があまりに強大過ぎて扱えないからだ」

「えっ!? でも封印が解かれた時に妖力で爆発する爆弾を渡されましたけど何も起きませんでしたよ? どういうことなんですかユーザン先生!」

「師匠に鍛えられたから魔力も増えたんだ。それ以外に理由なぞ知るか」

「て、テキストすぎる……!」

「なるほど確かにそれもそうだな。あの婆さんならそういうこともしなくもない」

「それで納得しちゃうの!? 二人ともおかしい……」

確かにあの修行でキツかったがああの程度の修行で魔力が膨大になるかと言われれば否だ。そもそも雄山自身が魔力が膨大すること自体否定していた。

「おかしくねえよ」

「それだけあの婆さんの潜在能力を引き出す力は優れている。……ついて来るならついて来い。来たくなければ来ないでもいい」

勇姿が背を向け、ぬかるんでいる道を移動すると雄山達もその後ろを追いかける。ぬかんだ道の先にあったものは例えるなら千年樹、あるいは世界樹と呼べそうな程巨大な

大樹であり、東堂の目からは涙が溢れ出てしまうほど神秘的なものであった。

第35指導 正体



「まさかあんな大樹が扉になっていたとはな……驚いたぜ」

「日本セル研究所はそれだけお前達を恐れた。何せ情報が少しでも漏れれば日本セル研究所は潰れてしまうだろうからな」

「どういうことだ？」

「人間誰しもそれを悪だと思えば悪だと決めつけてしまう。特にその人間が本当に正しいことをし続けてきたら尚更だ」

勇姿達が大樹の中を降りていくと広場に着き、そこには名前の書かれた石碑がいくつも置いてある。

「えっ!?!、これって……!?!」

東堂が石碑の名前を見て目を見開き、雄山にそれを見せると彼も目を見開いた。

「なんでこんなところにあいつ等の名前があるんだ……!?!」

二人が見た石碑には五十嵐泰造、鴨川慶次、龍造寺時夜等妖魔連合会のメンバーの名前が刻まれていたからだ。



「日本セル研究所は現在では理解されない非倫理的な実験を数多く実行してきた。ハツカネズミなどの実験動物が犠牲になったとしてもそれに同情したりするものは少ない。ハツカネズミの命は人間の都合の良いデータを取る為に弄ばれるのが日常的であり、当たり前なことだからだ」

勇姿が語り始めると雄山達はそちらに振り向くと勇姿が歩き始め奥へと進んでいき、それに伴いついていく。

「本来、日本セル研究所は身体能力を高めかつ副作用のないドーピングを開発する組織だった。表の世界ならばともかく裏の世界でドーピングを使ったところで倫理的には大した問題ではない。むしろ問題は副作用。少しでも副作用をなくす為に日本セル研究所はドーピングを開発し続けて来た。ドーピングを開発するには細胞の働きを研究しなくてはならない。そこで日本セル研究所は様々なスポンサーを求め、各地を回るが所詮ドーピングはドーピング。スポンサーになる者は皆無であった……」

「親父の時代の時に日本セル研究所はすでにあつたってことか?」

「もつともメンバーは数人であり、ほとんど大学という同好会に近いものだったから知らないのは無理もない。公式に設立したのはここ数年前の話だ」

そして勇姿が「話を戻す」と告げながら奥の扉の鍵を開けた。

「日本セル研究所は細胞を使って実験をするが、ハツカネズミ等の特定の細胞しか使えないが故に参考にならない上に脳にどんな影響を与えるかも不明だ。大麻や覚せい剤のような中毒性等があつても困る。そこで日本セル研究所は遺伝子を弄り、ハツカネズミから人間を創り出そうとした……」

「そんなことが可能なのか!?!」

「理論上は可能だが出来てもすぐに死んでしまう。しかし日本セル研究所は諦めず試行錯誤し、どうにか人間に限りなく近い生物を生み出す。それが大和宗家でお前達を襲った怪人や妖怪達、そして妖魔連合会の正体だ」

「何だと!?!」

雄山はそれを聞き、日本セル研究所が何故表舞台へと出なかつたのか理解してしまつた。日本セル研究所は妖怪達を人工的に生物兵器を創り出していたということになる。もしそんなことが早い段階で情報が伝わっていたら真つ先に潰していた。

「経費が抑えられ、食事も宙にある魔力や妖力のみで済む知的生物だ。日本セル研究所はその妖怪達を使いドーピングの開発に成功する。過剰な力と言う意味でつけられたそのドーピングの名前はオーバー……お前達も学園都市に居た以上知っているはずだ」

「ああ、だがオーバーは妖怪を暴走させるだけの欠陥不良品。その次があるんだろう?」

オーバーの効力は確かに優れてもいたが妖怪専用のドーピング。妖力を暴走させた

ことで知能を失い、狂気を生み出すといった欠点もあった。東堂がそうだったよう予想がついていた。

「日本セル研究所はオーバーの欠点に気づき、次の妖怪達を創り出す。それが龍造寺時夜や五十嵐泰造といった妖魔連合会の大幹部達のような能力持ちだ」

「あいつらもこの出身だったのか……!!? それじゃお前は勇姿の姿をした妖怪なのか!!?」

「落ち着け雄山。第二世代、つまり能力持ちを創り出した理由は能力持ちであれば高度な人間に近いという根拠があった。その第二世代を実験動物にしてドーピング開発を続けるとある問題点が生じる……それは気性難だ」

それを聞いて雄山達は思い当たる部分があった。あれほど龍造寺が短気でかつ失敗に厳しいのはそれが理由だったのだと確信し、頷いてしまう。

「無理に能力持ちにしたせいかどいつもこいつも気性に難がある奴らばかりで、ドーピング開発も碌に出来ない状況となった。第二世代の創造を中止して第三世代の開発に取り組んだ」

「その第三世代ってのは何だ?」

「これだ」

勇姿が壁のスイッチを入れるとそこに現れたのは緑の液体と人間達をガラスケース

に入れたものである。

「これって人間？ でもまるで死んでいるみたい……」

東堂が抱いた印象は死人のような人間。見た目こそ普通の人間であるが雰囲気はゾンビや屍のようなものであり、触れると凍ってしまいそうなくらい寒気がする。そんな印象であった。

「これは……大兄貴達や俺？ いやそれとは別の人間か？」

屈強な強面の男もいれば裕二を女性化させたような女性もそこにある。雄山がそれらの人間を見て共通して言えたのは自分や自分の兄達の雰囲気醸し出し、感じ取っていた。

「第三世代は大和勇姿の細胞や血を元に作り上げた人造人間。本来であればクローンを作るはずであったが見てのとおり勇姿に酷似しているものは皆無だ」

「何故クローン人間を？」

「人間の身体でドーピングを開発した方が効率的だと日本セル研究所は気づいた。本来、ドーピングは人間が使うものだ。だが身体が弱い人間では実験データが取れない……屈強な男を用意する必要があった」

「それが大和勇姿って訳か」

「ボス曰く彼に献血や細胞採取をお願いしたら快く頷いてくれたらしく、そこから日本

セル研究所は大和勇姿を創り出そうとしたが先ほども言ったが勇姿に酷似したクロー
ンは作り出せなかった。何故だかわかるか？」

「技術が不足していたからか？」

「それもある。答えは大和勇姿は三人の遺伝子を42:41:i7の割合で持っていたか
らだ」

「あ……い」

東堂は勇姿が本来三つ子で生まれる予定であったと聞かされたことを思い出す。と
ころが生まれたのはたった一人。それも小鬼ゴブリンみたいな化け物である。

「大和勇姿と言う男は本来三つ子で生まれる予定だった。二卵性の三つ子としてな」

「何故二卵性だとわかるんだ？」

「これを見てわからないか？ 大和勇姿の遺伝子から創り出したというのに女性型があ
る。二卵性は一卵性とは違い性別に違いが生じる場合がある。つまり確実に三つ子の
うち二人は二卵性だということがわかる」

「それじゃなんでもうひとつの方が二卵性だってわかったの？ 二卵性でも同性ってこ
とはあるんでしょう？」

「遺伝子情報だ。専門家じゃないからそこまで詳しくは断言出来ないが人に限らず様々
な生き物が遺伝子によって成形され、その筋肉や骨格、あるいは血液型などが決ま

る。同性の双子は血液型が異なっていたということだ」

勇姿がそうボタンを押して、目の前にあるガラスケースを下げる。



「……それを知っているお前は何者なんだ？」

「俺はボス……角田所長が大和一族に復讐する為に第三世代の生物を改良して生み出された生物兵器、第四世代の14-0801号。言ってみれば日本セル研究所が送り出した刺客だ」

勇姿、いや14-0801は自分が第四世代の生物兵器であり大和一族を滅ぼす為の刺客であるということを雄山に伝えた。

「やつぱりお前のいうボスは角田だったのか。しかし刺客はともかく生物兵器だ……？ 一つの間にかそんなものを作るようになったのか？ 日本セル研究所は？」

「日本セル研究所はドーピング開発をしていくうちに究極の個体を求めるようになった。その結果第一世代から第三世代までの生物達を改良し、能力を持った大和勇姿を創り上げようとしたが失敗。それなら肉体最強の兵器を造ったのが第四世代と言うわけだ」

「肉体だけでも？ とてもではないがああ第二世代の龍造寺と互角とは思えないんだが……？」

雄山の言うことはもつともである。雄山は以前目の前にいる男と対決したがその時は鴨川などの妖魔連合会の幹部よりも強かったが流石に龍造寺ほどの力はなかった。

「そう疑うなら龍造寺を斬った空掌で俺を斬ってみろ」

「なら遠慮なく斬らせて貰うぜ」

雄山がそう告げた瞬間、右手がブレ、轟音が響き渡ると14—0801の背後にあった壁を斬ってしまう。

「それがどうした？」

だが肝心の14—0801は真つ二つに斬られるどころか傷ひとつすらも負っていない。

「前にも言ったがその気になれば俺はダイヤモンドカッターでも斬れない身体だ。大気圧の原理で斬る空掌如きで斬られるかよ」

「龍造寺よりも頑丈だっことは認めてやる。だが肝心の身体能力がお粗末だ！」

雄山は東堂にアイコンタクトを送り、封印を解除すると同時に14—0801を攻撃する。

「遅いっ！」

だが14—0801は雄山を無視して距離の離れた東堂に攻撃する。幸いなことに東堂は封印を解いたのと雄山が庇ったおかげで軽傷で済んだが雄山の方はそうでもな

い。14—0801の攻撃が雄山に炸裂した瞬間、硬くありながら生々しい音が響き渡る。

「糞が……！」

今の雄山を一言で表すならば満身創痍。身体の全身から血を流し、右腕が曲がってはいけない方向に曲がっているのが何よりの証拠だ。

「何故俺がここまで強くなったか知りたいか？ 第四世代専用のドーピングを使っているんだよ」

「ドーピングだと？」

「第四世代は大和勇姿の遺伝子を受け継いだ生物だ。それも第三世代のような生半可なものではなく完全にオリジナルと同じように三人の遺伝子を使ったコピーだ。大和一族の遺伝子、勇姿特有の遺伝子、能力者の遺伝子のそれぞれに働きかけ素質を完璧に引き出すドーピング。そいつは第二世代や第四世代以外が使うと能力に目覚めることから覚醒を意味するディサルージャンと名付けられている」

「……他の奴は使ったのか？」

「実験に犠牲は付き物。第一世代だけでも世間に公表されたら大騒ぎになるのに俺がそこまで言うと思うか？」

「そしてそこまで喋ったのは俺達を確実に仕留める自信がある……ってことか」

「違うな」

「じゃあなんだ？」

「お喋りが好きなんだだけだ」

14—0801がそう告げ、構えると雄山もそれに合わせ構え……二人の間に沈黙の
間が空く。

「……っ！」

東堂が息を呑んだ瞬間、その時は動いた。雄山は左腕を使い、14—0801は右腕
で互いに拳を作り激突した。

第36指導 経験の差

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

この勝負、何が何でも勝つ。

雄山は勇姿のクローンである1410801を視界に入れながら東堂を見ると不安げな表情が伝わり目の前にいる男に勝たねばならない。しかも右腕が骨折し使えないに等しく、相手は勇姿の潜在能力を引き出している状態であり、困難であるが故に重圧プレッシャーがかかる。

「東堂、そんな時化した顔をするんじゃないよ」

「ユーザン先生……」

「俺は負けねえ。いくら勇姿のクローンとは言え所詮クローン。経験が圧倒的に違うことを教えてやる」

「所詮クローン？ 馬鹿を言うな。優一が勇姿に封印したのは魔力や気だけでない。身体能力も1/200になるまで封印した。だがその封印も本人が対象で遺伝子上同じとは言え他人である俺はないも同然」

「それどこのスーパーな惑星人？」

東堂があまりのインフレについていけず突っ込んでしまう。

「封印がないも同然か。だがそれでも勝ち目はある。所詮クローンはクローンでしかない」

「根拠のないハツタリもいい加減にしろ」

「なら行くぜ」

雄山の左手によって放たれた空掌の弾丸を14—0801の頭に直撃させつつ、ジリと近づき、ナイフを投げる。しかし雄山が投げたナイフを弾き全ての空掌を受け止めた14—0801は雄山に近づき、接近戦に持ち込まれる。だが雄山はとにかく距離を離して遠距離で攻め続け逃げる。それを追い詰める14—0801。一進一退の攻防だった。

「ほ、本当に戦えている……」

東堂は雄山の身体が満身創痍の状態であるにもかかわらず、互角に戦える状況を見て雄山の負けないという言葉が嘘でないということを確認していた。

「(一体何が目的だ?)」

14—0801は雄山の戦闘スタイルを見て疑問に思う。というのも雄山のやることはまるで意味がない。この身体はどんな攻撃も通さない。例え大砲であっても、魔術や陰陽術であってもそれは変わらない。言わば無敵の身体であるのだ。とはいえサン

ドバッグにされるほど14—0801はお人好しでなく雄山を始末すると言う目的がある以上勇姿の身体能力を最大限に発揮しかつ、もつとも効率の良い、つまり肉弾戦で雄山を追い詰めようとしていた。

「(ならば……)」

しかし雄山が肉弾戦を拒絶し距離を取り続ける以上仕留められるとは思えない。己の身体能力を100%発揮しようにも普段の生活で力を抑え続けているせい、力を解放すれば制御が難しくなり無闇矢鱈に使うと自滅しかねない恐れがある。

作戦を変えた14—0801は力を解放し床を踏む。すると床が崩れ、警報音が鳴り響くが御構い無しに床の材質である石を掴んで思い切り雄山に投げつけた。これは昔から戦争でも使われている攻撃方法の一種、投石というものだ。極シンプルな攻撃でかつ威力が高い。故に14—0801がもつとも本領発揮しやすく、しかも威力も隕石のように破壊力がある。これを通常の間人が食らったら骨が折れることは当たり前で内臓が破裂し、確実に死ぬ。

「がっ……!!」

雄山の腹が空き、その場に倒れた。

「ユーザン先生!」

「動くな!」

14—0801は雄山を心配し駆け寄ろうとした東堂に石を投げる素振りを見せた。

「動けばお前が死ぬ。わかるな？」

「……教えてください。どうして貴方は私達と戦うんですか？」

「それはボスの命令だからだ」

「ボスって角田所長のことでしょう？ その人の命令でわざわざここに誘き寄せたんですか？」

「半分はあたりだな。日本セル研究所に誘導したのはいずれここがバレるからだ。時間が経過すれば還らずの森諸共大和一族、あるいはその息がかかった陰陽師協会の連中全員に滅ぼされる」

「その為に大和一族に第一世代の妖怪達を送ったんですか？」

「大和一族よりも手柄を立てれば出世出来ることが九条会長によって証明されたからな。悪事に走る日本セル研究所を始末すればこれ以上ない手柄だ。大和一族の息がかかっている連中は甘い汁を吸う者もいる……仲間割れを起こさせるにはこれしか手段はない」

「それじゃ何で勇姿一派だとかそんな派閥を？」

「甘い汁を吸いたい連中が無能とは限らず有能なパターンもある。そこで大和勇姿が復活したと噂を流し、大和一族のトップに立つような動きを見せれば雄大から離れ勇姿を

傀儡にするように動かしたと言うわけだ。その結果大和一族は一枚岩でなくなり、勢力図は大きく変化した」

「確かに筋は通っています。通っていますが……だったら何故貴方は半分は正解と言ったんですか？ もう半分は不正解、つまり貴方の判断でここに私達が来るように誘き寄せたつてことになります。日本セル研究所を犠牲にしてまで貴方は何がしたいんですか？」

「俺には名前がない」

「え？」

「俺の番号である14—0801と言うのは製造日。つまり西暦2014年8月1日に俺は作られた。ボスに従えば俺は名前を名乗れるようになる。そうボスに言われ続けしてきた。だがボスに従う必要もなくなった……ボスが俺に授けようとした名前が大和勇姿だとわかったからだ。大和勇姿という名前を手に入れる手段はもはや俺の頭の中で想像がついている。今となつてはボスを利用する立場だ」

「それじゃ角田所長はどこに？」

「ボスはまだ利用価値がある。そうでなければボスと呼ばん。だから教える訳にはいかない」

「龍造寺といい、お前といい、何で角田は名前をつけないんだ？」

東堂の代わりに雄山がそう呟く。

「ボスは俺達のことをゲームのデータのようにならされた存在でしか見ていない。だから区別がつけば番号だけでも充分だと考えているんだろう。鴨川や五十嵐も製造番号や種族名で呼ばれていたしな」

「そうか。勇吾、お前に聞くが龍造寺の名前をあの石碑に彫ったのはお前の指示か？」
「勇吾？」

「俺がつけたお前の名前だ」

「そうかよ……さっきの質問の答えだがイエスだ。龍造寺は第二世代の中でも気性が特に荒く日本セル研究所では失敗作と呼べる存在だ。爪も甘いしな」

「とはいえ有能であったのには違いない、と14—0801こと勇吾が続ける。

「学園都市を支配するのに失敗したとはいえ、あと少しのところまでキラーマウンテンこと雄山を追い詰めた敬意を払って俺は妖魔連合会にいる種族名や製造番号でしか呼ばれなかった奴らを自称の名前であるの石碑に刻ませた」

「それはわかったが龍造寺はお前の顔を目撃した人物について知っていたが誰だかわかるのか？」

「一々そんな通行人の顔や身分を覚えるほど俺の頭は良くない。それでも心当たりがあると言うなら九条会長に問い詰めたらどうだ？」

「会長に、か」

「もしかしたら勇姿の居場所も知っているかもしれないしな」

「勇吾、決着を着けるぞ」

「勇吾と言う名前も貰った以上ボスと一緒にいる理由はない。だがボスに洗脳されたせいか、あるいは大和勇姿という男が生真面目なのかお前を倒してからにしないと俺の気が済まない……例え愚かとわかつてもな。……行くぞ！ 大和雄山!!」

勇吾の投石が隕石のように力強く、しかも高速で雄山を襲う。だが雄山はそれに当たらず突っ込み拳を握った。

「俺に接近戦を挑むとは……!」

勇吾は驚愕し、投石を止め拳を握り雄山へそれを振るった。

数秒後、勝者が決まった。

「……何故俺が負けた？」

「だから言っただろう。経験の差だと」

勝者、大和雄山。

「ユーザン先生ーっ!! やったーっ!!」

それが決まった瞬間東堂は歓喜のあまり雄山を抱きしめ、涙を流した。

「雄山、一体どうやって俺に勝ったんだ？」

「お前が東堂と話している隙を見て俺は陰陽術を用いて三管機能が狂う超音波を流していた」

「俺の投石や俺の拳が当たらなかつたのはバランスを司る三管機能が狂っていたからか。それも俺が違和感を感じさせないほどごく僅かに」

「そうだ。お前の敗因はそれに対処出来なかつたのが原因だ。お前のオリジナル大和勇姿ならその違和感に気付いて対処をしたはずだ。自らの経験則でな。だがお前は6年弱しか生きていないから対処のしようもない」

「……トドメを刺せ。こんな事態になつた以上俺を殺して勇姿が死んだことにすれば解決する」

「断る」

「何?」

「ユーザン先生!?!」

「お前は大和一族でもなければここで作られた兵器でもない。だがこの世の中は誰であろうと実力さえあれば出世出来るようになって……勇吾、お前さえ良ければ陰陽師協会に入らないか?」

雄山は先ほどまで敵対していた勇吾にトドメを刺すどころか、スカウトしようとしていた。そのことに目を丸くし、驚愕する東堂。あまりの展開についていけず啞然とする

勇吾。どちらでも似たような反応だった。

「……今はまだその時ではない。トドメを刺さないのであれば俺はここから去るだけだ」

勇吾がヨロヨロになりながらも立ち上がり、外へ出る。

「生きるよ勇吾。お前は勇姿の身体を目的に作られた存在とはいえ、俺はお前のことを気に入っているんだからな」

それを見た雄山は心の中でそんなことを思いながら、東堂を連れ勇吾とは逆方向の奥へと進んだ。

第37指導 第五世代との対面



雄山は骨折した右腕を応急処理し、東堂を見つめながら口を開いた。

「東堂、キツイか？」

「正直にいえば」

「愚痴でも構わねえから今のうちに吐けるものは吐いておけ」

「……ユーズン先生、勇吾さんは無事なんでしょうか？」

「その心配はねえよ。勇吾対策をしてなければ大兄貴達と言えども勇吾を捕らえることは出来ない。もつとも勇吾が逃げることを第一にしていたらの話だ。逃げずに戦えばあつという間に対策されて殺されるだろうな」

「そうですか……」

「勇姿ならば戦つても問題ないが、勇吾には経験つてもものが足りねえ。どれだけセンスがあろうとも経験の差つてのはデカイ。例外的に伯父貴が生まれたての勇姿に負けたが、伯父貴は不意を突かれたのと伯父貴の家族が殺されたのが原因だ」

「確かに不意を突かれたらどうしようもありませんね」

「まあ、愚痴るのはここまでだ。ここから先はゲームでいうボス部屋かもしれない。愚痴ることに気をとられて注意出来なかったなんて言い訳にならないからな」

しばらくの間、東堂は沈黙し、冷たいそよ風が二人の髪を揺らす。

「……ユーザン先生行きましょう、ボスの部屋に」

「よし、行くか」

東堂が決意し、雄山はそれを見て笑みを浮かべる。

そして奥へと歩むと電気が自動で灯り、一瞬眩しさのあまり目を閉じる。

「ようこそ、大和雄山。我が日本セル研究所へ」

白衣を着た少女がいつの間にかそこにいた。その少女は裕二を女体化させたような外見でありながら、目は鋭くそしてその瞳には狡猾な老人のような輝きがあり、雄山と東堂を捉えていた。

「誰だ？」

「私はこの研究所の所長、角田だ」

「……おいおい、ノーベル賞を授与した角田と思っていたがお前はその関係者なのか？」

雄山の目の前にいる少女が角田を自称し、雄山は戸惑ってしまふ。

「関係者ではなく真正正銘、私はノーベル賞を授与した角田だ。だが寿命を迎えそうになり、私は別の身体に脳を移植することを決意した。第三世代の身体から私の脳に適応

する身体を作り上げた結果がこれだ。このような少女の身体を望んだのではない」

「ランダムで作られたってことか」

「ランダムというよりは恐らく私の身体的特徴がこの少女と酷似していたからだろう。大和勇姿の三つ子のうちの男二人の遺伝子はどうかあがいても身長190cmを超える身体に成長するようになっていいる。移植した後、脳と身体、どちらか片方だけでももう片方を受け入れずに拒絶したら身体が異物を作ったり脳の命令が出来なかつたりして死んでしまう。故にこのような少女の身体に移植しざるを得なかつた」

角田が「さて」と眩き、指を鳴らした。

「これから面白いものを見せてやろう」

「面白いものだと?」

雄山と東堂が構え、角田から距離を置き戦闘態勢へと移る。

「第四世代は大和勇姿のクローンでしかないが非常に優秀だ。あの14-0801はドーピングを専門に学習させたが1年を過ぎた時には私よりも詳しくなり、他の者もそれとはまた別の教育をしたら一流を超えるレベルに辿り着いた。何故オリジナルの勇姿が高校受験に失敗して何年も浪人していたのか不思議なくらいだ」

高校受験、即ち中学生が高校に入る為の試験である。高校受験の倍率は割と低く余程欲を出したりしなければ落ちることはない。だが勇姿はその欲を出し、レベルの高い高

校に受験した。その結果浪人することになった。そんな落ちこぼれのクローンが優秀だといっている為に雄山や東堂は首を傾げた。

「何がしたい？」

「それ故にそこから進化することは難しい。新たに勇姿の遺伝子を使った人造人間、つまり第五世代のほとんどが第四世代の低位互換になってしまふ。しかしだ。中には突然変異というものがある。第一世代から能力持ちが生まれ第二世代のキツカケとなつたように第三、第四世代からも突然変異が生まれ、第五世代となる」

角田は一呼吸置き、雄山に笑みを浮かべた。

「今指を鳴らしたのは第五世代を呼び出す合図だ。君らに対する日本セル研究所の歓迎はその第五世代の過激な歓迎だ」

角田がそう言うや否や小柄な裕二と同じサイズの女性型、痩せマッチョの男性型、勇吾のような筋骨隆々の男性型、計3名が雄山達を囲む。その一方、角田は階段を上がり文字どおり高みの見物をし、紙コップに注がれたコーヒーを飲んでいた。

「突然変異を起こす要因が少ないこともあつてか第五世代はその三人だけだ」

「何がどう違うんだ？」

「じきにわかる。かかれ」

角田の合図によつて三人が雄山を襲い、角田のコーヒーを飲む音と共に地面を揺らす

音が同時に響く。

「させないっ!」

封印を解いた東堂がその内、女性型と痩せ体型の二人を押さえ込む。結果として勇吾体型、ただ一人が雄山を襲う形になった。

「この二人は私に任せてください! ユーザン先生!」

「任せた」

雄山が東堂にそう告げると残りの一人を相手にした。

「あの吸血鬼、中々やるではないか。14—0801はよくあの吸血鬼を誘拐できたものだ!」

東堂の動きを見た角田が感心し、頷く。東堂は魔力が非常に少ない為に散々ヘツポコ扱いされていた。しかし今回の動きで東堂に対する角田の評価は改まった。

「流石はキラーマウンテンの従者なだけある。しかしよりによってその二人を相手にするか」

その瞬間、東堂に止められた痩せ体型が目を光らせた。

「っ!?!」

東堂は野生とも言うべき勘でそれを避けるが、避けた場所はマグマのように床が溶け今もなお熱を持っている。

「そいつは使える能力が機械を自分の手足のように動かせるというものでな。機械を体に組み込ませサイボーグとなっている。勇姿が不得意とした遠距離戦もできるということだ」

「ここってサイボーグ研究所でしたっけ？ もう管轄外ですよねそれ」

律儀にも東堂が突っ込み、それを指摘する。しかし角田はそれを無視して口を開けた。

「必要とあらば管轄外でも手を出す」

角田は胸ポケットにあったスイッチを押し、扉が開く。その先に出てきたのは雄山によつて潰されたマフィアの残党達の姿だった。

「こいつらは……俺が潰した中華系のマフィア連中か」

「感動のご対面という奴だ。いい演出だろう？」

「……角田、こいつらにもサイボーグ化させたのか？」

勇吾体型の第五世代を投げ飛ばし、雄山が尋ねる。

「いや、サイボーグ化はしていない。サイボーグ化にはデメリットもあってな。サイボーグ化によつて攻撃力は増すがその分反動も強い。言ってみれば対物ライフルをフルオートにして片手で撃つようなものだ。だから能力でそれを打ち消しているにしか過ぎない」

「ふん、なるほど。それじゃあ従来の怪人化って奴だな？」

「……！ 怪人化の研究までしていることを知っているとは驚きだ」

全くの無表情で角田が拍手を送り賞賛する

「鴨川が怪人化したマフィア達を殺す時に組織のことを話したら困ると言っていたからな。初めこそ鴨川の所屬している妖魔連合会がマフィア達を怪人化させたかと思つたがそんな能力の奴はいない。となれば別の組織が関わっている可能性がある。大和に敵対している組織の九条や堂島、峯山、長峰、安里などの家も考えたが九条や堂島が黒幕なら大和一族にちよつかい出すよりも会長のすい臓がんを治してから挑む。峯山と長峰、安里は大阪、京都、兵庫にいるからほとんど影響を受けない上にそれぞれ三家が敵対して自分たちのことが精一杯でこちらには手を出せない」

その言葉に角田は腕を組んで黙って聞く。

「それらの家が手を出せない状況下でかつそんな技術を持つているのは技術大国日本ですら極一部。ましてや学園都市付近では日本セル研究所だけだ」

雄山のドヤ顔が角田の視界に入り、雄山の推理が始まった。

第38指導 第五世代の能力



「マファイア達は俺に恨みを果たそうにも果たせない。それは何故か。単純に実力差があり過ぎて手を出せなかったからだ。俺を殺せないという現実と無念を晴らそうという理想が矛盾し苦しみ続けていたところに日本セル研究所が勧誘した。力を貸す代わりに雄山を自分たちの手で殺せとな」

「……」

「その力つてのは第一世代の失敗作を人間の身体に組み込ませることだった。しかし人間の身体と妖怪の身体は血液型云々以前にそもそも遺伝子が全く異なる。つまり拒絶反応を引き起こす条件に満たされている。それを満たさないようにするには身体に組み込ませるのではなくそのパーツを寄生生物にさせマファイア達の身体に馴染ませる。マファイア達が寄生されたことによつて別の生き物として生まれ変わり魔力が増大した。違うか？」

「大まかに言えばそんなところだろう」

「さて、そこまで説明した上である男が俺達を導いてくれたことを話す。そいつは日本

セル研究所の裏切り者だ」

「裏切り者？」

「東堂、お前がよく知っている奴だ」

「えっ、誰なんですか!？」

「それを今から話すから黙って聞け」

「はい」

「日本セル研究所は本来、文字どおり日本でセル、つまり細胞を研究する組織だった。だが研究を進めるには金、つまり自分達を支えてくれるスポンサーが必要だ。しかし大和財閥は日本セル研究所から頼まれても専務達の妨害によりスポンサーになることはなかった。金が尽きた日本セル研究所は同時に研究していた薬物を作りそれを足がつかないように売りさばいた。それが鴨川弁当の前型、鴨川宅配業だ」

「ふむ、確かにその通りだな。そこまでは私の指示した通りだ」

「しかし鴨川宅配業は金に余裕が出来たことと滝河の調略を確信して、鴨川弁当へと変更した。妖魔連合会が学園都市を乗っ取り、勇吾が妖魔連合会を消して勇姿として大和一族を乗っ取る……その予定だった。だが一つ誤算があった。鴨川だ」

「え? どういうことですか?」

「鴨川は俺に存在感を示すだけでなく日本セル研究所が関わっていることを調べればわ

かるように仕掛けていた。鴨川ほど頭の切れる男がオーバーを利用して自滅させる為とはいえリスクが大きく、とてもではないが扱い切れるもんじやねえ。まるで自分が犯人だと言わんばかりにな。そして俺は鴨川の安らかに眠る顔を見て違和感を感じ、確信した。鴨川は俺すらも利用して日本セル研究所を潰したかったんじやないのかってな」

「その理由は？」

「記憶があつたんだらう。生まれた当初からな」

「……成る程、確かに各世代の一部は記憶があつたな。だがそれだけでは理由にならんな」

「自分がそんなところで生まれ、理解していたからだ。こんな研究をしている施設は潰すべきだと」

それを聞いた角田は鼻で笑い、口を開いた。

「こんな研究とは随分な言い様だ……とても言えいいのか？ 生憎だが私はこの研究が非倫理的なことは自覚している。それに使う目的も私怨によるものでろくなものではないことも自覚している」

「だつたらなんで……!?!」

「何故だと？ 人間の未知なる進化を広めるためだ。日本セル研究所は元々そういう目的で作られた。だが大和財閥は寿命が伸びたり、身体能力が上がったりなどのメリット

をどれだけ説明してもちつとも理解してくれず、スポンサーとなるのを拒んだ。いや第一世代のような化け物じみた体になることを恐れたのだろう。……愚かなことだ。いずれ人間は進化していきSF映画に出てくる宇宙人のような体になる。吸血鬼、お前もそんな体になったら嫌だろう?」

「えっ!?! まあ……はい。そうですね」

「私が大和財閥に拘るのはその研究成果を広める為だ。例え失敗に終わっても私の研究は無駄にはならん。私の研究成果が聖なる者、悪し者、どちらの手に渡ってもこの技術が広まり地球の未来を救う薬となるのだ」

「果たして広められるのか? 大和一族はそういう情報を封じるのは得意な方だぞ?」

「情報を封じるにはその情報を深く知ってからでなければ出来ないことくらい私にも理解している。そしてその過程で研究成果は本当に正確であるかを調べなければならぬ。否応なしに私の研究成果は広まっていくという訳だ」

「何故、俺達を殺そうとした? どのみち広まるんだつたら俺達を殺すメリットはないはずだ」

「大和一族を殺すのは単純な話、後継者候補のお前達が居ては不都合であり、消せばよりスムーズに研究成果を広めさせることが出来る。ただそれだけのことだ」

角田がそう冷たく言い放つと雄山は納得し、頷いた。

「なるほど、それじゃ再開といこうか」

雄山が左腕を振るうと、真空の刃が第五世代達や元マファイア達を切り刻んだ。

「血祭りの再開をよ」

雄山はかつてないほど狂気に満ちた笑みを浮かべ、東堂がそれを見てドン引きし、雄山から距離を置いた。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

「流石だな大和雄山。だが無駄だ。第五世代は超能力者故に第四世代ほどの頑丈さは得ることはなかった。しかしその欠点を補う為に回復力を高め、多量出血で死ぬことはない。生半可な切り方では命取りだぞ？」

角田の言葉とともに第五世代達がゾンビのように起き上がると傷口がすぐに塞がり出血が止まる。

「厄介な奴らだが空掌斬で傷つくあたり勇姿どころか、勇吾の下位互換じゃねえかよっ！」

雄山が勇吾体型の第五世代を殴る。ダメージこそないが雄山の攻撃に押され後退してしまふ。

「な、めるな！」

第五世代達は焦り、勇吾体型以外の二人が東堂を襲う。

「それはこっちのセリフ！」

東堂は二人の頭を殴ることによって揺らし脳震盪を起こす。二人が否応なしに倒れ、地面に接吻した。

「だから無駄だ。第五世代達はお前達を倒すまで何度でも立ち上がり、復活する」

すぐに勇吾体型の第五世代は雄山を弾き、他の二人も地面から立ち上がり雄山達を襲う。

「角田、成功するはずの実験で失敗しても何度も実験すれば成功になる。それは科学者たるお前が一番理解していることだろ？」

「果たしてそうかな？ 第三世代以降はの学習能力の高さと戦闘センスが良いように組み合わさり、戦えば戦うほど強くなる」

勇吾体型が雄山に突っ込むと雄山がカウンターを浴びせる。

「チツ、面倒な奴らだな」

しかし先ほどとは違いまるで効いておらず角田の「戦えば戦うほど強くなる」という発言が真実であることが判明し、雄山は舌打ちした。

▲▼▲▼☆☆☆☆▲▼▲▼

「そして、20—0425の能力が発動する」

「誰だよそれは？」

「そこにいる女性型の第五世代のことだ。そいつはその中でも超能力に特化している」
「超能力？　今まで使わなかったのは何故だ？」

「20―0425に限らず第五世代の能力はそれぞれ違うが大和勇姿の能力『術・能力無効化』の能力よりも優れている場合がある。20―0425はその優れた例だ」

「そんなものがあるのか？」

「私とてそんな能力があるものかと何度も繰り返し、実験した。だがその能力『確定事項』は『術・能力無効化』の上位互換だということに変わりはない」

「『確定事項』？」

「ある条件を満たすと定めた事柄が確定する能力だ」

「……具体的によくわかりません」

「例えば、吸血鬼。お前が20―0425に向けて魔法を使つたでしょう。20―0425が『吸血鬼が魔法を使う時』という条件と『吸血鬼の魔法は失敗する』という結果を定める。すると吸血鬼の魔法は失敗する。つまり条件さえ満たせば何でもできるという能力だ」

「う、ウソオっ!？」

「理論上は『息をする』と言う条件だけで『この地球を滅ぼす』という結果を出すことが出来る。だが『確定事項』を使用した後は必ず反動が来る。特に自分の力量の割に条件

が緩い、あるいは結果が難しいほど反動が大きくなる。これは『確定事項』に限らず超能力者にも言えることだ」

「なるほど、それで反動が大き過ぎて今まで使えなかったのか」

「その通りだ。だが吸血鬼にダウンを貰ったおかげで20—0425はパワーアップし、その能力が使えるようになった訳だ」

「なるほどな」

「そして説明が終わった。……これによって20—0425の定めた『確定事項』の条件『この部屋にいる自分を含めた第五世代達がダウンさせられた』『自分がパワーアップした』『自分以外の者がこの能力を説明する』の三つの条件が満たされたことにより、結果『100体の第四世代がこの部屋の空いているスペースに瞬間移動する』が発動する」

雄山はわらわらと出てくる勇姿のクローン達を見て目を丸くし、絶望してしまふ。

その瞬間、東堂の目の前にいた20—0425が倒れてしまい更に東堂が狼狽えた。

「おっと、どうやらまだこれでも条件が緩すぎたようだ。能力レベル4に昇格してもこれは無理か」

それを見ても角田は動じず、冷静に屍となった20—0425を見つめた。

「レベルだど？」

「能力者によって能力の威力や能力の使った反動の大小は異なる。そこで私は能力にレ

ベルと言う目安をつけた。能力の威力が大きく、反動が小さいほどレベルの数値が高くなる……つまり、能力が優れているほどレベルも高くなるということだ。参考までに大和勇姿の能力『術・能力無効化』はレベル3だから相当優秀なレベルと言えるだろうな」
角田が第四世代達に合図を送ると第四世代達が雄山達を襲撃し、雄山達を追い詰めた。

「……までか……」

雄山の呟く声に無念の気持ちが入められ、東堂は絶望に屈して目を瞑った。

第39指導 逆転



絶体絶命のピンチ。まさしくそれは今の雄山達の状況に相応しい言葉だった。

「まさか俺の人生がこんな形で終わるとはな。これも人殺しの運命か」

ここから東堂を脱出させたとしても無理だろう。逃げた先にこの第四代こと勇姿のクローンが待ち構えている可能性が高い。自分ならばともかく東堂の実力では勇姿のクローン相手では勝ち目は無い。それだけならばまだいいが逃げる隙すらも見つけられずに殺されてしまう。

「(守るべきものを守ろうとしても人を殺したら不幸になるってのは本当みてえだ。最高に俺は不幸だぜ)」

雄山はそう思い詰め、サバイバルナイフを取り出し目の前にいる100人の第四世代達に向けた。

「東堂、てめえは外に出ろ」

「え？ まさか、ユーズン先生。この数相手に一人で挑むんですか!? 無理ですよ!」

「無理なことは百も承知だ。こいつらの数が百だけにな」

「笑えませんが、ユーザン先生！」

「どの道この状況じゃ俺は助からねえ。だがお前は違う。東堂、お前にはやるべきことがある。この現状を大兄貴達に伝える。ただそれだけをしろ。俺はそれまでの間時間稼ぎをする」

それは東堂をここから脱出させることだった。確かに逃げられる可能性は低い。だが逃げられる可能性はゼロという訳でなく可能性のあることだ。雄山はそれに賭けた。

「そ、そんな!? ユーザン先生の事を置いていけませんよ!」
「いいから行け!」

雄山のドスの効いた声が響き、東堂が扉に近づこうと走る。

その瞬間、轟音が雄山達の耳に響き渡り、扉が破壊された。

「どうやら招かざる客のようだな」

それを聞いて最も驚愕しているのは雄山ではなく角田だった。角田が驚愕しているその顔を見て雄山は角田にとってイレギュラーが起きたのだと感じていた。

「やれやれ、ここは年寄りへの労りってもんがないのかい?」

それは雄山達の師匠、春の仕業だった。春は雄山達が出た後、雄大達を問い詰め、還らずの森と日本セル研究の中へ侵入してきたのだ。

「し、師匠?」

「全く、少し見ていない間にそんな体になったのかい？　少しでも前線から離れるとこのザマかい！」

「……返す言葉もない」

「ふん、それでこのウマシカ丸の軍団はなんだい？」

雄山はウマシカ丸とはどういう意味なのか手間取る。それが勇姿クローンのことだと理解した。このクローン達はどんなに似せても偽物でしかなく、馬鹿丸出しにしか見えず馬鹿丸ウマシカと名付けたのだと推測した。

「勇姿のクローンだ。この研究所で作ったんだとよ」

「そうかい、そうかい。それじゃあ儂らの敵ということじゃな」

「そう言うことだ」

雄山がそう頷くと春が腕をクロスにして力を溜める。

「何をしている、やれ！」

角田は春の重圧を感じ取り、勇姿のクローン達に春を襲わせるように指示を送る。

「なるほど、単刀直入にしか突っ込めない馬鹿じゃな。だったら好都合」

勇姿のクローンはあくまでもクローンでしかない。はつきり言えば人生経験がなさ過ぎた。雄山にその弱点を突かれたことを生かせず、角田の命令に従う駒となったのが彼らの一番の失敗であった。

「ーっ!」

声にならない悲鳴をあげ、勇姿のクローン達のほとんどは絶命し息絶える。残ったものは阿鼻叫喚しながらも東堂や雄山を襲って人質にしようと抵抗していた。

「どっ! いくんじや?」

しかしその抵抗も無駄に終わり、春の空掌によって血吹雪が舞い、勇姿のクローンは全滅した。

「やれやれ年を取るたびに空掌の威力も落ちて嫌だね。全盛期ならもつと手っ取り早く殺せたというのに」

物騒なことを呟きながら返り血を拭き、払う春の姿はまさしく修羅であった

「こんなこともあろうかと準備して置いて正解だった」

角田が白衣から野球ボールくらいの大きさのボールを取り出し、それを雄山達に向けて投げた。

「やれやれうるさい奴だね」

春がそれを掴み、自然を流れる川のようにボールを角田の元へ返す。だがすぐに春の元へと戻って行く。

「私も『確定事項』の持ち主、それも20—0425よりもレベルが上だ。これを話せばこの場の空間内で私は一定時間無敵となる。無敵時間が継続している間に瞬間移動を

して撤収させて貰おう……さらばだ！」

春がボールをキヤッチしたと同時に角田が日本セル研究所から消える。その刹那、ボールが開き体長5cmにも満たない蜂が次々と現れ、雄山達を見つけるや否や襲いかかった。

「これも計算のうちって言うのか？ 嫌味な野郎だ」

顔を顰めながら雄山はサバイバルナイフをしまい、破魔札を取り出してボールにそれを放つ。すると蜂が凍りつき動かなくなる。ただし、極少数であったが。

「氷属性の破魔札が駄目なら、炎属性の破魔札で対処するしかねえな」

別の破魔札を出し、投げようとすると春がそれを止めた。

「止めておくんだね。あの虫は魔力を吸収し、自らの肉体を強化させている。破魔札を使えば返って強くなるのがオチだよ」

「とはいえ、空掌じゃ相手が小さすぎる。師匠、なんとか出来ないのか？」

「今それをやっている所だよ」

雄山が春を見ると春の腕が残像を残し、幾つもの腕が生えていたように見えた。

「とはいえあの巣を破壊しないと無理だし、雄山。やってくれるな？」

「もちろんだ」

雄山が腕を後ろに引き空掌の構えに入る。

その瞬間、雄山の背後から声が響いた。

「待ってください、ユーザン先生！」

雄山が振り向くとそこには長門と裕二がいた。

「裕二、来るのが遅いぞ」

「お祖母ちゃんが割り込んできたから遅くなったんだよ。奈恵ちゃんを行かしたり、置いていくわけにもいかないからね」

「そう言うことか。それなら仕方ねえな。ところで長門、何の根拠もなく待てと言った訳じゃねえんだろ？」

「その巣を壊したら巣の中にいる数えきれない程の蜂達が飛び出して私達を襲う可能性があります。私の超能力で巣を圧縮して巣ごと虫を殺します」

「長門、そんな冷酷な意見が言えるなんて虫に相当恨みでもあるのか？」

「ええ。虫は大嫌いですから」

長門が淡々と答え、雄山は苦笑した。

「よし、そこまで言うならやってみる」

雄山の許可を貰った瞬間、長門は巣をパチンコの玉の大きさまで圧縮し、蜂達を殺した。
た。

「角田を逃したのは痛いけど、日本セル研究所の全貌も明らかになった以上用はない」

そのパチンコの玉を拾い上げ、回収する。

「そうだね……とところでお祖母ちゃんは？」

「さつき、妖怪達が現れないように殲滅させると言つて奥に行っちゃいましたよ？」

東堂がそう答えるとその場にいた全員が溜息を吐いた。

「師匠らしいな」

雄山の言葉に全員が頷き、外を出る。

第40指導 章末

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

某所にて、一人の少女が何かに追われるように逃げていた。

「くそ、大和勇姿の細胞ですら、これほどの傷はキツイか」

角田がそう愚痴り、歩くのをやめて脇を抑える。

「(せめて第四世代を一体連れて来れば良かったのかもしれないが、余計に条件が厳しくなってしまう)」

その瞬間、角田は目の前が真っ暗になり、真正正銘角田として生きてきた人生やこの少女の身体を乗っ取って生きてきた人生が頭の中を巡る。

「これは走馬灯、か？」

口を動かし、角田が状況を確認すると自分を追っている男達の声が聞こえた。

「……もう、終わりか。人間、死ぬというのはこういうことを言うんだらうか？」

角田はその状況に絶望し、能力を作動させ逃亡する。しかし、角田が移動先の景色を拝めることはなかった。

◆◆◆☆☆☆☆◆◆◆

三日後、陰陽師協会本部会議室にて陰陽師協会の幹部会が開かれていた。ただしその中に陰陽師協会会長の九条はいなかった。

「九条会長はいつも通り不在だ。故に筆頭幹部たる私が会長に代わって話を進める。構わないな？」

九条がいない。それは即ち九条の代わりに会長代行の雄大が話を進めることでこの幹部会が纏まることになる

「無論だ」

「会長がいない以上、大和殿がやるのが筋ですしな」

会議室が騒然とし、勝手に話し始める幹部達。雄大達はそれを見て呆れていた。

「それで会長代行。今日の会議のテーマは？」

そんな最中透き通る声で雄大に質問したのは裕二だ。裕二は再び性を九条にしてこの場にはいない九条に代わって九条家の人間として来ていたのだ。

「ああ。先日、私の弟である大和雄山が過激な妖怪の組織、妖魔連合会だけでなく日本セル研究所なる妖怪達を生み出す研究所を見つけ、雄山指揮のもとそれを潰した」

「日本セル研究所というところのノーベル賞を受賞した角田の所属している研究所か？」

「そのようなものだったな。しかし、会長代行や裕二殿の弟がそこまでやれるとは想定外ですな」

「またもや騒然とし、雄大はそれを無視して会議を進めることにした。」

「そこでだ。九条会長が倒れている以上、会長代行である私の権限で雄山やその弟子達を西智学園都市部の陰陽師に任命する。異論はないな？」

それを聞いた一人の幹部が挙手する。

「何かな？ 堂島殿」

「貴殿の弟君、大和雄山が優秀な陰陽師だとわかりました。しかし、その弟子達と言うのはどのような方々で？」

「将来性で言えば伝説の暴力団殺し、マファイア・キラマウンテンにも迫る素質の持ち主だ。二人ともな」

「では会長代行、その弟子達は見たことがあるのですか？」

「ああ。一人は大和宗家に乗り込んできた50もの妖怪達を単体で殲滅し、もう一人は日本セル研究所の妖怪達を雄山と共に殲滅した」

「それならば、私の所の時光も陰陽師にして頂けますか？」

「無理だ」

「理由をお聞きしても？」

「九条会長が入院する前に時光を陰陽師に任命しないよう九条会長から言われている」

「会長代行。何故九条会長は時光をお認めにならないのですか？ 时光は陰陽師に入れ

でもすぐに活躍することが確信出来るほどの逸材です！」

「その理由は私ではなく見舞いの品でも持って九条会長にお聞きになった方が早い」

「会長代行！」

「さて、他に異論がなければ次の話に移る」

時光の話はもう終わりだ、と言わんばかりに話しをぶった切る。一幹部たる堂島はその雰囲気逆らえず座る。

「あ、会長代行。報告良いでしょうか？」

そんな最中、裕二が挙手し視線を合わせた。

「何だ？」

「日本セル研究所に関する報告です。日本セル研究所は会長代行のもう一人の弟君である大和勇姿の遺伝子を使い、クローンやホムンクルスを作成し、そのクローン達が各地で大和勇姿と名乗り大和一族の乗っ取りを企んでいたようです」

「何故会長代行の弟君の遺伝子を？」

「会長代行の弟君、大和勇姿に肉弾戦で敵うものはいない上に、術や能力を無効化されてしまう。我々陰陽師とは相性が悪い陰陽師殺しの兵器を作ろうとしていたのでしよう」
「確かに妖怪を作るよりも効率的だ。だが会長代行。何故大和宗家に妖怪達が押し込んで来たのですか？ 日本セル研究所は既に勇姿のクローンを作り上げていたのに関わ

らず、それを使わなかったのには理由があるのではないのでしょうか？」

その幹部の言う事には一理あり、雄大は間を空け、答えた。

「それもそうだな。この件は大和一族が調査する」

その後も会議室で延々と、会議が続く。